

2022年度
大阪府手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

～ 保護者の体験と思いに学ぶ ～

報 告 書

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

はじめに ～企画にあたって～

2018年度から毎年実施してきた「大阪府手話言語条例シンポジウム」は、今年度で5回目を迎えました。2019年11月30日に第2回を開催した後、世の中はコロナ禍による自粛へと向かいました。第3回からは遠隔での開催をつづけてきましたが、それによって、全国からの参加が可能となり、日本手話のあふれる早期支援の意義を多方面の方々にお届けする機会となりました。

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」が誕生したのは、2017年6月です。同年3月に施行された大阪府手話言語条例の施策として、日本財団からの3年間に亘る助成を受け、公益社団法人大阪聴力障害者協会と大阪府との連携・協力によって運営されました。未就学児を対象とする「こめっこ」は土曜日開催ですが、2018年には0歳～3歳を対象とする「べびこめ」の平日活動も始まり、昨年度のシンポジウムのテーマであった“ZERO TO THREE”の子どもたちとご家族への支援に力を注いできました。その後、2020年2月にはNPOこめっこ(特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構)が設立され、同年4月1日より、「こめっこ」「べびこめ」活動を引き継ぎました。現在の「こめっこ」「べびこめ」は、大阪府「こめっこプロジェクト」の一環として実施されています。

また、2020年度より日本財団から新たな助成を得て、「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」に取り組むことになりました。言語脳科学、言語獲得、学習能力(理解力・思考力)、心理発達(人格形成)の4分野から、手話言語を獲得・習得する子どもたちにアプローチする研究で、その目的は、きこえない子どもたちの真の言語力を適正に評価することです。その一貫として、就学後の聴覚障害児を対象に手話習得支援等を行う活動「もあこめ」も行っています。これにより、手話のあふれる支援の場「こめっこ」は、乳児期から児童期・青年期に至るまで、きこえない子どもたちの手話言語獲得・習得を一貫して支援し、参加ご家族の協力を得て、実証研究のためのデータの蓄積を進めることが可能になりました。

今年度の大阪府手話言語条例シンポジウムは、「保護者の体験と思いに学ぶ」をテーマに、2022年12月から2023年1月にかけて遠隔にて実施しました。今回も、事前配信(オンデマンド配信)による第Ⅰ部と、オンライン開催による第Ⅱ部で構成され、全国から800名近い申し込みをいただきました。

第Ⅰ部(12月26日～1月28日)は、「こめっこ研究の進捗報告」と「こめっこ参加ご家族の声～赤ちゃんから小学生まで～」で構成されました。20家族のメッセージを活動映像と共にお届けしました。

1月28日の午後に開催された第Ⅱ部は、コーディネーターの私が、NPOこめっこ常務理事久保沢寛氏と共に進行役を務めました。話題提供をお願いした3家族の保護者からは、「こめっこ出会う」「聞こえない子とパパ、聞こえるママの言語獲得習得記録」「人工内耳も手話も」のタイトルで、それぞれに報告をいただきました。15分という限られた時間に籠められた内容の深さは、誰も心に響くメッセージでした。つづいて、指定討論者にお迎えした木村晴美氏(国立障害者リハビリテーションセンター学院)には「当事者」の視点から、前川和美氏(関西学院大学手話言語研究センター)には「手話言語教育」の視点から、明確で示唆に富むご意見をいただきました。さらに研究プロジェクトメンバーからのコメントとして、「耳鼻咽喉科医の視点から」(阪本浩一氏 大阪公立大学)、「言語脳科学の分野から」(酒井邦嘉氏 東京大学)、「言語獲得の分野から」(武居渡氏 金沢大学)からご発言があり、その後、話題提供者とNPOこめっこ代表理事物井明子氏も加わって、視聴参加者からの質問への回答を含めて、ディスカッションを展開しました。

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、今年度6月に5周年を迎えました。スタッフの熱意と工夫でコロナ禍を乗り越え、多くの子どもたちが澁刺とした姿で家族と共に集う場を創造してきました。今回のシンポジウムでは、そうしたご家族の生の声をお届けできたことが本当に良かったと感じています。ご協力いただきました保護者の皆さまに、心からお礼を申し上げます。

今回のシンポジウムの内容を報告書にまとめました。情報保障のための資料提供など、ご登壇くださった先生方には大変お世話になりました。深く感謝いたします。巻末にはアンケートの報告も掲載しております。NPOこめっこのホームページでも紹介する予定ですので、ご紹介いただければ幸いです。

NPOこめっこは、きこえない子どもたちが乳児期から家族と共に手話言語に出会える環境を保障すること、手話を学び、手話で学ぶことの重要性についての認識が広がることを願って、今後も歩んで参ります。

2023年3月

大阪府手話言語条例評価部会長
「こめっこ」スーパーバイザー
河崎佳子(神戸大学)

手話言語を獲得・習得する子どもの力 研究プロジェクト

～保護者の体験と思いに学ぶ～

企画主旨

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、今年度6月に5周年を迎えました。未就学児を対象とする“べびこめ”“こめっこ”の活動に加え、2020年度からは小学生を対象とする“もあこめ”が「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」（日本財団助成）の一環として実施されています。スタッフの熱意と工夫でコロナ禍を乗り越え、多くの子どもたちが澆刺とした姿で保護者と共に集う場を創造してきました。今回のシンポジウムでは、活動に参加していただいているご家族にこれまでの体験と思いを語っていただきます。I部では、研究の進捗報告とご家族からのメッセージを活動映像と共にお届けします。II部では、3組のご家族に話題提供をお願いし、手話言語の専門家を指定討論者に迎え、さらに研究プロジェクトのメンバーとこめっこスタッフも加わってディスカッションを展開します。

第I部

2022年12月26日(月)～2023年1月28日(土)12:00まで

事前に配信する動画視聴（オンデマンド配信）

- こめっこ研究の進捗報告
- こめっこ参加ご家族の声
-赤ちゃんから小学生まで-
- こめっこ紹介動画（再配信）



参加無料

手話通訳・字幕あり

申込方法

下記いずれかの方法
でお申込みください



・申込フォーム：QRコード

・申込フォーム：こめっこHPより

<https://www.comekko.com>

・FAX:

06-6748-0089

参加申込書(最終頁)にご記入の上、FAXにてお送りください

・E-mail:

symposium@comekko.org

氏名(ふりがな)、メールアドレス、TEL(FAX)番号、所属先、職種(あるいは立場)をご記入の上、お送りください

第II部

2023年1月28日(土)13:00～16:30

Zoomを使ったオンライン開催

- 話題提供 — 3家族それぞれの体験と思いを語る —
- パネルディスカッション
- ◆ 指定討論
「当事者」の視点から
「手話言語教育」の視点から

木村 晴美 氏

前川 和美 氏



木村 晴美 氏

国立障害者
リハビリテーション
センター学院
手話通訳学科教官



前川 和美 氏

関西学院大学
手話言語研究センター助教
関西デフ・フリースクール
「しゅわっち」代表

申込締切

2023年1月21日(土)

～ 保護者の体験と思いに学ぶ～

第Ⅰ部 事前配信

-オンデマンド-

- ◆ 主催者挨拶 オリエンテーション 物井 明子 (NPOこめっこ 代表理事)
- こめっこ研究の進捗報告
 - ・河崎 佳子 (神戸大学教授・NPOこめっこスーパーバイザー)
 - ・中尾 恵弥子 (NPOこめっこ副代表理事) ・久保沢 寛 (同常務理事) ・和田 夏実 (同研究員)
- こめっこ参加ご家族の声 ー赤ちゃんから小学生までー
- こめっこ紹介動画 (再配信) ・2021年度シンポジウム事前配信動画

第Ⅱ部 パネルディスカッション

★Zoomを使ったオンライン開催

2023年1月28日 (土) 13:00~16:30

12:30~13:00 参加者は指定のZoomに入室してください

13:00~16:30 話題提供・パネルディスカッション

*途中休憩を挟みます

コーディネーター：河崎 佳子・久保沢 寛

- 話題提供 ー3家族それぞれの体験と思いを語るー

① 小橋さんご家族

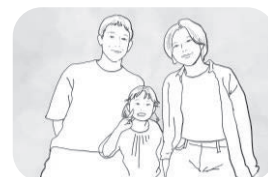
『こめっこと出会って』

② 中川さんご家族

『聞こえにくい子とパパ、
聞こえるママの言語獲得習得記録』

③ 奥田さんご家族

『人工内耳も手話も～こめっこと歩んだ3年間～』



- パネルディスカッション

- ◆ 指定討論

1. 「当事者」の視点から

木村 晴美 氏

国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官

2. 「手話言語教育」の視点から

前川 和美 氏

関西学院大学手話言語研究センター助教/ 関西デフ・フリースクール「しゅわっち」代表



パネリスト
阪本 浩一 氏

大阪公立大学大学院
耳鼻咽喉病態学
准教授



パネリスト
酒井 邦嘉 氏

東京大学大学院
総合文化研究科
教授



パネリスト
武居 渡 氏

金沢大学
人間社会研究域
学校教育系
教授

- NPOこめっこから 物井 明子

研究プロジェクト

言語脳科学・学習能力（思考力）分野 代表 酒井 邦嘉

手話を第一言語として概念獲得する環境にある子どもを対象に、言語理解に基づく概念や自然法則を把握する力や、時間や空間の変化などを推論する力を調査することにより、手話で育つ子どもたちの評価法や教育環境の改善に繋げていきます。

就学前児や小学生を対象に、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題を作成し、言語を通してさらに複雑な概念を獲得し、そこから思考の深まりにつながっていくかについて、各個人の手話や日本語の獲得進捗を指標として比較検討します。また、問題を解いている最中の脳活動をMRI装置で検出するため、大人と子ども（小学校高学年以上）を対象として、言語野を中心とした脳機能の定量的な解析を行う予定です。

学習能力（理解力）分野 代表 武居 渡・河崎 佳子

手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成しています。

質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的变化を評価します。

言語獲得分野 代表 武居 渡

こめっこに来ている子どもたちの手話言語力と日本語力を縦断的に評価し、その成長を追跡しています。

手話の文法力と語彙力を測るために「日本手話文法理解テスト」と「手話語彙流暢性検査」を、言語を使って他者と適切にやりとりする力を評価するために「質問応答関係検査」を、年に1回ずつ行っています。同時に、手話を獲得して育つ子どもたちの日本語力についても、文法力（J-COSS）や語彙力（絵画語彙発達検査）を用いて検証していきます。

心理発達（人格形成）分野 代表 河崎 佳子 （研究統括責任者）

こめっこが支援する子どもたちの心理発達を、情緒、認知、コミュニケーションなど複数のラインから捉える縦断的研究を、観察、インタビュー、検査によって行っています。

日本手話での実施を検討した上で、「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」（3歳までは半年に1回、以降は年1回）と「K式発達検査」（概ね2歳以上を対象に年1回）を行っています。昨年度から手がけた「心の理論」課題の日本手話劇版が完成し、4～5歳以上を対象に施行しています。来年度からは、小学生高学年を対象に性格検査等を織り込む予定です。

目 次

はじめに

企画にあたって	河崎佳子	1
---------------	------	---

シンポジウム次第		3
----------------	--	---

目次		6
----------	--	---

主催者挨拶	物井明子	8
-------------	------	---

第 I 部 事前配信

こめっこ研究の進捗報告

1. こめっこ研究プロジェクトの全体像と流れ	河崎佳子	12
2. 心理発達(人格形成)分野	中尾恵弥子	14
3. 言語獲得 学習能力(理解力)分野	久保沢 寛	16
4. 言語脳科学 学習能力(思考力)分野	和田夏実	19

こめっこ参加ご家族の声 ～赤ちゃんから小学生まで～		21
---------------------------------	--	----

第 II 部 パネルディスカッション

【話題提供】 — 3 家族それぞれの体験と想いを語る —

『こめっこと出会って』	小橋史佳・小橋千穂子	42
-------------------	------------	----

『聞こえにくい子とパパ、 聞こえるママの言語獲得習得記録』	中川十儀・中川互世	47
--	-----------	----

『人工内耳も手話も～こめっこ歩んだ3年間』	奥田直樹	52
-----------------------------	------	----

【指定討論】

- 「当事者」の視点から 木村晴美 57
「手話言語教育」の視点から 前川和美 62

【研究プロジェクトメンバーのコメント】

- 「耳鼻咽喉科医」の視点から 阪本浩一 67
「脳科学」の分野から 酒井邦嘉 70
「言語獲得」の分野から 武居 渡 71

【ディスカッション】 74

【資料】

- 資料-1 スライド 90
資料-2 参加人数状況 104
資料-3 アンケート報告 105

- あとがき 河崎佳子 144

【主催者挨拶】

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

代表理事 物井 明子

本日は 2022 年度大阪府手話言語条例シンポジウムへのご参加を誠にありがとうございます。特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構、NPO こめっこ代表理事の物井明子と申します。シンポジウムの主催者代表としてご挨拶申し上げます。

本シンポジウムは日本財団の助成、大阪府の後援、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力をいただき開催されております。今年度も、NPO こめっこスーパーバイザーの河崎佳子先生が中心となって、常務理事の久保沢と一緒にこのシンポジウムをコーディネートしてくださいました。

さて乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、今年度6月に5周年を迎えました。これもひとえに多くの関係者の皆さまのあたたかいご支援と、活動にかかわるスタッフの熱意のおかげです。

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、未就学児を対象として 2017 年度にスタートしました。そして、2020 年度からは「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」の一環として、小学生を対象とする「もあこめ」活動を実施しています。この研究プロジェクトは日本財団の助成事業で行っています。

今年度のシンポジウムのテーマは「保護者の体験と思いに学ぶ」がテーマです。活動に参加しているご家族にこれまでの体験と思いを語っていただきます。

第Ⅰ部において、今年度は2つの事前配信を準備しました。1つめは、研究プロジェクトの進捗状況の報告です。統括責任者である神戸大学教授の河崎佳子先生から全体説明があったのち、NPO こめっこ副代表理事の中尾恵弥子氏、常務理事の久保沢寛氏、研究員の和田夏実氏の3名から、心理発達、言語発達、学習能力、言語脳科学の順で、分野毎の進捗報告を行います。2つめは、今年度のテーマである、活動に参加しているご家族の「こめっこ」に対する声を映像にまとめました。保護者の生の声をぜひご覧ください。

研究プロジェクトの報告、保護者のお話に加えて、昨年度配信した NPO こめっこの具体的な活動内容を紹介した映像を再配信しますので、よろしければご覧ください。

第Ⅱ部は、Zoomによるオンライン配信となります。コーディネーターは河崎先生と久保沢です。

はじめに話題提供として、こめっこ活動に参加している3組のご家族より、体験と思いを語っていただきます。次に、指定討論として、国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官の木村晴美先生に「当事者」の視点から、関西学院大学手話言語研究センター助教の前川和美先生に「手話言語教育」の視点からお話いただきます。そして、研究プロジェクトチームから、大阪公立大学大学院耳鼻咽喉病態学准教授の阪本

浩一先生、東京大学教授の酒井邦嘉先生、金沢大学教授の武居渡先生、NPO こめっこから私、物井も加わって、ディスカッションを行います。

インターネット配信を行うことで、全国のみなさまに「こめっこ」についてお伝えし、ご家族の思いを届けることができますことをとても嬉しく思います。このシンポジウムが、きこえない子どもたちとご家族の笑顔につながるようにと考えております。

有意義なシンポジウムとなりますよう、皆様のご協力・ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

第 I 部

こめっこ研究の進捗報告

こめっこ参加ご家族の声
～赤ちゃんから小学生まで～

こめっこ研究の進捗報告

1. こめっこ研究プロジェクトの全体像と流れ

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授
研究統括責任者 河崎佳子

こめっこのスーパーバイザーであり、研究プロジェクトの統括責任者を務めている立場から、本研究プロジェクトの全体像と流れについて、簡単にお話しいたします。

きこえない子どもたちの母語、すなわち自然に習得できる言語は、手話言語、sign language です。日本においては、日本手話ということになります。そして、きこえない子どもたちにとって、手話言語の獲得は、理解力や思考力を含むさまざまな認知発達を支え、対人関係や自己認識など人格形成にも重要な影響を及ぼします。

しかし、聴覚に障がいのある子どもがそれを自然に習得できる環境は確保されていません。また、その影響や効果についての実証的研究はほとんどありません。

そこでNPO こめっこが実施する、手話言語獲得習得支援事業「こめっこ」「もあこめ」を舞台に、心理発達、脳科学、言語獲得、学習能力の4分野から「手話言語を獲得・習得する子どもたちの力」にアプローチする研究プロジェクトが企画され、日本財団の助成を得て2020年にスタートしました。

その目的は、聴覚に障がいのある子どもたちの真の言語力、つまり理解し思考する力を適正に評価することにあります。

研究プロジェクトの全体像をスライドに示しています。こちらはNPOこ

スライド1

課題

きこえない子どもたちの母語は、手話言語である。

手話言語の獲得は、理解力や思考力を含むさまざまな認知発達を支え、人格形成にも影響を及ぼす。

しかし、手話言語を自然習得できる環境は確保されていない。

また、その影響や効果についての実証的研究はほとんどない。

2022年 大東洋建設株式会社（株）

スライド2

研究分野

2022年10月現在

脳科学 代表 酒井 邦嘉 東亜大学大学院 社会文化研究科 教授	心理発達 (人格形成) 代表 河崎 佳子 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教授	言語獲得 <手話言語力> (日本語) <日本語力> 代表 武居 渡 神戸大学 人間発達環境学研究科 学芸部長 教授	学習能力 <理解力> <思考力> 代表 武居 渡 河崎 佳子 代表 酒井 邦嘉
---	--	---	---

2022年 大東洋建設株式会社（株）

めっこのパンフレットに掲載されているもので、NPOのホームページでもご覧いただけます。

ここで、これまで申し上げてきた4つの研究分野の内、「学習能力」分野について少し説明を加えたいと思います。

私たちの研究プロジェクトにおいては、「学習能力」を、論理的思考、推察、分析、読解、表現、コミュニ

ケーションなど、学習するための基盤となる力と捉えています。将来的には、この「学習能力」を測るために、知識や体験のみに左右されず、物事がどのように繋がっているのかや、自然科学の広がりや規則性を発見するなど、思考のひらめきを測る学習能力テストにつなげていく予定です。具体的には、ミニ講義を実施した後、設問に答えてもらう方法を想定しています。

現在、〈思考力チーム〉は、そうした研究の前段階として、母語が日本手話であるか否かにかかわらず、学習能力の前提となる、認知、思考するためのスキーマ、判断能力等を測るテストを作成しているところです。

一方、〈理解力チーム〉は、手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、日本手話によるモノログを用いた検査を作成し、その施行を始めているところです。

目 的

手話言語獲得習得支援事業「こめっこ」「もあこめ」を舞台に、
脳科学、心理発達、言語獲得、学習能力の4分野から「手話言語を
獲得・習得する子どもの力」にアプローチする研究プロジェクトが
、2020年に企画された（日本財団助成事業）。

**聴覚に障がいのある子どもたちの真の言語力（理解し思考する力）
を適正に評価することを目指す。**

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

研究チームの構成メンバーをスライドに示しましたので、ご覧ください。

このあと、分野毎に、各研究チームのメンバーから、研究内容や進捗状況について報告をいたします。

尚、来年度のシンポジウムでは、データを提示しながら具体的な報告ができるよう準備していく予定です。私からのお話は、以上です。

スライド5

「学習能力」分野について
<思考力チーム> と <理解力チーム>

本研究プロジェクトにおける「学習能力」：
論理的思考、推察、分析、読解、表現、コミュニケーションなど、学習するための基盤となる力

<思考力チーム>
将来的には、知識や体験のみに左右されず、物事がどのように繋がっているのか、自然科学の広がりや規則の発見など、思考のひらめきを探る「学習能力テスト」につなげていく予定

現在は、学習能力の前提となる認知、思考するためのスキーマ、判断能力等を、母語が手話言語であるか否かによらず、測ることができるテストを作成している

<理解力チーム>
手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、日本語によるモノローグを用いた検査を作成し、その施行を始めている

2022年度 大塚市立発達障害者支援センター（仮称）

スライド6

2022年10月現在

研究チーム

脳科学 酒井 邦嘉 阪本浩一 和田夏実 <small>他</small>	心理発達 (人格形成) 河崎 佳子 中尾恵弥子 物井明子 久保沢真 <small>他</small>	言語獲得 <手話言語力> (日本語) <日本語力> 武居 渡 河崎 佳子 久保沢真 物井明子 <small>他</small>	学習能力 <理解力> 武居 渡 河崎 佳子 久保沢真 岩田真有美 和田夏実 <small>他</small> <思考力> 酒井 邦嘉 阪本浩一 井田哲夫 和田夏実 <small>他</small>
---	---	--	--

2022年度 大塚市立発達障害者支援センター（仮称）

2. 心理発達(人格形成)分野

NPO こめっこ副代表理事 中尾恵弥子

こめっこ研究の心理発達（人格形成）分野についてご報告いたします。

心理発達（人格形成）分野では、こめっこ活動に参加している子どもたちの心理発達を、情緒、認知、コミュニケーションなど複数のラインから捉える研究を行っています。主に、こめっこ活動時の子どもたちの様子の観察と、保護者からの普段の様子や変化成長についてのききとり、そして、検査の実施とそのデータ検証および記録の蓄積をし、一人一人のお子さんの成長過程を追う縦断的な研究です。

検査の実施にあたって、既存の心理発達検査のほとんどが健聴児を対象としているため、日本語を母語として成長する子どもたちの発達を正しく評価するために、内容や実施方法についての検討を行いました。

扱った検査は、保護者が項目をチェ

スライド1

**こどもたちの発達を
複数のラインから捉える研究**

- こめっこ活動時の子どもたちの様子の観察
- 保護者からのききとり
- 検査の実施とそのデータ検証および記録の蓄積

↓

一人一人の成長過程を追う縦断的な研究

ックすることで行う質問紙の「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」と、子どもを対象に一对一の対面で実施する「新版K式発達検査」です。

その提案については、スライドに示しましたとおり、2021年度特殊教育学会と2022年度特殊教育学会にて発表しました。尚、K式発達検査に関しては、今回は誕生～10歳までの課題を検討しています。

「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」は、3歳までの未就園児には半年に1回、3歳以上の子どもたちには年に1回実施しています。2020年度には41名の子どもたちを対象に、のべ64件、2021年度は42名の子どもたちを対象に、のべ52件行いました。

2021年度からは、概ね2歳以上の子どもたちを対象に、年に1回の「新版K式発達検査」の実施も開始しています。2021年度は18名の子どもたちにご協力いただきました。

また、小学生以上の子どもたちについては、「S-M社会生活力検査」を年に1回実施しています。こちらも、2020年度は10件、2021年度は11件行いました。

いずれの検査も、2022年度も継続し、データの蓄積を進めています。

その他、昨年度から手がけた「心の理論」課題の日本手話劇版が完成し、5歳以上の子どもたちへの施行を開始しています。なお、この検査については、今後は理解力の枠組みで進めていく予定です。

詳細な数値データに関するご報告は、次年度以降の研究報告でお伝えできるように進めていきたいと思っておりますが、実際の子どもたちの様子からは、乳児期ないしは幼児期早期からこめっこに参加し、手話言語に出会うことで、順調

日本手話を母語として成長する子どもたちの発達を正しく評価するための提案

- ・日本手話を母語とする乳幼児・児童に対する
津守・稲毛式乳幼児精神発達診断の実施に関する提案
～手話言語を獲得しつつある聴覚障害児の心理発達を評価するために～
第59回特殊教育学会（2021）
- ・日本手話を母語とする乳幼児・児童に対する
新版K式発達検査の実施に関する提案
～手話言語を獲得して育つ聴覚障害児の発達を評価するために～
第60回特殊教育学会（2022）

実施状況

「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」

3歳までの未就園児 半年に1回
3歳以上の子どもたち 1年に1回 実施

	2020年度	2021年度
実件数	41件	42件
のべ件数	64件	52件

実施状況

「新版K式発達検査」

概ね2歳以上の子どもたち 1年に1回実施

	2021年度
件数	18件

「S-M社会生活力検査」

小学生以上の子どもたち 1年に1回実施

	2020年度	2021年度
件数	10件	11件

「心の理論」課題

日本手話劇版が完成し、5歳以上の子どもたちに実施
今後は理解力の枠組みで進めていく予定

な発達が促されていることを実感しています。

また、こめっこに出会った時点では周囲の人とスムーズにコミュニケーションできる言語をもたず、気になるものがあるとすぐに見に行き触ってたしかめないと気が済まない、ともすると多動傾向が疑われるお子さんが、手話で少しずつ「わかる」体験を重ね、自分を表現し、他者と伝えあえるようになっていく過程で、情緒面や行動面もぐっと落ち着いて見違えるような変化を示してくれています。また、出生時に聴覚障害の他にも重なったの障害があり、例えば歩くことができるようになるのも3歳4歳以降になるであろうと言われていたお子さんが、手話言語を吸収しながら保護者との関係を築いて、他者とかかわることが大好きな積極的な子になり、いろいろな物に興味関心を持って自分から近づいていこうという意欲が増してくると、それに併行して、お座りやはいはい、伝い歩き、ついには自力歩行と運動発達にも良い影響が及ぶと感じられることが多いです。改めて子どもたちの発達は、単一的ではなく、情緒、認知、運動、コミュニケーションなど、複数のラインが相互に影響しあって成長していくのだということを、日々教えてもらっています。

今後とも検査データと、丁寧なききとり、観察記録の蓄積を進めていきたいと思っています。以上で、心理発達（人格形成）分野からの報告を終わります。

3. 言語獲得／学習能力(理解力)分野

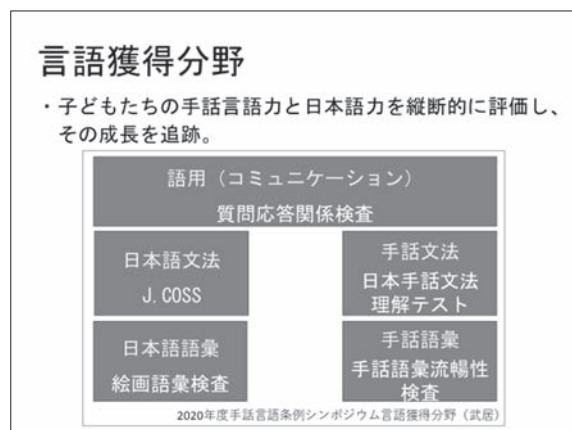
NPO こめっこ常務理事 久保沢寛

こめっこ研究の言語獲得分野と学習能力（理解力）分野について報告します。

まず、言語獲得分野は、子どもたちの手話言語力と日本語力を縦断的に評価し、その成長を追跡する目的があります。手話言語力については、文法力を測る「日本手話文法理解テスト」と、語彙の表出を測る「手話版語彙流暢性検査」を実施しています。日本語力については、文法力を「J.COSS 日本語理解テスト」、語彙力を「絵画語い発達検査」にて測っています。また、コミュニケーション力を測る「質問応答関係検査」も行っています。

それぞれの検査の実施状況について報告します。まず、手話の文法力を測る「日本手話文法理解テスト」についてです。4歳から測っており、得点

スライド1



スライド2

が47点中、42点以上で次年度からその対象児は実施しない方針で毎年実施しています。検査実施数は、2020年度が15名、2021年度が18名です。

2歳からこめっこに通っている対象児が、現在、7歳になり、手話文法理解テストでも十分に理解しているという点数に達しています。ただ、まだデータ数としては少ないため、今後、同じように0～2歳の間にこめっこ出会った子どもたちに実施してどのような結果がでるか、引き続きデータを集めていきます。

また、4歳児から5歳児になるにつれて、点数が急に上がることもよくみられました。武居先生が前回のシンポジウムでお話ししたように、手型に興味を持つなど、言語への関心が変わる時期であることが関係していると考えられます。

次に、語彙表出を測る手話版語彙流暢性検査について、昨年度までに方法、質問項目等を確認し、2022年度から実施しています。武居先生が提案した語彙検査であり、大人を対象に実施したデータはありますが、子どもに対して実施したデータはまだ少ないです。そのため、何歳から実施可能かも含めて検査をし、データを集めています。また、口型を伴う手話表現。例えば、ハンドルを握る動作で、「バス」「トラック」「車」と口型が伴う場合やCLに近い表現。スポーツ関係で「カーリング」「アイスホッケー」などを一連の動きで表現した場合など、どのように評価するか、評価方法についても、データを集めていく中で、分析していきたいと考えています。

日本語力についての検査になります。文法力は、「J.coss 日本語理解テスト」を実施しています。7歳（小学1年生）から実施する方針で、2022年度から実施しています。

日本手話文法理解テスト

・手話の文法力を測るテスト

・対象：4歳～
47点中42点以上で次年度からは実施しない。

・検査実施数：
2020年度 15名 2021年度 18名

スライド3

手話版語彙流暢性検査

・手話の語彙表出を測るテスト

・対象：
2022年度は、6歳から実施
対象年齢の見極めもデータを集めながら進める

・検査実施数：2022年度より実施。

スライド4

J.COSS日本語理解テスト

・日本語の文法力を測るテスト

・対象：7歳～
小学1年生から実施。

・検査実施数：2022年度より実施。

語彙力については、「絵画語い発達検査」で測っています。J.COSSと同様に7歳（小学1年生）以上を対象に、2022年度から実施しています。

J.COSSも、絵画語いも文字を使用して、検査を実施しています。

「質問応答関係検査」は、コミュニケーション力を測るテストです。ろう者と聴者が共に検査者となり、子どもの実態に合わせて、手話と日本語を使い分けて検査を行っています。2020年度は10名、2021年度は15名に実施しました。継続して検査を実施していく中で、ある子どもが、物語の説明で、登場人物になりきって、ロールシフトを自然と使う様子がありました。普段のこめっこ活動の中でも重要な手話劇を毎回見ている効果もあるのではと思っています。こういった説明方法が他の対象児にも見られるかどうか、見ていきたい部分です。

それぞれの検査をまとめたものです。来年度以降、詳細なご報告ができるように手話言語力と日本語力について、データを集めていきたいと思えます。

次に、学習能力（理解力）分野について、今年度から検討を重ね、手話モノログ動画を用いた検査を作成しました。初めて見るストーリーに対して、ストーリーを理解できたか、内容に関する質問に答えることができるかどうかを質問

PVT-R 絵画語い発達検査

- 日本語の語彙力を測るテスト
- 対象：7歳～
小学1年生から実施。
- 検査実施数：2022年度より実施。

質問応答関係検査

- コミュニケーション力を測るテスト
- 対象：4歳～
- 検査実施数：
2020年度 10名 2021年度 15名
- 検査時に、ろう者と聴者が一緒に入り、子どもの実態に合わせて手話と日本語を用いて、実施している。

言語獲得分野のまとめ

検査名	日本手話文法理解テスト	手話版語彙流暢性検査	J.COSS日本語理解テスト	絵画語彙発達検査	質問応答関係検査
測定する力の種類	手話の文法力	手話語彙の表出力	日本語の文法力	日本語の語彙力	コミュニケーション力
対象	4歳～	2022年度は6歳から実施	7歳～	7歳～	4歳～
検査実施数	2020年度 15名	2022年度より実施	2022年度より実施	2022年度より実施	10名
	2021年度 18名				15名
備考	4.7点中、4.2点で次年度は行わない	対象年齢の見極めも行っていく			

学習能力（理解力）分野

- 手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成。
- 質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達の変化を評価する。
- 次年度から、「手話劇版心の理論課題」と共に実施し、データを集めていく。

紙とインタビューを併用して実施します。記憶、知識、理解の発達的变化を評価するための検査です。次年度から、「手話劇版心の理論課題」と共に実施し、データを集めて分析をしていきます。

以上で、言語獲得分野と学習能力（理解力）分野の報告を終わります。

4. 言語脳科学／学習能力(思考力)分野

NPO こめっこ研究員 和田夏実

言語脳科学分野に関して学習能力分野の思考領域に関して研究員の和田夏実より発表させていただきます。

本研究チームでは、手話を獲得・習得して育つ子どもの学習能力を明らかにするためにあたって、「言語力」と「思考力」の両方の検討を進めています。

手話を第一言語として概念獲得する環境にある子どもを対象に、言語理解に基づく概念や自然法則を把握する力や、時間や空間の変化などを推論する力を調査する予定です。これにより、手話で育つ子どもたちの評価法や教育環境の改善に繋げていくことを目的としています。

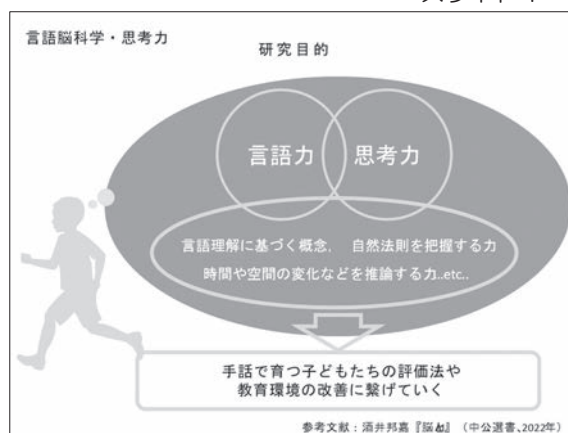
研究手法として、思考でのみ言語を使用する問題の提示と、脳機能イメージングによる脳活動の測定を準備中です。

前者は、就学前や小学生の子どもを対象として、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題の作成を進めています。

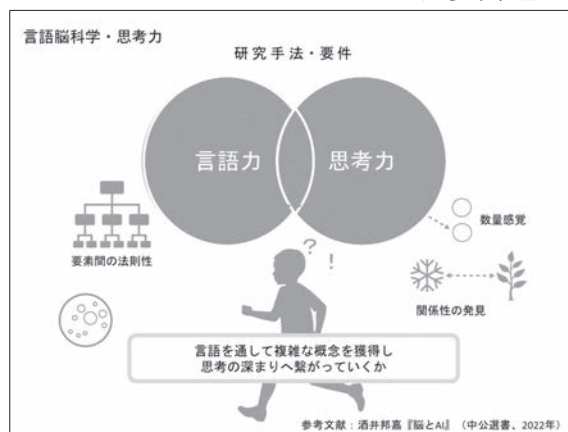
手話という言語を通してさらに複雑な概念を獲得し、そこから思考の深まりにどのように発展するかについて、各個人の手話や日本語の獲得進度を指標として比較検討を行います。

後者では大人と子ども（小学校高学年以上の子ども）を対象として、この問題を解いている最中の脳活動をMRI装置で検出し、言語野を中心とした脳機能の定量的な解析を行います。

スライド1



スライド2



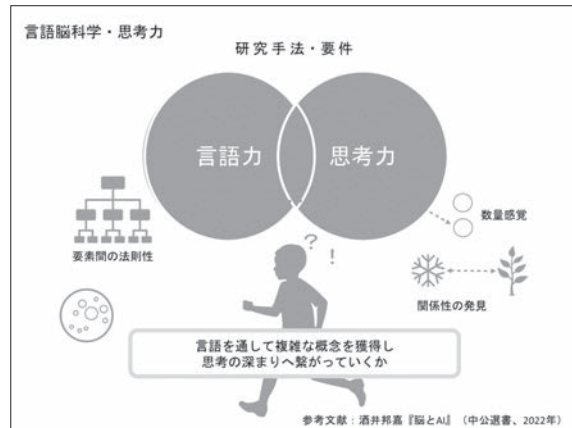
スライド3

現在の進捗状況についてです。

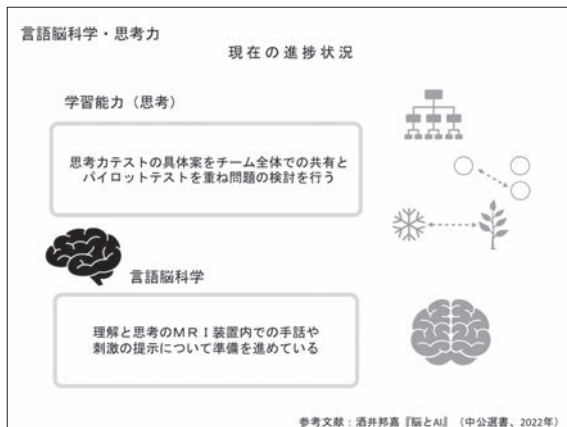
思考カテストの具体案をチーム全体で共有とパイロットテストを重ねながら問題の検討を行っています。また、これと同時並行させて、MRI装置内での刺激の提示について準備を進めています。

今後の計画内容としては、特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構にて子どもたちの成長をみながら経年評価を行う予定です。

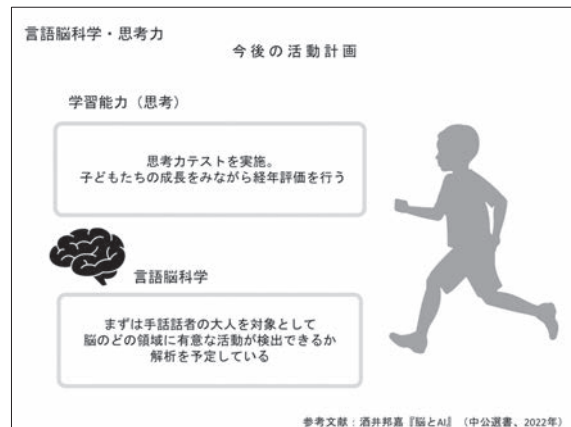
思考カテストの完成に合わせて、ろう者を含む大人を対象として、脳のどの領域に活動が検出できるか調査を進めていく予定です。



スライド4



スライド5



こめっこ参加ご家族の声

～赤ちゃんから小学生まで～

こんにちは。ハリーです。こめっこのスタッフをしています。今からご覧いただく動画は「こめっこ参加ご家族の声～赤ちゃんから小学生まで～」です。21 家族が協力してくださいました。子どもたちの年齢は様々で、下は9か月の赤ちゃんから上は小学校4年生です。

そうそう、こめっこには3つのグループがあります。「べびこめ」は、0～3歳の赤ちゃんとトドラーさんのグループ。「こめっこ」は、3～5歳の幼稚部・保育所に通う子どもたちのグループ。そして、「もあこめ」は小学生のグループです。

ここにやってくる子どもたちのお父さん、お母さんがそれぞれの思いを語ってくださいました。加えて、1月28日のオンライン開催当日、話題提供者としてご登壇いただく3家族からのメッセージもお届けします。「べびこめ」「こめっこ」「もあこめ」それぞれの活動の様子を撮影した映像を織り込んで紹介します。70分ほどになりますが、どうぞごゆっくりご覧ください。

○3歳女児母

私には3人娘がいて、現在3歳半の次女が難聴です。両側の外耳道閉鎖を伴う小耳症で耳の形がなく、骨導補聴器を使用しています。聴力はだいたいどの域でも補聴器なしで75dB位で、補聴器ありで35～40dB位きこえていると言われています。

生後6か月から聴覚支援学校に通い始め、そこで生活が落ち着いてきたなという時に、子育て広場的なところに行ってみようかなと思ったのですが、地域だと難聴のことや耳の形のことなど興味本位で聞いてくる方も多分いるだろうと思っていました。正直その時は、次女の難聴のことも完全には受け止めきれなくて、例えば難聴児だけが集まるようなところだったら、私も気兼ねなく行けるのではないかと思って探したら、「こめっこ」さんを見つけることができて、生後10か月の頃からずっと通わせてもらっています。

娘は10か月くらいから通っているので、正直どこが変わったのかはわからないのですが、私自身はすごく変わ



ったというところがあって、それは手話という言語についての考え方です。

次女の聴力では、将来たぶん口話で生活することになると思うと耳鼻科の先生、支援学校の先生にも言われていたので、「こめっこ」に参加するときは、口話でコミュニケーションがとれるようになるまでの繋ぎみたいな形でできるようになったらいいな、くらいに思っていました。佳子先生が、日本語や英語と同じように手話もひとつの言語なんですよと、たびたびおっしゃっていましたが、最初の方は頭ではわかっているんですけど、たぶん納得してなくて、ずっと心がもやもやしていたのを、今振り返るとすごく覚えています。

こんなことは言いたくはないのですが、今考えたら、手話は音がきこえない難聴の方やろうの方が使う言語で、日本語は一流、手話は二流みたいな誤った考え方をその時はしていたんだと思います。

「こめっこ」に参加して、1歳、2歳くらいの小さい子どもたちが小さい手を器用に頑張って動かして、コミュニケーションをとったり、小学生くらいになったらスタッフの方とシュバシュバって何言ってるの？という感じで、こっちが目が点になるくらい話しているのを目の当たりにすると、私には健聴の長女がいますが、その子の言語発達のことを思い返しました。長女も最初は、何言ってるの？という言葉から拙い日本語になって、今は小2ですが、私とケンカを一人前にできるくらい日本語がしっかりできるようになっています。

次女もずっと「こめっこ」に通って、最初スタッフの皆さんには「よく見てるね」と言われているけど、手話も出ない、日本語も出ない、大丈夫かなと思っている矢先に、何かやっているんです。ずっと食事中に何かやっていて、何？手を振ってるの？と思って、何かうったえているのはわかるけど、何を言っているのかわからず、よくよく考えたら、私がよく【お茶】とやっているのを真似して、グーをずっと振っているのかなと思い、あっお茶？ときいたら、うんと頷いてくれました。あ、わかったね、なんかお互いわかったね、みたいなことから、最初、【牛乳】も全然わからなくて、人差し指をこめかみにあてて【悩む】？何を悩んでるのと思ってたら、あっ牛乳ねってわかった。その一つ一つが結びついたときの喜びを今でも覚えています。

そしたら、いつの間にか、今では急に色を手話で表現したり、黄色とか緑とかも好きなことを表現してくれるようになって、どこで覚えたん？と思うのですが、「こめっこ」に通ってスタッフの皆さんとただ遊んでいるだけなんです。勝手に吸収



して帰ってきて、家でいきなり表現してくれるので、すごいなあとと思って、この娘って天才かなと思いつつ見えています。

小さいときから、ただ遊びの中で手話があるという環境にポンって放り込んだら、勝手に手話を言語として獲得しているのが、次女を見ていたらすごくわかります。手話というのが日本語



と同じ、本当に言語なんだ、つながってお互い通じ合ったときの喜び、日本語でも手話でも同じなんだなというのをすごく実感できるので、今では佳子先生のいう「日本語と英語と同じ手話も言語なんだよ」という言葉は、その通りと心の底から納得できていると、自分でも思っています。

「こめっこ」に最初に来た時は、ろうの方が大半なので手話でのやりとりばかりで自分がぽつんと置いてかれた、自分が今までマジョリティの中にいたのが当たり前だったのが、急にマイノリティみたいな感じになって、それはパパも同じようなことを言っていました。いつかここで手話でバリバリ話してやるんだ！みたいな気持ちになっています。娘も楽しく遊びながら手話を獲得しているし、私自身も絶対スタッフの方と通訳なしで話をしてやるみたいな気持ちがかいてきて、自分自身も「こめっこ」に楽しく通うことができます。

もう一つ「こめっこ」に参加してよかったと思うのは、「こめっこ」にはいろんな立場の方がいて、スタッフがろうの方もいらっしゃるし、聴の方もいらっしゃる。いろんな立場というのは私と同じように自分は聴者だけど、娘がろうとか難聴だったり、その反対もあつたり、ろうの子どもを育ててきた親の方がボランティアで来てくださっていたり、ろうの方と結婚された方とか、ろうの方のきょうだいだとか、いろんな立場の方がいて、最初次女が難聴とわかったときは、この子とどうやって会話するんだろう？とか、幼稚園行けるの、小学校行けるの、大人になって仕事できるのかな、結婚できるのかな、お姉ちゃんは妹が難聴って聞いてどう思うんだろうとか、本当にいろんな不安で押しつぶされていて。それでも「こめっこ」に通っていたら、いろんな立場からいろんな方の話を聞くことができ、自分が知らなかっただけで、ろうの方や難聴の方は私たちの暮らしている社会に普通にいらっしゃるんだなということが目で見えてわかる、当たり前のようにそこにいらっしゃるのでもわかりました。

最後に、長女のことですが、さっきも言ったように小2で、よく図書時間に手話の本を借りてきたりしています。長女も「こめっこ」に参加させてもらっているのでも、長女の中でも自然と手話が身近なものになっていて、自分の妹が難聴

ということで彼女なりに世界が少しずつ広がっているのかなと見ています。生まれた時は、まだ長女も幼稚園生だったので、ただただ妹がかわいい、ただそれだけだったんですけど、小学校にあがると自分の妹が難聴というのがわかったのか、何で耳がきこえないの？何で耳の形がないの？と聞いてくることがあるんですけど、私たちも理由なんかわからないので、理由はわからないと正直に答えています。

妹もいて、妹も大きくなるにつれて、何で自分の姉が難聴なんだろう、と疑問に思ってくると思いますが、そういう時に次女のこと、次女が難聴だからケアしなきゃと思ってはいるんですが、やはりお姉ちゃんとか妹のことに目を向けて、その子たちにもケアしていかないといけないかなと思っています。そういう時に実際にろうのきょうだいの方もいらっしゃるので、昔どういう思いだったとか、気軽に相談できる場があるのは、私にとっては「こめっこ」さんは、なくてはならない存在になっています。

○3歳女兒 母

娘は3歳4か月で、インスタで知り合った難聴児ママからの紹介で、生後3か月から「BABY こめっこ」に参加させていただいています。赤ちゃんのうちから、自然と手話に触れあうことができ、親子ともに自然と手話を身につけていくことができました。難聴という障がいはあるんですけど、コミュニケーションをとるのに、それほど苦労せずやりとりができたかなと思います。

聴力は100dBから高音はスケールアウトぐらいの重度難聴で、1歳を過ぎてから人工内耳を両耳同時に手術を受けて、順調に発語も出てきたかなと思うんですけど、やっぱり明瞭度が全然足りなくて、私にしかわからないような声がしばらく続きました。それでも2歳過ぎから2語文が出たり、3歳過ぎてからは、わりと口話だけでやりとりできる部分も増えてきたんですけど、やはりしっかり学んでほしいなというルールであったり、聞いてほしいところは、手話をつけて話した方が本人もしっかり理解しているのかなと思います。

人工内耳をしているときは音声言語だけでやりとりできるんですけど、お風呂に入るときや、寝るときはどうしても人工内耳をとらないといけないので、そういった時には手話を使ってやりとりしています。その時にも、日中とさほど差がない程度のコミュニケーションはとれているかなと思います。



娘も「こめっこ」で絵本よみをしているのを見せてもらって、何度か読んでいる絵本だったら、本人も手話つきで表現をしてくれる部分があって、表情のお顔の絵本とかを、表情豊かに手話つきで、2歳3か月くらいに読んでくれたのが、すごく印象に残っています。



○2歳女兒 母

私の娘は2歳7か月になります。0歳の時に、SNSで「こめっこ」を知って、それから通わせていただいています。

私の娘は、もともと全く耳がきこえないのですが、私の仕事が看護師ということもあって、人工内耳さえしていればという気持ちが強くありました。生後1か月の時にMRIで内耳奇形が強いことと、顔面神経欠損もあるということを経験した。当時の医師から聞きました。当時の医師から、残念ながらこの子は一生話すことはありません、と言われて、とてもショックを受けたことを覚えています。

うちの娘は当時、他の疾患もある可能性も言われており、どの程度コミュニケーションが取れるのかというのが、大変不安でした。ですが、やはり全くきこえない子どもなので、とにかく手話を覚えてもらいたい、手話さえあればコミュニケーションがとれるという思いで、藁にもすがるように気持ちで「こめっこ」に通わせてもらいました。

「こめっこ」に通い始めてからの一番の大きな変化は、手話で意思疎通ができるようになったということです。夜寝る前に、娘がいつも私のお腹の上に乗って寝るんですけど、寝る前に必ず、私を指さした後自分自身を指さして、【好き】の手話を毎日毎日夜してくれるんです。それを最初に見た時は泣きました。2歳0か月頃には、「こめっこぱんぱん」を寝手話でしてしまっていて、この子にはすごく手話が入っているんだなと感動したことを覚えています。

また、娘は顔面神経の欠損があって、表情も出にくいだろうなという風に思っていたんですけど、手話と出会って、人と通じ合うという喜びを覚えたこともあって、最近は手話と一緒にいろんな表情を見せてくれることが増えました。

それに、いろんなものに興味を持って、自分から近づいていこうとするようになってきて、ゆっくりと言われていた運動発達も、ゆっくりはゆっくりなんですけど、本人なりにだんだん成長してきて、今ではある程度安定した歩行もするようになりました。本当に「こめっこ」のみなさん、ありがとうございます。

○1歳女兒 母

娘が0歳11か月の頃から、ろう学校の紹介で「こめっこ」に通い始めました。

現在1歳10カ月で、聴力は両耳で105dBで、人工内耳も考えていたのですが、病院の診察が進むにつれて、CTをとった時に両耳とも内耳がないということと、聴神経が両方とも細すぎて、お医者さんから人工内耳が出来ない、という判断をもらって、人工内耳をせずに補聴器をつけて生活をしています。人工内耳をつけられないとわかった時のお医者さんの残念な表情が、今でも頭に残っています。セカンドオピニオンも考えましたが、お医者さんに話したら、セカンドオピニオンに行っても適応外だよと言われて、辛かったのを覚えています。

そういう経緯もあって補聴器をつけて生活していくぞと決めた時に、ろう学校から「こめっこ」を紹介してもらいました。通い始めた最初の頃は、私自身もそうですが、娘も補聴器を嫌がる時期で、ろう学校は、音、音みたいな感じで、音を意識して過ごしましょうという学校なので、私自身音に対して意識を向けてがんばらないと、と思っていました。結構疲れていて、でも「こめっこ」に来た時に、音はそんなに意識しなくていいというのと、あと「こめっこ」のスタッフさんに補聴器はどちらでもいいよ、つけていてもいいし、つけなくてもいいよ、と言ってもらい、とても私の心が軽くなりました。

娘が「こめっこ」に慣れていくにつれて、私が思ってもみなかった性格がどんどん出てきました。例えば、すごく積極的だなと思ったのが、ホワイトボードに紙を貼りにいったり、気が強い部分も見せてくれて、娘ってこんな子やったんや、というのが知れてよかったなと思いました。

手話ネームを「こめっこ」でつけてもらって、手話ネームを娘が真っ先に覚えて、自分で名前を表現してくれます。「こめっこ」に通わなかったら、娘が自分の名前を知るのに時間がかかったのではないかなと思うと、ちょっと怖いなという部分もあります。

最近はお父さんに手話で「好き」って伝えたり、ママごとをしていて「おいしい？」と聞いてくれたり、最近私が「お風呂、行こう」と言ったら、「うん」とうなずいてお風呂場まで行って「ここ、お風呂」って手話で表現してくれたりして、手話でコミュニケーションをとれるというのがわかってからは、毎日がすごく楽しいです。

私自身、「こめっこ」に通うまでは、難聴の方やろうの方と接する機会がまったくなくて、病院でもきこえな



いことについて怖いことしか言われていなくて、すごく将来が不安でたまらない日々がずっと続いていたんです。娘を育てていくにはどうしたらいいんだろうと悩んだり、将来が見えてこない部分があったんですが、「こめっこ」に通って行くにつれて、難聴者の方やろう者の方の生い立ちや経験を話してもらえる時があって、娘のロールモデルを見せてもらったときに、全然心配しなくていいんだと思ったり、娘がろう者の方や難聴者の方とかかかっている姿を見て、こんな風にコミュニケーションがとれるのだったら、全然自分が不安に思うことは何1つなかったと。私自身、調べてこなかったからでできた不安だと思うのですが、娘とかかかっている姿とか、ロールモデルのお話をしてもらって、不安は今は全然なくなっていて、むしろワクワクの方が勝っています。



最近、夫も一緒に「こめっこ」に通ってくれるようになって、通勤時間に手話の勉強をしたいから小さい本とかないの？とか聞かれたりするんですけど、家族みんなで手話の勉強ができる、手話の世界に飛び込めることがとても幸せで、楽しみながら学んでいます。

○3歳女兒 母

私たち親は、わからない手話は調べて、どうにか手話を親子で身につけないと、という気持ちだったんですけど、ここに通い始めて、ろうスタッフから生の手話を楽しく教えてもらえて、わからないことは質問できるので、親が無理して勉強するのではなく、一緒に「こめっこ」に通えばどうにかなるかな、という気持ちが生まれて楽になりました。

○3歳女兒 父

娘が2歳5か月の頃に、今後の進路やコミュニケーションで悩んでいて、初めて「べびこめ」に参加しました。まだ通い始めて4か月ほどですが、娘がスタッフや私が表した手話をすぐに覚えて真似するようになり、以前よりも手話の数がすごく増えて驚いています。

動画配信をととても楽しみにしていて、娘が自分から【こめっこ・見たい】と催促するようにもなりました。動画を見ているおかげで、ろうスタッフの手話ネームもいつの間にか覚えていて、子どものことばの吸収力はすごいなど、あらため

て感心する毎日です。

○9か月女児 母

私たち家族は、夫がろう者、9カ月になる娘と私は聴者です。夫が「こめっこに行ってみよう」と誘ってくれたのがきっかけで、「べびこめ」に通うようになりました。

初めて「べびこめ」に来た時に、あるお子様が私の娘の名前を指文字で覚えてくれて、何度も何度もお話しに来てくれました。娘はきこえるんですけど、ここはきこえる・きこえない、そんな壁はなく、素直にとても嬉しかったことを覚えています。

たくさんのお子様、そしてパパママがここに通われていて、私の夫も幼少期に家族とこんな風にかかわっていたのかなど思ったり、娘の将来について夫と一緒に考えるきっかけをもらっています。

これからも娘と一緒に楽しく手話を覚えて、家族3人いろんな話をしていけたらなと思っています。

○1歳男児 母

1歳10か月の息子と通っています。

「こめっこ」に参加して、息子のきこえに対して不安がありましたが、耳がきこえなくても、音声で話ができなくても、気持ちを伝える手段があるんだなと気づき、もっと息子と気持ちが伝わりたいと思いました。

息子も自分からスタッフさんや絵本に近づいていき、いろいろ興味が広がっているようです。また、私では息子のよくわからない身振り手振りにも、ろうスタッフはすぐに気づいてくれて「すごいね」と喜んでくださって、1人ひとりよく見てくれているのだなと嬉しく思いました。

○3歳女児 母

3歳の次女は、90から100dBくらいの聴力なんですけど、「こめっこ」にはきこえる長女も一緒に通っています。とにかく娘に手話の環境を与えたいと思って、参加し始めました。

初めて「こめっこ」の様子を見て、ここに通っていたら、同じ空間に手話をするたくさんの方がいて、私や家族が手話をする様子も見てもらえるのか



など思って、その間にきっと娘の母語が確立されるんじゃないかなと感じました。特に、若いスタッフの方がいっぱいいて、その方たちと交流できるのがいいなと思いました。

娘は「こめっこ」がすごく好きで、家でも「おなまえよび」を一緒にやったり、今日こめっこ行くんだよとか、明日こめっこ行くよと言うと、すごく喜んで真似したりします。車の中でも、道中、家が遠いのですが、「こめっこ」のDVDを借りて見たり、「こめっこ」の手遊びを真似してやったり、行くんだよね、今日行くんだよねと何回も確認をします。



「こめっこ」は同世代のお友だちとも手話でお話もできますし、とても楽しみにしているみたいなので、これからも続けたいと思います。

○3歳女兒 母

娘は3歳で聴覚支援学校と保育園に通っています。聴力は100dBで補聴器と人工内耳を装用しています。

「こめっこ」に通い始めたきっかけは、区の保健師さんからの紹介で、生後3か月頃に教えてもらいました。学校の早期相談に行くよりも早い時期で、子育てサークルのような気軽な場所なので、気分転換に行ってみてはどうか、と聞いて伺いました。

実際に行ってみて、手話に出会って、難聴の先輩や同級生のママたちと話をする中で、難聴児の子育ての道筋が少しずつ見えてきたように思えました。それからは、毎週通うようになり、手話の語彙も少しずつ増えてきて、悩みを共有できるママ友もできて、「こめっこ」が終わってからも、悩みを聞いてもらったり、逆に聞いたり、共有できるママ友ができて、大変ながらも充実した子育てができたんじゃないかなと思います。

学校や療育と違って、疲れたなぁしんどいなと思ったときは行かなくてもいいし、また行きたいなと思ったときには受け入れてくれる「こめっこ」が私にとっては無理なく通える場所でした。今は仕事や娘の学校があって、なかなか「こめっこ」に来ることができないのですが、娘が「こめっこ」が大好きなので、隙間時間を見つけて遊びに来ています。

娘は手話があったから、すごくいろんなことを理解していて、口で話すのはまだまだ苦手なんですけれど、小さなおててでたくさんお話をしてくれています。

親の私の方が語彙が追いつかなくて、
まだまだ勉強不足だなと感じている
ので、家族のペースでちょっとずつ勉
強していけたらなと思っています。



○3歳女兒 母

今娘は3歳で、「こめっこ」には生後
4か月頃から通っています。両耳
100dB を超えていて、1歳を過ぎてか
ら両方とも人工内耳を手術しました。

最初のころは、まだ表情も乏しくて、何考えているかわからなかったんです
けど、通いだして何か月か経ったら、だんだん目にも表情にも意思を感じられるよ
うになって、1歳、2歳前後からは手でおしゃべりするようになって、今3歳に
なったら音声言語でコミュニケーションをとれるようになってきました。音声
言語でコミュニケーションをとれるようになってきたんですけど、まだ音声言
語だけでも伝わらないし、手話だけでも伝わらない部分があるので、娘にとっ
ては手話も音声言語もどちらも必要です。

「こめっこ」では、娘は集中して前を見るタイプではなくて、ずっとよそ見をし
て、うろうろしてたんですけど、家に帰った時や寝る前に、ふと「こめっこぱん
ぱん」をしたり、「どうぶつ体操」をしたりして、「あ、見てたんや」という時があ
りました。そんな感じで、今も見てない時もあるんですけど、環境に浸ることが
大事なかなと思って、これからも通おうと思います。

○5歳女兒 母

私には子どもが3人います。1番上が小6の娘、2番目が小2の息子、3番目
が5歳の娘です。「こめっこ」に通い始めたのは、1番下の娘が2歳の時でした。

初めは恥ずかしがっていたのです
けど、だんだん慣れてきて、自分から前
に出て、いろんなスタッフと楽しく手
話でコミュニケーションが取れるよ
うになってきました。スタッフはみんな
手話ができます。私だけでなくいろ
んな人と会ってお話するのがも
ともと大好きな娘なので、たくさん楽し
そうにやりとりしている様子に感心
しました。そうして通っているうち



に、小さいうちはまだまだコミュニケーションの経験が少なかったのですが、だんだん周りの手話を見て覚えたり、手話劇やいろいろなあそびを見て内容をつかんで、自ら吸収し、たまに自分で考えてオリジナルの手話表現を作って伝えてくれます。私も親子で、手話でのやりとりを楽しんでいます。



真ん中の息子は、手話はまだまだで口話が多いのですが、時々「こめっこ」

に来たときは手話でコミュニケーションをしていて、男性のスタッフとの会話を楽しんでいるようです。

長女はもう大きいのでここへは恥ずかしがってあまり来ないのですが、たまにお気に入りのスタッフと会った時にお話ししています。3人とも「こめっこ」に来ると気分転換になり楽しいようで、特に1番下の娘はすごく楽しいと言っています。末娘は、手話で自分の気持ちを伝えることができるのが、1番うれしいようです。

こめっこに行こうと言われると、必ず、わぁ！行こう行こう！と言うくらい大好きです。ある時、時間が間に合うかどうかわからないけれど、とにかく行ってみようと連れて行ったことがありました。その時やっぱり少し到着が遅れてしまったのですが、娘がすごく怒って、遅れた！とふくれ面になってしまいました。それで、次からはちゃんと間に合うように連れて行くようにして、娘にも、時間だよ！早く行こう！という自分でもがんばって急いでくれるようになり、電車に乗っていつもきています。今ではスムーズに道も覚えてずいぶん慣れ、放っておいても自分で行けるくらいになっています。

私から見ると、1番下の娘にとって「こめっこ」は本当に必要な場所、1番必要な場所だと思っています。学校でも先生とお話しすることはできますが、学校は発音も必要、補聴器もしなければならぬので、娘としては少し違和感もあるみたいです。

最近学校で、補聴器いらぬ！と言うことがあります。いつも先生に、補聴器つけてお願いと言われて、娘は、いらぬと言ひ合ひをしています。そんな様子を見ると、娘はまだ5歳ですが、もうアイデンティティがしっかり確立しているんだなと思います。私もろうですが、自分の小さい時と比べてもすごいなと感じています。

今では、月が替わると1週目には「こめっこ」があると覚えていて、例えば今日から11月になったよと言うと、今週「こめっこ」がある！と、12月も1週目は

「こめっこ」がある！というふうに、最初の1週目には「こめっこ」があるということがわかってきたようです。まだ3週目はわからないようですが。月が替わると、今週土曜日は「こめっこ」あるよね！行こうか！と自分から言ってくれるので、わかった行こうか、とそんなやりとりもスムーズにできていいなとうれしく思っています。



子どもたちが自然と周りの手話を見て覚えて、同世代のお友達とも会話して、自然と一緒に成長していく姿がいいなと思って見えています。

○4歳男児 父

息子は現在4歳です。聴覚支援学校以外にも手話に接する機会を増やしたいと思ひまして、2歳のころから「こめっこ」に通わせてもらっています。

最初は、パパから離れずに静かにじっと様子を見ているだけだったんですけども、だんだんスタッフさんの手話が読み取れて、遊びの内容がわかるようになるにつれて、自分からもいろいろ表現できるようになるにつれて、最近では率先して最前列に陣取って体を動かして楽しんでいるというところが印象的です。最近ではちょっと遊び過ぎてというか、暴れすぎてというところが目立ちつつもあるんですけど、それも成長かなと思って、僕としては嬉しい限りです。

年齢差のある難聴の子たちとも一緒に遊べるのも楽しいようで、いつも「こめっこ」に行くよと言ったときには、息子が嬉しそうに「こめっこぱんぱん」をし始めるという、非常に楽しんでいるというところではあります。

○4歳女児 母

私の娘は2歳の頃から「こめっこ」に来させてもらっています。娘は両耳、人工内耳をつけているときで35～40dB ぐらいのきこえなんですけど、通ひ始めた当初は効果ははっきり見えず、普段のコミュニケーションでもなかなかどう伝えていいのかわからず、娘もだんだんと伝えたいことが増えていっている中で、どういう風にしていったらいいかと悩んでいたところに「こめっこ」に出会ひ、来ています。



通い始めた当初は、周りのスタッフの方々や周りのお子さんたちと手話で触れ合う中で、手話を見ているのかな？とか、なかなか集中しないところが多かったんですが、そんな中でもだんだんとお家で私に手話を使って話しかけてくれるようになり、その時に、あっ見ていないようで見ているんだ、と実感したのを覚えています。



私は手話を習うのにコミュニケーションの1つとして、手話を勉強しようと思い「こめっこ」に来たんですが、娘は遊んでいるだけで、そんな中でもちゃんと手話を学んでいてくれるようで、がんばらなくてもいいんだとだんだん思えてきました。そういった環境の中で、自然に手話が入ってきているんだなと思い、それは私も娘も一緒に、だんだん手話を使う機会が増えていき、今では娘も毎日私に手話で、ママのこと大好き、かわいって言うようになっていき、2人で毎日言い合っています。他にも何かを発見すると、手話で伝えてきてくれるので、だんだん娘の中でも手話というものが言葉になっていき、自然に出てきてくれるように思います。

そういった意味でも、私たち親子にとって「こめっこ」はすごく大切な場所で、周りのみなさんと自然に手話に触れあえる場所だと思っています。これからも「こめっこ」さん、よろしくお願ひします。

○10歳男児 母

私の息子は生まれつきろうで、両耳 100dB を少し超えるくらいの聴力です。「こめっこ」を知ったきっかけは、息子が年中か年長の頃に、ろう学校の案内掲示板に貼ってあった「こめっこ」のチラシを見たことでした。

でもその時はそこまで気にしていなくて、こういうのがあるんだと情報だけを見て知ったという感じでしたが、それからしばらくしてあるお母さんから、こめっこ楽しくていいよ、一緒に行ってみない？と声をかけてもらいました。本当？楽しいの？と思って、チラシは見て知っていたけれど実際に様子は見ていないからわからないので、やっぱり実際に行ってみようかと思ひ、息子を連れて参加してみました。

最初に「こめっこ」の様子を見た時、これはいい！と思ひました。ろうスタッフがたくさんいるだけでなく、子どもまでいる、これがいいな、楽しそうだと思ひました。ろうスタッフが声はつけずに自然な手話で会話をしている様子を見

て、これが私が欲しかった場所だ、いい場所に出会えたと思って、息子と通い始めました。

楽しく通ううちに、息子の方から、次のこめっこはいつ？と聞いてくるようになりました。次はいつあるかをわかりやすく説明してやって、説明だけでは足りないので、カレンダーを見せてこの日とこの日にあるよと丸印をつけて教えてあげました。息子は、次あるんだねと毎日毎日楽しみにしていて、当日も楽しみ！というくらい心待ちにっていて、そんなに「こめっこ」が好きなんだ！と驚きました。それだけでなく、たまに家の都合で行けない、お休みしないといけない時があってそれを伝えると、なんで！とすごく怒るんです。わかるけど、家の都合が重なっていて無理なんだよ、仕方ないでしょと説明するんですが、すごく怒っていて、それくらい本当に「こめっこ」が好きなんだなど見ていてわかりました。

また、「こめっこ」の様子を見て、私の小さい頃のことを思い出しました。小さい頃に父に連れられ、ろうのおじいちゃんおばあちゃんの集まりに参加したことがあったんです。そこで、手話で話しかけてくれるのを見て、その手話と豊かな表情の動きに魅了されました。まだ幼くてわからないながらも、見ていると面白くて、魅力を感じたんです。

それと同じような感じが「こめっこ」にもありました。ただ違うのが、私が通った場所には同世代の子どもがいなかったこと。それでも楽しかったんです。

子ども同士の交流もできる「こめっこ」、本当にいいと思います。そんな場所に出会えたことは、私にとっては本当に幸せです。

○10 歳男児 母

「こめっこ」が始まった時に、うちの息子は幼稚部でした。聴力は91dBで重度の難聴なんですけど、幼稚部の時はキュードサインがメインだったので、「こめっこ」に通い始めた時は手話に対しては戸惑いを感じていたと思います。

ただ、通っていくうちに、今では手話がない生活というのは考えられないかなというくらい、手話の世界に引き込まれていきました。小学校4年生のタイミングで聴覚支援学校から地域の小学校に転校したんですけど、その時にしばらく「こめっこ」に通うのをお休みしていたのに、やっぱり手話の世界から離れたくないということで、息子本人が「こめっこ」に行きたい



と言い出して、そこからほぼ毎回通うようになりました。

今では、私よりも「こめっこ」がある日は息子が覚えていて、明日はもあこめだから絶対行くよと楽しみに通っています。

また、大学生のスタッフさんとか若い世代のネイティブサイナーの方たちと触れ合える機会があって、自分の将来像、未来を描くことができているんじゃないかなと思いつつ見守っています。



○7歳男児 母

私には小学校1年生の両耳人工内耳をつけている息子がいます。息子が2歳になる少し前に「こめっこ」が始まり、現在まで休んだりしながら通わせてもらっています。

ひとつ嬉しかったエピソードをお話します。

私は今までわからない手話表現があると、メモや写真を撮って保管しておき、「こめっこ」に遊びに行ったときにスタッフさんにまとめて聞くというのが、手話を学ぶ1つの方法でした。それが、コロナ禍で「こめっこ」も対面活動がお休みとなり、普段の息子との何気ない会話の時に表現方法がわからないと困っていたのですが、スタッフさんが「わからない時は画像や、その時の様子を詳しく教えてくれたら、動画を送ります」と言ってくださいました。それから、ちょうど家の前で育てていた大根の双葉が発芽した時、まだ見つけていない息子に、双葉が出ているよと伝えたかったのですが、どうしても手が動かず、スタッフさんに画像を送ったところ、その日にお返事をいただきました。息子に同じ手話表現をしたときはスムーズに伝わり、家の中だったのですが、えっ、ほんま？と外のプリンターを見に行っていました。世界中でコロナが大流行した時、学校も休校となり、親子ともに孤独を感じていたのですが、スタッフのみなさんは気にかけてくださったり、オンライン配信も始めてくださったり、みんなで息子を育てている感じがあり、とても嬉しかったのを覚えています。

「こめっこ」という場所は、子どもにとっては違う学校の友だちや年齢を超えているんな子たちと一緒に遊べる場所で、保護者にとっては悩みを相談したり、大学生のスタッフさんがいらっしゃるので、あっという間にやって来るであろう高校生活や大学受験のことなどたくさん聞くことができます。

つい最近、息子がポツリと、きこえない人っていっぱいいるねと言いました。

圧倒的にきこえる人が多い世の中で、その世界も少なからず経験している息子がそういったのは、「こめっこ」に通い始めてマジョリティの体験をたくさんしていたおかげだと思っています。

○5歳女児 父

私には娘が1人います。今年で5歳です。両耳共に重度の難聴です。そのことに気がついたのは、1歳半のころでした。言葉が遅いなと思ってはいたのですが、まさかの事実にとまどって、いろんなどころに行ったり、調べたりするうちに会ったのが「こめっこ」でした。

「こめっこ」は、目の前のあなたのこの存在を認めてくれたり、自分のままでいいんだよという雰囲気になり溢れているなという印象で、それは今も変わっていません。

当日は「人工内耳も手話も～こめっこと歩んだ3年間～」と題して、難聴がわかってから今までの、あれやこれやをお話できたらいいなと思っていますので、よろしくをお願いします。

○2歳男児 父

私の息子は、今2歳10カ月で、両耳小耳症で内耳奇形があります。生まれつき裸耳でスケールアウト、補聴器をつけて75dBと診断されていますが、日常生活において75dBもきこえているようにはあまり感じないです。聴神経もすごく細いので、医師からは人工内耳をしてもリスクが高く効果が見込めないんじゃないかと言われていましたので、今は手術は考えておりません。また、手の指に障がいがありまして、生まれた時に医師の方から「この子は手話はむずかしいんじゃないか」と言われました。確かにできない指文字や手話ではありますが、今はコミュニケーションは、手話を使って息子と会話をしております。補聴器は日常生活ではもうつけていなくて、聴覚支援学校とびよんびよん教室の授業の時だけ補聴器をつけています。

「こめっこ」へは、「こめっこ」の元スタッフさんと縁があって出会いまして、その方に紹介していただいて1歳の時に通うようになりました。その当時は、まだ家では手話はほとんど使っていなかったんですけど、「こめっこ」に初めて来た時、スタッフさんや周りのお友だちが手話を使っているのを、息子がじー



っと興味深く見ていたのを覚えています。

1月のシンポジウムでは、「こめっこ」と出会って、私たち夫婦の考え方や育児がどのように変わっていったのかをお話しさせていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○3歳男児 父

わたし達家族は私と妻と息子の3人です。子どもは生まれた時からきこえにくく、両耳で約60dBです。生後6ヶ月から補聴器を装用し、現在は手話と音声で会話しています。

私も生まれた時からきこえにくく、両耳で約60dBです。私の場合は25歳まで手話も補聴器もなく、インテグレーション教育で育ち、アルバイトも仕事もしてきました。

妻はきこえます。

こめっこに参加したきっかけですが、私たちの場合は、子どもが生まれるまでの間に、妻は私との音声での会話に限界を感じていて、手話を勉強したいと思っていたようです。

でも、私の中では、補聴器を装用していますし、手話を勉強するつもりはありませんでした。

その後、子どもが生まれてきこえにくいとわかった時、家族で手話を学ぼうと気持ちが変わりました。

詳しくはシンポジウムにてお伝えさせていただきます。シンポジウム当日は息子は3歳11ヶ月になっています。「こめっこ」に参加し始めた0歳5ヶ月からの成長過程や言語獲得習得記録をお伝えできればと思います。

ハリーです。さいごまでご覧いただき、ありがとうございました。いかがでしたか。

1月28日のオンライン開催にも、是非ご参加ください。お待ちしております。



第Ⅱ部

パネルディスカッション

話題提供

指定討論

研究プロジェクトチーム

からのコメント

ディスカッション

司会(久保沢)ノただいまより、大阪府手話言語条例シンポジウム「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト～保護者の体験と思いに学ぶ～」第Ⅱ部を開催いたします。

第Ⅰ部の事前配信では、こめっこ研究の進捗報告、こめっこ参加ご家族の声をご覧いただき、ありがとうございました。

本日、第Ⅱ部「パネルディスカッション」の司会を務めさせていただきます、NPO こめっこ常務理事の久保沢 寛(くぼさわ ゆたか)と申します。本研究プロジェクトの研究統括者、NPO こめっこのスーパーバイザーである神戸大学の河崎佳子(かわさき よしこ)先生と共に、今回のシンポジウムをコーディネートしてきました。河崎先生は、大阪府手話言語条例評価部会長でもあります。

なお、本シンポジウムは、日本財団からの研究助成事業の一環として開催しています。また、大阪府の後援、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力を得ています。

記録、報告書作成のため、本シンポジウムは NPO こめっことして録画をしておりますが、著作権保護のため、参加者による録画、録音、保存等にご遠慮ください。よろしく願いいたします。

まずは、本シンポジウムの主催である NPO こめっこ代表理事 物井(ものい)より一言挨拶を申し上げます。

物井ノ皆さん、こんにちは。NPO こめっこ代表理事の物井です。

本シンポジウムには 795 名の応募をいただいています。今回、保護者の声を聞き、また指定討論で発表いただき、さまざまな学びができればと思っています。

日本全国で寒波がありますが、皆さん、暖かくしてご覧ください。このシンポジウム後には、温かい気持ちになっていることを期待します。今日はよろしく願いします。

司会ノありがとうございました。

今回のシンポジウムでは、参加者のみなさまからのご質問を受け付けます。Zoom ウェビナーの Q&A 機能を使ってご質問ください。ただし時間の関係で、全てに回答することはできない可能性があることをご承知おきください。また、手話による質問の時間を確保できないこと、大変申し訳ありませんが、ご理解いただきますようお願いいたします。ご質問の受付は、指定討論の先生方のお話が終わった後の休憩、予定では 14 時 55 分までとさせていただきます。

それでは、ここで一度、河崎先生に進行役を交代し、話題提供に移ります。

河崎／よろしく願いいたします。

今年度のシンポジウムは「保護者の体験と思いに学ぶ」というテーマで、事前配信でも多くの保護者の声をお届けしましたが、本日は、こめっこに通われている3家族に、話題提供をお願いしています。こめっこの出会いから今日までを振り返って、心に残る体験や思いを語っていただきます。

最初の話提供は、小橋史佳さんと小橋千穂子さん、間もなく3歳の誕生日を迎える息子さんのご両親です。息子さんは、1歳の誕生日を迎えてすぐの頃、こめっこにやってきました。両耳共に重度の難聴で、聴覚活用はほとんどなく、日本手話を第一言語として元気に成長しています。そして、ご両親の眼差しはいつも、日本手話を母語として成長するわが子への敬意に溢れています。

二番目の話提供は、中川十儀さんと中川互世さん、来月4歳の誕生を迎える息子さんのご両親です。息子さんは、新生児スクリーニング検査の結果がリファーマ、生後5ヶ月で両耳中等度難聴が確定しました。そして、補聴器装用とほぼ同時に、5ヶ月からこめっこに参加してくれています。手話からコミュニケーションが始まり、その後、補聴器装用による聴覚活用で日本語を習得してきたバイリンガルです。

さいごの話提供は、奥田直樹さん、5歳半になる娘さんのお父さんです。娘さんは1歳半で両耳の重度難聴がわかり、1歳8ヶ月でこめっこにやってきました。手話に出会って認知の蕾がみるみる開花し、手話を吸収していきました。2歳で人工内耳を装用した後は、先行した手話獲得が聴覚活用を引っ張り、日本語を自然に近い状態で習得してきたバイリンガルです。本日、お母さんは残念ながらご欠席ですが、お話しの内容についてはご両親で相談して下さったとお聞きしています。

それでは、順によろしく願いいたします。

こめっこと出会って

小橋史佳・小橋千穂子

小橋父／本日はよろしくお願ひします。今日は、こめっこに出会って私たち夫婦の考え方や育児の仕方がどのように変わっていったのかをお話しさせていただこうと思います。

まず子どもの紹介をさせていただきます。子どもは今、2歳11ヶ月で、両耳小耳症で内耳奇形もあります。生まれつき裸耳でスケールアウト、補聴器をつけて75dB程度と診断されていますが、日常生活において75dBも聞こえているようには感じません。人工内耳はリスクが高く、聴神経もすごく細いため効果は見込めないんじゃないかと医師から言われ、現状、手術は考えていません。また手の指にも障害があり、右は親指が、左は薬指と小指以外がほぼ動かないです。簡単ですが、以上が子どもの紹介になります。

では、こめっこに出会う前、生まれた時からの話をさせていただきます。私たちは立ち会い出産だったので子どもの耳に特徴があることにはまず私が気づきました。「あれっ、耳がない、手の指も少し変だ」と思いましたが両耳小耳症という症状を知らないし、生まれたての赤ちゃんを見るのは初めてだったので看護師さんに「生まれたての赤ちゃんって耳埋まってますか？」と素っ頓狂な質問をして看護師さんを困らせてしまいました。この時は、耳がないことも、指が変わっていることも、子どもが生まれたという興奮とまた生まれた時間が衝撃的すぎて頭から飛んでしまいました。生まれた時間は令和2年2月2日午前2時2分でした。自然分娩だったので本当に驚きました。

私が障害のことについて冷静に考えたのは家に帰る途中の休憩で寄ったコンビニでした。考えたと言えるほどでもないですが、「そういえば耳がなかったなあ、耳がないってことは耳が聞こえない、ということは会話するには手話を覚えなないとあかんあ」と非常に短絡的な考えでした。この時の気持ちは知らない言語を学ぶという高揚感と今から新しい言語を覚えれるかなという不安だけで、手話に対する抵抗感は全くありませんでした。そもそも無知過ぎて、難聴＝手話を使うと思っていたので手話を覚えるのは当然という感覚でした。指についても現代医学は発達しているし大丈夫だろうとすごく楽観的でした。

小橋母／私は、生まれてすぐにネットで色々検索しては落ち込んで、この子の将来はどうなるんだろう、自分にちゃんと育てられるかなど不安でした。この時、私は人生の中で聾の方に出会ったことがなかったので、この子がどんなことで困るのかも想像できず、きっと大変なことがたくさんあるんだろうな、私の何が悪かったんだろう等、悶々と考えていた時期がありました。今、思い返すと、聾の方の生活や手話という言葉や「知らない」ということが、漠然とした恐怖や不安を生んでいたんだなと思います。

療育や聴覚支援学校には生後2ヶ月くらいから通い始め、セカンドオピニオンでいくつかの病院でお医者さんの話を聞き、徐々に難聴に対する理解は少しずつ進んだように思いますが、このままで本当に大丈夫なんだろうかという漠然とした不安がありました。

病院や学校からは残存聴力を生かしましょう、補聴器で聴神経に刺激を与えておかないとさらに聴力が落ちますよと言われ、補聴器をなるべく長く着けなければプレッシャーのように感じてしまったこともありました。ただ、息子の場合は補聴器を着けていても大きい音や声に反応がある訳ではなく、まだ小さくて、補聴器を嫌がるが多かったので、お互いにストレスになってしまいました。

そして生後5ヶ月の時に、有名な整形外科の先生に指を診てもらうことになりました。先生の診断は、手術をすることで何もしないよりは少しは動かしやすくできるかもしれないけれど、ない指を作ることはできないし、私たちと同じように滑らかに動かせるようにはできないので、この子に手話はどうかあと言われました。そうか、この子に手話は無理なのか・・・と道が断たれたようで、その時は落ち込みました。

私たちが手話を使うことで、子どもは自分にできない動きがあることに傷つくのではないかと心配し、本格的に手話を覚えることを躊躇していました。当時の私は手話にあまり触れたことがなく、たまにニュースで見る手話通訳は早くて複雑な動きをしているように私には写っていたので、これを習得しなさいと子どもに教育するのは酷なことではないかなと悩みました。

耳が聞こえないことも、手が動かしづらいことも、本人にはどうしようもないことなので、そこに親の期待をかけることは違うと思っていて、どうするのが本人が自分らしく自然体でのびのび過ごせるのか、必死に探していました。

小橋父／生まれた時は手話で育てようと思っていたのが手話は難しいとなり、じゃあ補聴器を頼りに育てようかと思っても、補聴器を着けても大きい音や声に対し反応は薄く、また息子も補聴器を着けられるのを嫌がる。人工内耳手術も効果が見込めない。それならば読唇術のように口型を読めるようにしてみるか

など、方向性が定まらず迷走している時にこめっこの存在を知りました。妻が色々調べている時にお会いしたろうの方とのご縁がきっかけでした。

ただ息子には手話は難しいと思っていたのと、場所が自宅から離れていたので行くか少し悩みましたが、息子の為に来ることは何でもしてみよう、どこでも行ってみようと家族で話し合って行く決心をしました。またこの時期は、療育や聴覚支援学校、そして指の訓練、耳以外の通院等、毎日どこかに出かけなければならず、こめっこに通うとなると妻の負担がさらに増えるので、こめっこに行くことと決めたタイミングで私も育休を取得しました。

こめっこに初めて行ったのは生後1歳になってすぐの時です。当時息子は人見知りと場所見知りがあある時期で、初めての場所に行くのはどうかなと心配していましたが、初日から手話をするろうの方を真剣に見ていて、人見知りもほとんどしなかったことに驚きました。初めて行った時に、ろうスタッフの方に「この子、動かしづらい指があるんですけど、手話って大丈夫ですか？」と聞いたら、「手話は全然大丈夫だよ。片腕しかない方でも自分なりの表現で手話をする方もいるし、全然問題ないよ、大丈夫。」と一言でくださって、その時の言い方が、私たちに気を遣っている感じではなく、本心から、大丈夫と言ってもらえたことが伝わり、私たちはとても安心しました。そこから、子どもと手話で会話することを目標にこめっこに通い始めました。

小橋母ノそれまでも療育で習った簡単な手話は使っていましたが、通い出して4ヶ月経つ頃にはこめっこでいつもしているお名前呼びの手話をマスターし、半年くらい通った頃にはこめっこぱんぱん、とんとんとん、出てくる何か？等の手話ができるようになり、目に見えて成長が感じられて私たちも本当に嬉しく、子育てが楽しく感じられるようになってきました。

家でも、この頃は好きなTV番組やアニメはあまりなかったのですが、こめっこの動画配信は集中して見ていて、この子にとって「目で見てわかる」ということの大切さをひしひしと感じていました。こめっこに親子で1年くらい通って、2歳になった頃には、手話で日常のコミュニケーションが取れるようになってきました。

その頃に一度、試しに手話がない環境に息子を入れてみようと思ったことがあります。小さい頃から地域の保育園等に入ってその環境に揉まれて慣れた方が良いという意見も聞いたことがあって、この子の場合はどうかなと試験的な気持ちで、一時預かりをしてもらえるところに何回かチャレンジしてみました。

結果は失敗で、驚くくらい、手話のない先生やお友達に心を許さず、ずっと入り口のドアの前で立って、何十分、何時間も、お友達との遊びに参加せずに親のお迎えを待っていました。お迎えに行くと、預けられたことを泣きながら怒って

嫌だった気持ちを伝えてきて、とても申し訳ない気持ちになりました。

息子の性格や初めての母子分離だったことも関係あると思いますが、この子にとっては手話がある環境が一番なんだと確信する出来事でした。

小橋父／こめっこは親にとっても、ろうの大人の方や難聴児の保護者に会える場所であり、手話でわからない表現や伝え方、悩みを相談できて安心できる場所でした。

子どものロールモデルになるような素敵なるろうの若い方や大人の方にもたくさん出会うことができ、絵本読みや手話劇ではその表現や表情の豊かさに私たち親も惹き込まれています。きっと子どもにとっても心強い存在であり、こめっこでお友達やろうスタッフさんと遊ぶ様子は本当にのびのびと楽しそうで、見ていてとても嬉しくなります。

こめっこで手話に出会う前、聞こえる音、聞こえない音を確認しては、一喜一憂していた時に比べると、親もかなり心が穏やかになり、聞こえなくても手話があれば大丈夫と思えるようになりました。

手話は手を使って話すものと思っていましたが、実際学んでみると、手よりも顔の表情だったり、体全体の動きも手話の文法であり、伝えたい気持ちはむしろ手だけでは伝わらないことを知りました。以前は、口の動きをはっきり見せることが大事なのではと思い、不自然にゆっくり口を動かして声かけをしたりしていましたが、それよりも眉の動きや目線、表情をつけて手話をするのでより豊かなコミュニケーションを取れるようになり、子どももすごく表情豊かに育ってくれています。

そして、手話に出会ってみて、「わかる」ことの大切さを改めて考えるようになりました。過去の私たちはできない手話があると嫌にならないかと心配していましたが、できない手話よりもできる手話の方がずっと多く、手話を見て理解することについては、指は何の問題にもならないと気づきました。この子がどうやって伝えるかは子どもの成長に合わせて一緒に考えていくべき課題ではありますが、子どもが手話であれ、口話や筆談であれ、どんな伝え方を選択するにしても、子どもが全てをわかることができる環境は私たちが手話を使うことで守ってあげたいと思っています。

せめて家の中はこの子が何もストレスを感じずに自然体でいられる場所であって欲しい、家族は聞こえる聞こえない関わらず対等に、気軽に、なんでも話ができる存在でありたいとそう願っています。

小橋母／私たちは、母親も父親も同じように子どもと手話で会話ができる家族になれたらいいなと思っています。以前、母親は手話が堪能だけど、父は手話が

できず、家で父と会話するときは母を介してでないと話ができないというろうの方の話を聞きました。父と話すのに母を経由しないといけないというのは、本人にとっても、父にとっても寂しいことだなと感じました。大きくなるにつれて、母親ではなく父親に相談したいことや、母親に言いたくないことも出てくるだろうし、そんな時に父親と2人で話ができるようになってほしいと思っています。

今では、夫の方が私よりも手話が自然にできるようになっていて、安心して息子を任せられて、とても助かっています。お気に入りのおもちゃ等、手話表現のないものは、家族の中で通じるファミリー手話を作ったりして、家族でコミュニケーションを楽しんでいます。

親として、うちの親がろうだったら手話で通じてよかったのにとか、この人たちは聴者だから話を通じないなと思わせてしまうのは悲しいので、今は手話はまだまだですが、子どもに置いていかれないように頑張ってお勉強でいきたいと思っています。こめっこスタッフの皆様、これからもご指導お願いします。

小橋父／こめっこは、何もわからず不安だった私たちが、手話を通じて、この子は聞こえなくても大丈夫だと思えるようになった場所です。子どもと豊かなコミュニケーションが取れるようになったおかげで、楽しく子育てができ、息子の個性や良いところをたくさん見つけられるようになりました。手話との出会いで、私たち親が今まで出会ってこなかった新しい世界を知るきっかけになり、この子の将来への不安が楽しみに変わりました。こめっこの皆様には感謝してもしきれません。

こめっこに出会い、支えてもらいながら子育てができ、私たち家族は本当に幸せだと思っています。これからも、私たちのように不安を抱える家族にとって唯一無二のかけがえのない場所であり続けるようずっと応援しています。

長くなりましたが、こめっこスタッフ、いつも関わってくださる皆様への感謝の気持ちと、このシンポジウムを見てくださっている方々とともに手話で育つ子どもたちの毎日をより豊かで過ごしやすいものにしていきたいという願いを込めて、お話しさせていただきました。

ご視聴ありがとうございました。

聞こえにくい子とパパ、 聞こえるママの言語獲得習得記録

中川十儀・中川亙世

中川父／こんにちは。中川です。よろしくお願ひします。

私たち家族の紹介をします。私たち家族は、私、妻、息子の3人家族です。それぞれの聴力についてですが、息子は、新生児聴覚スクリーニング検査でリファ－の結果が出て、聞こえにくいということが、はっきりとわかりました。ですが、私は新生児室にいる息子を見たときに、隣で大声で泣いている子の側でもスヤスヤ眠れているこの子は、聞こえにくいのか、聞こえていないのだろうと感じていました。その後、検査を経て生後6ヶ月から、補聴器を装用しています。現在の聴力は、両耳で55dB ぐらいです。

次は妻についてですが、妻は聴者です。結婚する前の家族も全員、聴者です。私も妻も、子どもが生まれるまで音声のみで会話していましたので、手話というものがあることは知っていましたが、学んだり、言語であることは知らずにいました。後ほど、結婚してからの夫婦間の会話についてや、子どもが生まれてから、こめっこに通い、どのような気持ちで過ごしてきたのかなどを妻から話しますので、お聞きください。

最後に私ですが、私は生まれつき聞こえにくいです。今、両耳で70dB ぐらいです。私の場合、聞こえにくく生まれましたが、聞こえる人として育ちましたので、大人になるまで補聴器も手話もありませんでした。家系の特徴としては、私の父と父方の祖父が聞こえにくく、私も含めそれぞれ聞こえる人と結婚し、その子どもの1人だけが聞こえにくいということです。

私が補聴器を装用したのは、25歳の頃で、仕事に支障をきたしていると判断したからですが、それでも、そのときはまだ自分がどれだけ聞こえていないのかの認識が薄く、補聴器を装用していると電話ができないという理由で、軽度用を右耳だけ購入して使用してしていました。以上、家族の紹介になります。

子どもの教育状況については、0歳から2歳までは大阪の聴覚支援学校と、こめっこに通っていましたが、幼稚部進学にあたり、大阪、奈良、東京の学校へ見学に行った結果、子どもが奈良ろう学校が良いと選択したので、現在は妻と子ど

も2人は、奈良に引っ越して生活し、週末や長期休みのときは大阪に帰ってきてこめっこに参加したりしています。言語に関しては、音声と手話の両方を獲得習得しながら、使い分けて話しています。では、妻にバトンタッチします。

中川母／よろしく申し上げます。

まず、夫婦間の会話についてですが、当初は、夫が補聴器をつけていたら聞こえていると思っていました。眼鏡をかけたら、はっきり見えるように、補聴器をつけたら、はっきり聞こえると思っていました。でも、話しかけてから夫が話し始めるまでに間があったり、会話がスムーズにいかないときがあり、「聞こえているか」「伝わっているか」常に不安に思うようになり、何か言語化できないモヤモヤが積み重なっていきました。また、夫は仕事が終わって家にいるときは、補聴器を外したいと言っていましたので、そうしてもらいたいと思いながら、大きな声で話すのが苦手な私は、結局、夫に補聴器をつけてもらって声での会話を続けていました。

私は、次第に声での会話に限界を感じるようになり、どうしたらいいのか考えるうちに、ふと手話で話せたらどうなんだろうと思ったのですが、夫と足並みを揃えたくて、このときはまだ手話の勉強を始めていませんでした。

子どもについては、夫と出会ったときから、2人の間に生まれてくる子は、聞こえにくいのか、聞こえないかもしれないと聞いていました。気がかりではありましたが、私は、もしそうであったとしても、愛情いっぱい育てていきたいと思い、夫の母からも、子育ての秘訣は「愛情いっぱい育てること」と伺っていましたので、それを心の支え・頼りにしていました。

結婚7年めに待望の子どもを授かり、新生児聴覚スクリーニング検査でリファーマーとなり、気がかりからは解放されました。でも、きこえの程度がわからない状態で、この子と具体的にどう接していけばいいのか、わからないという悩みが出てきて、その悩みがふくらみ、声を出して話しかけることができなくなった時期がありました。

生後5ヶ月で、両耳中等度難聴とわかり、夫と私は、サポートに補聴器装用による聴覚活用と、手話も必要であると考え、家族みんなで手話を学ぼうと動き出しました。手話を学べる場所はないかと相談したところ、精密検査を受けた病院では聴覚支援学校を、役所では、こめっこを紹介していただきました。

こめっこに初めて参加したときは、強いカルチャーショックを受け、マイノリティ体験をし、無知を恥じました。手話が全くわからず、手話を見て音声通訳を聞くのは難しくて、しだいに音声通訳も入ってこなくなり、これから通えるか、とても不安になりました。でも、子どもにとってはどうなんだろう？と考え、家族で手話を学びたい・手話で話せるようになりたい、という思いが強かったこと

から、とにかく子どもと一緒に参加させていただこうと思い直しました。その後、ひだまり・MOEで相談したときに、河崎先生より「手話は言語である」というお話を伺い、バイリンガル育児を夢見ていたこともあり、心が躍りました。子どもの言語獲得には、1日でも早く少しでも多く、ネイティブサイナーの手話に触れることが大切ではないか？と思い、気持ちを新たに、こめっこ、べびーこめっこにも参加し始めました。

こめっこに参加し始めてからしばらくは、私が補聴器の常時装用を目指して必死になっていたのですが、子どもは補聴器をつけて参加していたのですが、子どもが1歳7ヶ月の頃、こめっこ活動後に明らかに疲れたんだなと思うことがあり、その様子をスタッフの方に伝えたところ、河崎先生より、こめっこ活動中は補聴器を外しても良いのでは？とアドバイスをいただき、補聴器装用はその都度、子どもに確認して参加するようになりました。それから活動中は、ほとんど補聴器をつけていません。今では、話す相手や状況によってモードを切り替え、選択して話す様子や、自分は聞こえにくいから声より手話のほうが良いと思う、わかると教えてくれたことがあり、手話でわかる経験をしているおかげだなど、成長に驚き、教えてもらうばかりです。

子どもは、手話のあふれる環境で安心感に包まれているように感じます。私は、スタッフの皆さまに子どもをお任せして勉強させていただき、子どもの様子も共有していただけるので、とてもありがたくて嬉しいです。何かエピソードがあるたびに伝えたいと思うようになり、次回のこめっこを心待ちにするようになりました。念願かなって、親子だけでなく夫婦間でも手話で話せるようになってきて、喜びもひとしおです。家族みんなが、はっきりとわかり伝えられる言葉は、手話であるということを実感し、お互いに通じ合える喜びをかみしめています。最近は、ろうスタッフの方とも直接手話でお話できるようになってきて、とても楽しいです。

これからもずっと、手話だけでなく、手話の世界についても学びを続けさせていただき、共に歩んでいきたいです。

最後に、このたびこのような貴重な機会をいただき、体験・思いを振り返りながら、問題解決や子どもの成長の鍵は、言語としての手話だなど痛感しています。こめっこは、手話言語の獲得習得を支援してくださるだけでなく、研究プロジェクトを進めておられ、期待に胸を膨らませています。

活動が全国に広がって、より良い社会になることを願い、私たち家族のエピソードが何かしらお役に立てれば幸いです。今から、子どもの成長過程をまとめた動画を5分ほど見ていただいて、夫にバトンタッチいたします。ありがとうございました。

(動画)

中川父／ご覧いただき、ありがとうございます。ここからは私が交代して話します。よろしくお願ひします。時間の関係上、2つだけ話したいと思ひます。

まず1つめは、なぜ音声で生きてきた私が、子どもとの会話に手話も必要だと選んだのか。そしてもう1つは、私が積極的にこめっこに参加しだした理由です。2つとも、いくつかの理由がありますが、その中でも気持ちの大きいものを挙げます。

では1つめの、なぜ音声で生きてきた私が、子どもとの会話に手話も必要だと選んだのか、ですが、この子が生まれて、私と同じように聞こえにくいんだとわかったとき、私が幼少期にどのようなことを感じていたのか、振り返りました。辛かったことや、してもらって嬉しかったこと。いろんなことを思い出したとき、その中で、成人してからとても困ったことが3つあることがわかりました。それは、聞き間違い、言い間違い、覚え間違いの3つでした。それを少しでもフォローするには、目で見てわかる手話が必要だと思ったんです。

そして、こめっこに巡り合い、子育てに手話を取り入れたとき、子どもがまず目で追い、次に手が動き、そして自分なりに表現してから最後に声が出ている、ということがわかりました。しかも、その流れで獲得習得した言語は、とても吸収が早く、覚え間違いも少ないので、私たちにとって手話は、なくてはならない言語です。

次に2つめ、私が積極的にこめっこに参加しだした理由ですが、今だから話せますが、最初1年間ぐらひは、子どもとの会話に手話も必要だとわかってはいるけど、私自身が楽しめていなくて、いつもモヤモヤしていました。でもある日、子どもと一緒にこめっこオリジナルの手話ばんばんや手話劇を見ていると、吉本新喜劇を見ているときのように、すごく楽しんで見ている自分がいました。そのとき、これが、自分も楽しく、子どもも楽しく、家族みんな楽しく手話を学べる方法なんだと思ひました。それからというもの、こめっこに来て、子どもが興味を持って見ているのは何か。そのときの、こめっこスタッフの手話表現はどんななのか、その姿を見ないともったいない！と思ひました。それが今、積極的にこめっこに参加している1つの理由です。

最後に、私は、聞こえる人の半分以下の情報で約40年、生きてきたんだなと思ひています。学校の授業も、友だちとの会話も、世間では常識だと言われるようなことも、半分以下だったんだと今は感じます。過去、引きこもった時期もありました。命を断ちたいと思ひたときもあります。でも、逆に言うと、聞こえにくいおかげで、ネガティブな情報もあまり入ってきませんでしたから、ポジティブ思考だと言われる、この性格でいられるとも思ひます。そんな私が今、思ひます。数字やデータは大事ですが、それだけで判断するのは愛がないと私は思ひます。その道を歩むかどうか、その本人が選んで決める。その道があつてこそ、愛

があるんだと思います。最後までご視聴いただき、ありがとうございました。

【話題提供③】

人工内耳も手話も ～こめっこと歩んだ3年間～

奥田直樹

奥田／奥田と申します。「人工内耳も手話も～こめっこと歩んだ3年間～」と題して、難聴の娘とその親である私たちが、これまで体験してきたことや思いなどをお話しさせていただきます。それでは、よろしくお願ひします。

本日お話しする内容はご覧の通りです。

まずは、私たちの紹介です。娘は、現在5歳。1歳9ヶ月の時、言葉の遅れから難聴が分かり、両耳100db以上と診断。2歳1ヶ月の頃、両耳同時に人工内耳の手術を実施。現在は、聴覚支援学校に通学中です。こめっこには、難聴と分かってからすぐに通ひ始め、現在に至ります。私たち両親は聴者です。

ここからは時系列に、お話ししていきます。

0～1歳9ヶ月頃まで、難聴には全く気がつかず、聴こえる子として接していました。

1歳9ヶ月の時、1歳半検診にて難聴の指摘あり。その後、両耳重度難聴と診断。新生児スクリーニング検査結果を見直すと「リファー」とありましたが、検査当時は適切な説明がなされていませんでした。突然のことに驚き、これからどうすればいいのか？治療できるのか？どうやってコミュニケーションをとればいいのか？なぜ、もっと早く気がつかなかったのか？言葉の習得にはタイムリミットがあると聞いたこともあり、どうなるのだろうか？と、ありとあらゆる不安や恐怖が押し寄せていました。

わらをもすがる思いで、病院やインターネット、本などで情報収集し、いろいろな場所へ話を聞きに行ったり見たりしていました。その中のひとつが「こめっこ」でした。

その時の私たちの方針としては、それまで言葉がまったく入っていませんでしたので、とにかく手話も音声も同時進行で進めて、言葉を入れていきたいというものでした。早い時期に遅れを取り戻さないと、将来、生活や勉強、物事の理解に支障をきたすのではないかという考えからでした。

1歳10ヶ月の時、聴覚支援学校の早期相談へ通ひ始め、補聴器の装用を開始。

この頃、自発的に手話を使いだしました。ひとつ動画をご覧ください。観覧車を見て、自分なりの表現をしています。

(動画)

手話に出会って1～2ヶ月ほど。その表出の早さに驚きました。

2歳1ヶ月、両耳同時に人工内耳の手術を実施。子どもの意志でもないのに、身体を勝手にいじってしまっていていいのかと葛藤もありましたが、少しでも将来の可能性が広がるのであればという思いから手術の決断をしました。

2歳3ヶ月、療育も開始。とにかくいろいろなところへ行ってみていました。当時のメモを見返すと、どうやって動いていたのだろうという毎日を過ごしていました。

2歳6ヶ月、手話と共に音声も発するようになりました。

2歳7ヶ月、新型コロナウイルスの流行により、こめっこもリアルでの開催が制限されていました。そこで開始されたのが動画配信です。真似をしながら毎日のように見ていました。

そして、現在は5歳を過ぎ、聴覚支援学校に通学、こめっこにも通い、音声と手話を話しています。

ここで、動画配信視聴の効果として、2つの動画を紹介させてください。1つめは「体操アレンジ」、2つめは「おおきなかぶ」です。

(動画:体操アレンジ)

1つめの体操アレンジは、こめっこのどうぶつ体操をアレンジし、自分が知っている単語で体操をしています。

(動画:おおきなかぶ)

2つめは、こめっこの手話劇、おおきなかぶを見て楽しかったようで、内容もしっかり覚え、再現してくれました。この動画を撮ったのは、こめっこに通い始めてから1年、人工内耳手術から7ヶ月の時期でした。

対面でのこめっこに参加できず、手話の習得に遅れが出るのではないかと心配しましたが、日々手話を繰り出す娘を見て、動画の視聴は続けていこうと思っていました。こめっこ動画は単に見せるだけでなく、双方向のコミュニケーションができるようになることを前提に考え、作っているとのことで、視聴していた娘もインプットとアウトプットが進んだ結果が出たのだと思っています。

現在のコミュニケーション方法についてもお話します。基本的には、日中は人工内耳を装用し、音声で話し、手話を補助的に使用することが多いです。入浴後、就寝前、心身の状況などによっては人工内耳を装用せず、本人は音声で話し、私たちは手話で話をしています。こめっこスタッフさんやろうの方と話すときは、手話をしています。人工内耳に加え両親が音声メインということもあり、音声の割合は高めです。音声と手話の比率は今後の環境や娘自身の考え方に合わ

せて、変化していければ良いと考えています。また、安全面で心配な時以外は、装用を強制しすぎないようにしています。

ここまで、難聴が判明してから現在までをご紹介してきました。ここからは、そんなこれまでを思い返してみても、今だから思うことなどもお伝えしていきます。

0～1歳9ヶ月頃まで生まれた時から、自分たちと同じく聴こえているものとして接していたため、音声で話しかけ、絵本の読み聞かせや、児童館へ行ったり、リトミックを習ったりもしていました。第1子だったこと、両親とも知識を持っていなかったことなどから、約2年間、言葉は遅いけど、興味関心の多い、目ざとい子だなと思って子育てをしていました。もし、新生児スクリーニング検査で難聴と分かっていたら、この子は聴こえないからと親の判断で勝手に諦めていたこともあったかもしれません。また、手話への熱意も変わっていたかもしれません。

今だからこそ言えることですが、聴こえる子として育った2年も決してマイナスではなかったと思っています。こめっこに相談へ行った時にも、心配そうな私たちに「全然大丈夫！親子でのコミュニケーションができているから」と言っていたいただきました。

手話によって、言葉の概念や基礎ができたところへ、人工内耳によって音声言語も入り、それぞれが結びつき、結果的にはそれが良かったと感じています。発達検査の結果や、日常の様子を見ても、言葉の遅れを感じさせないくらいに成長してくれています。

こめっこ講演会の話から早瀬憲太郎さんのお話が印象的でした。「親が電話をしている時、聴者の子は、誰と何を話しているかは聞こえてくるのでわかる。ろう者の子は、誰と何を話しているのかは聞こえないのでわからない。自分の母親は、電話の時に手話をしてくれていたので、誰と何を話しているのか理解できた」

このお話を聞いたとき、自分たちの当たり前が娘の当たり前でないことに気づかされ、コミュニケーションや情報から疎外してしまうことを理解しました。聴こえる子が、周囲の音声情報を小耳に挟みながら、さまざまな言葉や事柄を知っていくのと同じ環境にするために、家庭内での手話による情報保障をしようと思いました。

最後にこめっこへの思いもお話しします。

難聴とわかってすぐに、こめっこ(豊かな手話の世界)に出会えたおかげで、娘を「障害者」と思うことはありませんでした。こめっこに参加していくことで、聴こえる親子が行うような当たり前の日常会話ができることがわかり安心しました。言葉や理解など発達の遅れに対しても、「大丈夫だよ」と言っていたいただき、焦

らなくなりました。手話があるから大丈夫、なんとかなると思える世界が、こめっこにはありました。聴こえていなくても、聴こえていても、目の前の「わたし」を受入れてくれるこめっこの雰囲気は、今も変わりません。

人工内耳を装用し、音声でのコミュニケーション割合が多くなった今も、こめっこに通っています。その理由は2つあります。

1つは、日本手話に触れてほしいということ。自分たちは日本語対応手話しかできないため、どうしても手話としては不完全で、日本語に頼った手話になってしまいます。私たちは聴者ですが、手話は言語として、とても魅力的だと思っているので、表現豊かな手話を娘にも身につけてほしいという思いがあります。

もう1つは、聴こえない「自分」も、聴こえる「自分」も肯定してほしいということ。人工内耳を装用しても、聴こえには限度があります。私たちには聴こえない娘が本来の姿という思いがあります。将来の選択肢を増やすために人工内耳の手術という決断をしましたが、本来の姿でいられる、聴こえない世界で自由に過ごす時間も持ってほしいと思っています。さらに欲を言えば、成長過程において、手話も音声もどちらの世界も気軽に行き来してほしいですし、アイデンティティ形成にも役立ててほしいと思っています。

駆け足ではありましたが、私たちからの話題提供は以上になります。半ば強引にまとめる形になりましたが、どこまでいっても親の私たちの勝手な思いであふれているなどいつも思ってしまいます。あれこれ悩むことはこれからも出てくるでしょうが、こめっこと共に成長していければと思います。よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

【動画配信について】

河崎／ありがとうございます。

支援してきたスタッフたちも、心の底より思いを寄せる、共有することのできるお話だったと思います。

3家族からの話題提供に共通して、毎日動画配信の話がありました。ここで、この動画配信について、物井さんから簡単に紹介していただこうと思います。よろしく願いいたします。

物井／毎日動画配信について説明をします。

2020年2月のコロナ自粛により対面活動の休みを余儀なくされ、それでも子どもたちに手話に触れる時間を提供したいという思いで、3月から6月末まで毎日113日間、動画配信を続けたことがきっかけです。

この動画配信は、私たちが思った以上の効果があり、子どもたちの成長と家族の笑顔を目の当たりにした私たちは、対面活動が再開した後も続けて、毎日配信を行っています。

内容は、対面での活動内容をいつでもお家で楽しんで観ることができるNPOこめっこ版「おかあさんといっしょ」のようなものです。毎日異なる内容で、大体15分間程度です。対象保護者宛にURLを送り、YouTube限定公開により配信しています。

こめっこで作られた手話表現作品を「手話ばんばん」と呼び、テーマソングのようなこめっこばんばん、季節や生活に合わせた内容のばんばん、あそびのばんばんなど、多くの手話ばんばんが生まれました。これらは、こめっこのろうスタッフが日本手話から作りだすオリジナル(独自の)作品です。こうして完成した作品に、聴スタッフが手話の意味とリズムを活かした日本語訳を付けています。

動画の中のろうスタッフの会話や説明などの音声通訳も、子どもに語りかけるような自然な日本語になっています。

2分ほどのダイジェスト版をつくりましたので、動画をご覧ください。

(動画)

河崎／物井さん、ありがとうございます。

今も、「ばんばん」は生まれ続けています。私が、「次、〇〇作って」と言って、ろうスタッフが見事に作品を作り出してくれています。

では、話題提供はここまでといたしまして、久保沢さんに司会をバトンタッチいたします。

司会／ありがとうございます。

【指定討論①】

「当事者」の視点から

国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科
木村晴美

司会／それでは、指定討論をお願いしている、木村先生、前川先生から、話題提供に関するご意見やご質問をお話しいたします。

まず、国立障害者リハビリテーションセンター学院の木村 晴美(きむら はるみ)先生です。

木村先生は、国立障害者リハビリテーションセンター学院で、手話通訳養成の教官をされています。また、NHK 手話ニュースキャスターでもあります。1995 年に「ろう文化宣言」を発表し、社会に大きな影響を与えました。

本日は、「当事者」の視点からお話しいたします。木村先生よろしくお願ひいたします。

木村／ご紹介いただきました木村です。よろしくお願ひします。

私も両親、弟はろう者です。中学部まではろう学校へ通い、高校からインテグレーションしました。

重要なのはオーディズムの存在に気づくことだと思います。ろうの子どもを持つ親御さんは、子どもが聞こえないことでショックを受け、悲しんでいるという話をよく聞きます。しかし、その話は、私たちろう者からしてみれば、何度も繰り返し聞かされていることなのです。ろう者自身は、ろうであることをマイナスには思っていません。どうして、その話が繰り返されるのか。私たちの社会に存在するろうに対するマイナス、オーディズムにまず気づくことが大切です。

このTシャツの真ん中に英文があります。これは、「私はろう者で、聴覚障害者ではない」という意味の英語です。1991年だったでしょうか、32年前アメリカのTBC(The Bilingual

スライド2



スライド 3

Center)で研修しました。当時、手話の教育や言語的なものに対する知識が私には全くありませんでした。そのときに指導してくださったのがMJ・ビアンヴニュという方です。彼女がこのTシャツを作り、私も気に入って着ていたのですが、随分着回してしまい、捨てるときに、記念に写真を撮りました。英語を読める外人さんは、私の着ていたTシャツを不思議そうに見ることが多かったですね。「Deaf」と「hearing impaired」の違いを知らなかったからだと思います。ろう当事者にとって、聴覚障害者と呼ばれることは抵抗感を感じます。私たちは「ろう者」なのです。



スライド 4

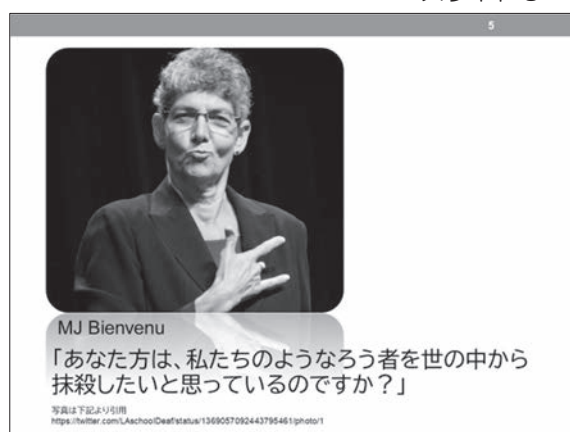
写真の男性は、グラハム・ベルです。電話を発明した有名な人です。彼の奥さんはろう者です。しかし、ベルはろうという欠陥種は遺伝するとして、ろう者同士で結婚すべきではないとしました。ろう者との出会いを禁じ、ろうの子どもが生まれることを防ぐべきだと考えました。そのため、ろう学校や寄宿舎という場もなくすべきと主張した方です。19世紀後半の話ですが、こういった考えが、今まだあるかどうかを考えなければいけません。



彼女が、MJ・ビアンヴニュです。さきほどのTシャツを作った人です。ギャロデッド大学の教授を先日までされていました。

MJは、オーディズムの考えを持つ人に対して、「あなた方は、私たちのようなろう者を世の中から、抹殺したいと思っているのですか？」と発言しています。例えば、先日注目を集めた「silent」のドラマ。その中で、もしかしたら生まれてくる子どもが聞こえないのではと心配し、医師から「大丈夫、聞こえます」と言われて安堵するシーンがありました。これを見ると、

スライド 5



私たちとしては「またか」と思わざるをえません。社会的にはまだまだ、このような考えが残っているのです。「聞こえたほうがよい」というオーディズムの存在がまだあります。

先程の3家族の話を持って、小橋さんの家族は、生まれた時に聞こえないとわかって、すぐに手話が思い浮かんだと言われていました。今の社会でろうの子どもが生まれたときに、すぐに手話の存在に気づく人がいることが、私はとても嬉しいです。

中川さんご家族は、お父さんご自身は、聞こえにくいけれど、聴者として育てこられた。けれど、息子には手話が必要と思われたんですね。そして手話と音声の2言語、バイリンガルで育てたいという気持ちがあるとされていました。手話も日本語もという家族がいることが嬉しいです。

奥田さんご家族は、人工内耳という選択をされています。家庭では声によることが多いが、手話も身に着けたいとおっしゃっていました。3家族ともに、「こめっこ」が重要な場になっていると思います。

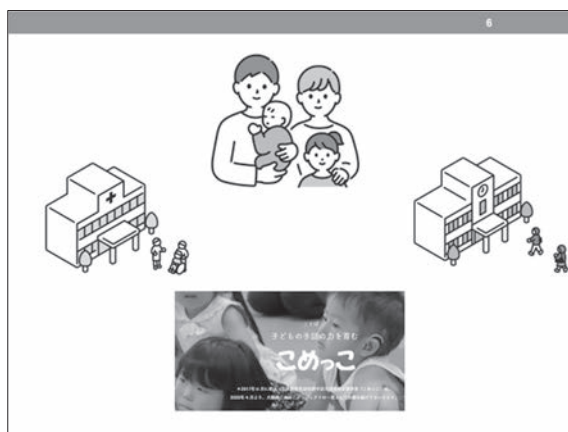
(スライド6)

まずは病院で聞こえないとわかります。病院というのは、まさにオーディズムの塊です。できるだけ聴者に近づくように、人工内耳や補聴器を勧めます。手話も選択肢のひとつと説明する病院もあると思いますが、ごく少数でしょう。たいていは手話を使うと人工内耳の効果が期待できないと説明するのではないのでしょうか。

ろう学校は、今は聴覚支援学校ですが、そこでもやはり、人工内耳の子、難聴の子、ろうの子、1人ひとりに合わせた教育を行うとっています。さまざまな子ども、1人ひとりに合わせて教育するというのは、かつてのトータルコミュニケーションのような形だと思います。手話が必要な子には手話で、口話ができる子には口話と、それぞれ子どもにあわせたコミュニケーションを行う方法です。それはたいへん危険なことだと思います。1人ひとりに合わせるとというのは、聞こえがいいですが、誰かが犠牲になっているということを忘れてはいけないと思います。

ろうの子、難聴の子、人工内耳の子、1人ひとりに合わせた教育というのは、つまり、口話ができる子どもへの教育は、手話が必要な子が見てもわからない。手話が必要な子どもへの教育は、人工内耳や手話のわからない子が見てもわからないということになり

スライド6



ます。同じ教育を受けている子どもたちが同じ情報を得ることができないという状態になっています。つまり、誰かに合わせたときに、別の誰かが、我慢しなければならない状況になっています。そして、その誰かは、たいていは手話の子どもたちです。

一方で、こめっこは共通言語として手話を使っています。その場にいるすべての子どもがわかる、つまり皆がわかるのがあたりまえの環境です。ろう、難聴、人工内耳の子ども、すべての子がわかるんです。

12月に私もこめっこを見学に行きました。驚いたのは、きょうだいの参加があったことです。ろうの子どものきょうだいつまり、聴の子どもも参加しているのです。ろうのきょうだいをもつ人を「ソーダ」と言っていますが、ソーダである子どもも含め、皆が手話でやりとりをしています。こめっこは、共通言語が日本手話、子どもたちは聞こえの程度に関係なく、日本手話という共通言語を持っていること。そして運営する上でも、ブレない方針を持っていると感じました。「この子には声で話そう」ではなく、「ここは日本手話でやる」と、ブレずにやっています。つまりデフスペースとして重要な場となっています。聴力に関係なく、すべての子が見てわかる、その環境がこめっこには用意されています。それは大変重要で、必要な場だと思います。

次に驚いたのが「手話ばんばん」。手話ばんばんには、いろいろな作品があります。名前呼びのばんばん、おやすみのときのばんばんなど、たくさん作品があり、参加している子どもたちはとても楽しんで一緒に手を動かしていました。手話ばんばんは、聴者の音声のリズムではなく、手話のリズムに合わせて作られた日本手話オリジナルなので、子どもたちが楽しめるのだと思います。そして、それを子どもたちが覚えていくことが重要です。聴者の子どもは、保育園や幼稚園、学校で童謡や歌を覚えていきます。一方、手話には、覚える過程が必要な作品というものが存在しないのです。書き言葉がないので、同じ作品をろうコミュニティで共有しにくい側面があります。しかし、手話ばんばんは、こめっこの子どもたちが覚えていけるような作品になっています。そういった作品を覚えていくことは、子どもの学習言語の発達にも大変、効果があります。

1人ひとりに合わせたコミュニケーションは、家庭等では、その必要性があると思います。中川さん家族の場合、音声でも手話でも話していると思います。人工内耳の子どもには声で話すことが多いです。家庭ごとに子どもにあわせたコミュニケーションがあります。しかし、こめっこにおいては、どんな子どもでも、誰でも見てわかる、安心できる場として、日本手話での活動をブレずにしていく場であることが必要です。

ここで必要なのは、保護者への支援です。子どもはこめっこの手話の環境があれば、自然に手話を獲得できます。一方、親御さんはどうでしょうか。手話が必要

要だとわかっていても、学ぶ機会がなかなかありませんし、手話を学ぶのは大変だと思います。親御さんも仕事があるし、聞こえるきょうだいもいるかもしれません。そんな忙しい中で手話を覚えるのは簡単ではありません。

コロナのおかげというのでしょうか、動画配信も以前よりは容易になり、アクセスしやすくなりました。ろう者のスタッフを増やして、親御さんへの手話指導のプログラムというのも作っていくのも良いと思います。ろうの子どもへの指導だけでなく、ろうの子どもを持つ親御さんへの手話指導プログラムを確立していくことも1つの課題としてあると思います。

以上です。ありがとうございました。



【指定討論②】

「手話言語教育」の視点から

関西学院大学 手話言語研究センター
関西デフ・フリースクール「しゅわっち」
前川和美

司会／続いて、関西学院大学手話言語研究センター助教、また、関西デフ・フリースクール「しゅわっち」の代表を務めておられる前川 和美(まえがわ かずみ)先生です。手話指導歴約 20 年の経験があり、現在は関西学院大学で、「ろう児をもつ親への手話指導」について研究しておられます。

今回は、「手話言語教育」の視点からお話しいただきます。よろしくお願ひいたします。

前川／ご紹介いただきました前川です。よろしくお願ひいたします。

現在は関西学院大学の手話言語研究センターで手話の研究、手話指導について担当しています。また紹介にあったように、関西デフ・フリースクール「しゅわっち」の代表もしています。本日は手話指導の立場から、その視点からお話をします。

先ほどの 3 家族の皆さん、木村先生の話をお伺いして、改めて私が子どもの頃のように思いを馳せました。木村先生からも話がありましたように、私が小さい頃と現在では、社会が変わっています。もうすぐ 50 代なので、当時と今の状況は大きな差があると思います。それを考えながらお話しします。

大きく変わった時代の変遷です。子どもがろう児だとわかったときの反応です。50 年くらい前と現在「しゅわっち」にいるお子さんの保護者とはずいぶん違います。もちろん今でも、耳が聞こえない子どもが生まれて、大変ショックを受けるかたもいると思いますが、以前は、保護者が、「私が何かをしたからだろうか、してなかったからだろうか」「自分はこのまま生きていけない」と大きなショックを受ける人が多かったです。でも、ろう者として、皆さんに、どのように「大丈夫、心配いらぬ」とお話しすべきなのか、本当にそれが難しいくらい保護者のかたの不安は大きなものでした。しかし、現在そう思っている人は、前に比べるとずいぶん減っていると思います。

ただ、日本全国でも大阪のろう学校は、私が小さい頃は、手話を使うことが禁じられていて、きびしく口話教育を受けました。ですので、ろう学校にいるときは、残存聴力を生かしながら、口話で、口の形を読み取る教育が行われていました。また、母親法のようなものが主流で、1日ずっとつきっきりで、ろう学校から帰ってきても、きびしく訓練しました。私も友人の家に遊びに行くと、家の中にももの名前を書いた紙が貼られていて、家の中でも自由に手話を使うことは禁止されており、手話を使うと、話せなくなる、勉強ができなくなると言われていました。そのように訓練に時間を費やされるので、教科書の指導も1～2年遅れている状況でした。

私が20歳の頃、1995年。そこで、ろう文化宣言が木村先生と市田先生により発表されました。幸い、私は木村さんの講演会に参加することができました。そして、「ろう文化」というテーマで話をされていました。文化祭のようなものだろうと思い参加したのですが、全く違うものでした。そこで、目からうろこが落ちるような経験をしました。講演の始めから終わりまで、「私もそうだ」と思うことが、たくさんありました。

私は小さい頃から補聴器を付けて暮らしていました。何かをするときは、必ず補聴器を付けていました。声で話をして通じない人、つまり聞こえない人は、私よりも劣っていると思っていました。私は中等度の難聴で、60dbくらいだったので、補聴器があれば、聞こえていましたし、声で話すこともでき、家庭に帰れば手話で話すこともできました。あらためて自分自身について考えると、自分自身はろう者なのか、難聴者なのか疑問を持つようになったし、また私の行動がろう者の首をしめていたことに気づきました。今日見ている方は驚いたと思いますが、その日をきっかけに、声を使わず、手話で生きることにしました。

現在はろう者であること、耳の聞こえない子とわかれば、すぐにインターネットなどで情報を得ることができますが、以前はそうではありませんでした。SNSの普及によって、様々な情報が得られるのは良い状況だと思います。また手話ドラマの影響もあります。最近、また手話をあつかったドラマが始まったようです。以前と違うのは、耳が聞こえない人が出てくると、その人は助けてあげなければいけない、障害者としての視点しかありませんでしたが、現在はろう者が出てきたら、「その人は手話で生活している人」と捉えられているようになっています。

また、言語としての手話への理解も広まっていると思いました。以前は身振りと同等に劣ったものと思われていましたが、手話は劣ったものではなく、きちんとしたしっかりした言語だというのが以前に比べて、ずいぶん浸透してきていると思います。

改めて、ろう児にとっての手話を考えます。ろうの子どもは、「目の子ども」、

目で見てわかる言葉、手話を用いる子どもです。聴の子たちが、耳で音によって情報を得るかわりに、目からすべての情報を得ます。もしも耳の聞こえる子どもの視覚の力を100%とすれば、ろうの子は150%くらいの視覚の力を持っているかもしれません。例えば、車を運転しているとき、聴者は緊急車両の音を聞いて、わかるようですが、実際は運転をしている私の方が先にわかって、道をあけたりします。(聴者の)同乗者に「音が聞こえないのに、なぜわかったの?」と驚かれます。実際は、目から得られる様々な情報、音以外の情報から、さまざまなことを得ています。

チェン・ピクラー先生が発表された論文に、聞こえのレベルに関係なく、ろう児にとっての第一言語は手話である。その第一言語をきちんと獲得をしていけば、その後、第二言語(書き言葉)の習得また学力の向上に繋がるという研究結果が示されています。つまり、ろう児にとって、人工内耳の装用の有無にかかわらず、耳が聞こえない、聞こえにくい子どもには、手話という言語が必要です。

そのとき、もし聞こえる家庭に耳の聞こえない赤ちゃんが生まれるなら、「どうしよう」と思われると思います。まず、両親がきちんと手話を使えるようにならないといけないのかと。

スライドにあるような研究結果が出ています。元々耳の聞こえない子の90%は、耳が聞こえる親から生まれます。多くの聞こえる両親を持った、ろうの子たち、聴力の差はありますが、聞こえにくい以上、100%の情報を音から得ることはできません。そのような家庭で、聞こえる両親の拙い手話のインプットであっても、その両親の手話力を超えてきちんとした言語の手話を獲得できるという研究結果があります。

親が聴者でも、手話にふれるのが早ければ、年齢相応の語彙力を獲得できるという研究もあります。3つの家族の話でも、気づいた段階ですぐにこめっこに来たのも効果的だと思います。

ろう児の手話の言語獲得、その発達について。聴の子どもは少しずつ日本語を話せるようになりますが、舌や喉の仕組みが、大人と同じように発達していないときは、「葉」という単語をしっかりと発音できず「くちゅり」から始まり、「くしゅり」になり、「くすり」とだんだん発音できるようになります。手話も体の発達とともに、大人と同じようにできるようになります。例えば、「お母さん」という手話。小指を立てるのは難しいので、最初は人差し指を伸ばしたり、もう少しできるようになると、小指だけが伸ばせるようになり、「お母さん」という手話ができるようになる。それに比べてお父さんという親指だけを立てる手話はお母さんの手話よりも楽なので、先にできるようになる。それでお母さんがショックを受けるといった話もありますが、これは手や指の発達と関係があります。

どんな言語も複数の単語をつなげると音韻変化が起こります。日本語では、

「ほん」と「たな」という単語がくっつくと、「ほんだな」と棚の最初の文字が濁ります。これは、何度も話すうちに、できるだけ話しやすい発音になるからです。「洗濯機」もそうです。普段、なんとよんでいますか？「せんたっき」と言うのではないのでしょうか。話しやすく変化します。「おかあさん」もそうです。見てください。この2つ、どこが違うかわかりますか。もう一度、します。1つめ(手話表現)、2つめ(手話表現)。わかりました？

1つめはまず人差し指だけを伸ばして、その後、人差し指を折ってから小指が出ます。辞書形という手話の本に載っているような動かし方です。でも、実際ろう者は、最初から小指が伸びています。これも、音韻変化が起こり、話しやすい形に変わっているのです。他にも、「ろう」、「学校」という単語。2つがつながって「ろう学校」を表すと違う表現になります。「ろう」と「学校」を分けずに、1つの単語として音韻変化が起こります。「せんたくき」が「せんたっき」になるような変化と同じです。これも子どもの言語発達とともに、これもできるようになったと見てください。

その他として3つあります。

正直なところ、人工内耳は私にとっては恐怖でした。以前、私が学生だったころ、人工内耳を装用した人がいました。その人たちは、私たちのグループには交わろうとしませんでした。なぜかと言うと、装用していない人は、人工内耳が使えず、声も使えない、手話しか使えないと思われていたからです。逆に私たちろう者からは、あの人たちは手話の世界に入れたい、別の人だと思っていました。現在は、そのような分断は少なくなっていると思います。人工内耳を装用していても、人工内耳も手話も、という暮らし方を選ぶ人がいます。お互いを避けるのではなく、一緒に共に歩むことができれば、現在のよう環境からは、そういう考えを持ったお子さんも生まれてくると思います。

以前、鳥越先生が「難聴学級の手話指導」について研究をされていたとき、依頼を受けて、毎週私が手話を教える活動を始めました。最初、子どもたちは手話に興味がないようでした。しかし、だんだんわかってくると、どんどん手話でコミュニケーションが成立して、さまざまな話ができるようになりました。そのときの研究論文はQRコードから見られますので、興味があれば、ぜひご覧ください。

3つめ、ディナーテーブル症候群について。ご家族の中に、ろうの子どもが1人の場合。食卓ではさまざまなおしゃべりが交わされます。ろうの子どもにわかるように、共通の話題が選ばれます。そのなかで、子どもは愛情を受けて、みんなに愛されてこの食事の席についていることは理解しても、テレビや他のきっかけで、話が音声のみに偏ってしまうことを、ろうの子どもたちはたくさん経験しています。ぜひ、今日これを見ているご家族の皆さんは、そういったことが起

きないように、そういったことの説明がありますのでQRコードでお読みください。

最後にまとめです。聞こえる両親から生まれたろうの子どもは、2つの世界を持つ特別なお子さんだと思います。目で見える人に合わせて発達した言語である日本手話があっこそ、聴者の文化とろう者の文化の両方を理解することができます。その2つの文化を感じ取りながら成長していくことができるわけです。その環境があっこそ、家庭でも、いろいろなやり取りができますし、心の発達も進みます。そのとき必要なのが、成人ろう者のロールモデルです。それを考えると、「こめっこ」は素晴らしい理想的な環境が揃っています。これからもこめっこを応援したいと思っています。

以上です、ありがとうございました。

【指定コメント】

研究プロジェクトメンバーのコメント

司会／ディスカッションに入る前に、まず、3名の先生方からコメントをいただきます。

大阪公立大学大学院准教授の阪本 浩一(さかもと ひろかず)先生、東京大学大学院教授の酒井 邦嘉(さかい くによし)先生、金沢大学教授の武居 渡(たけい わたる)先生。皆さん、こめっこ研究プロジェクトのメンバーです。

最初に、「耳鼻咽喉科医の視点から」阪本先生、その後順に、「脳科学の分野から」酒井先生、「言語獲得の分野から」武居先生にお話しいただきます。それぞれ10分ほどでお願いいたします。

阪本先生、お願いします。

「耳鼻咽喉科医の視点から」

大阪公立大学大学院耳鼻咽喉病態学
准教授 阪本浩一

こんにちは。よろしく申し上げます。私は耳鼻咽喉科医です。まず、自己紹介をします。大阪市立大学に平成元年(1989)に耳鼻科医として入局しました。ずっと難聴のお子さんとは直接会うことはありませんでしたが、2003年に兵庫県神戸の大学に移り、そこで、兵庫県立こども病院に勤務しました。そこで、難聴の子と初めて出会い、そこから、いろんなことを勉強する機会が増えました。現在は、2016年から大阪市立大学、この春から公立大学に名前が変わりましたが、耳鼻科医として働いています。大阪府の乳幼児の委員会の委員長をしたり、子どもさんの難聴の研究の一環として、こめっこにも参加させていただいて、一緒に研究しています。

今日は、耳鼻科医の立場からとして、先程の木村先生の話にもありましたが、オーディズムというか、耳鼻科医としては、「聞こえない」ことは、治さないといけないと、若い頃から教育を受けています。難聴をなんとかしようと、刷り込まれています。ただ、耳鼻科医としても、今は手話を使った教育、手話文化が非常に大事だとわかっている先生もちょっとずつ増えているということは理解してください。以前のシンポジウムにも参加いただいた、秋田の中澤先生をはじめと

して、中澤先生が去年書かれた耳鼻咽喉科の論文として、手話がろうの方の第一言語だと、耳鼻科の会合の雑誌に書かれました。そこには、先程から皆さんおっしゃっているように、聞こえない人の第一言語は手話であり、第二言語として日本語は、教育するのが自然なことであると。手話の方が音声言語よりも何百万年も古いんだと。それが耳鼻科の雑誌に載るくらいになって、耳鼻科医も手話言語を大切にしようと少しはなっていると思います。

ただ、現実で考えると、新生児スクリーニング研究が進んでいて、数年前から、厚生労働省が実際にお金を出して補助するようになりました。新生児スクリーニングの率も 99% と非常に高くなっています。それによって、軽度の子どもさんも見付き、聞こえにくさを持つお子さんも早く見つかる現実があります。それに対してどうするか。非常に軽度、中等度、重度の方、それぞれ、どうすればよいのか。どんなふうに支援をすればよいのか、考えるようになってきています。

その中で主流な考えは、補聴器や人工内耳を使って聞こえるようにしているという考えが未だに強い。その中で大きな問題として、人工内耳のことがあります。今は、早期装用が主流で、世界では1歳前にしようとなっていて。日本は、1歳が基準になっていて、世界においては遅い方ですが、世界でも早くしようという流れがあります。言語の獲得から考えると、早期に聞こえていないと聴覚の自然な取得ができないと。理論的にはその通りだと思いますが、そのような流れがあります。それを推し進めると、手話をどのように考えればよいのかということに突き当たります。

その中で、1つの考えとして、人工内耳がうまくいかない人が一定の割合でいます。それが2番めに書いているように、難聴の原因がだんだんわかるようになってきています。遺伝子だったり、難聴の原因がどこにあるのか、遺伝子のどこがやられているのかが、わかる。それによって、同じ重度難聴でも人工内耳の効果がないことがわかる。そうすると、人工内耳の効果がない人には、勧めない。そのような効果を予測する選別も進んでいます。

一方で、中澤先生をはじめ、ろうの方、中等度でも、軽度でも聞こえにくさを持っている人は、手話を獲得しているほうが、将来においても、大事だという考えも、増えてきています。私もこめっこさんに何度か訪れたり、こういうシンポジウムに参加し、研究で久保沢さんや物井さんとお会いしていろいろ話を伺ったり、見ていると、軽度でも中等度であっても、手話を持っていることで、コミュニケーションが円滑にできていて、それを基盤として、言葉が発達していると感じます。

我々のところに新生児聴覚スクリーニング検査の結果をもって精密検査に来られる方、非常に不安に思われる方も多いです。リファの結果を持ってこられる。リファは要再検査で、まだ結果として確定していないものです。そこで詳

しく検査をし、その人の難聴を診断するのが、我々の仕事です。その結果が出た時に、その先をどうするのかということ相談が、非常に重要になってきます。

我々は大阪府でこめっこ事業と連携したいということで、こめっこを紹介して見てもらう道を作りたいと考えています。そのため、こめっこさんを積極的に紹介しています。そこで、スタッフや河崎先生と交流されて、そこで、両親がいろんなことを考えて選択していくが重要と考えています。いまは、地域によっての差がありますが、少なくとも大阪の私どものところでは、まず難聴、聞こえにくさを持ってきた人には、手話があり、それに触れて、体験できる場所が大阪にあり、それを大阪府が提供していると紹介できることは、非常に良いことだと思っています。

まとめを書きましたが、1つは新生児スクリーニング率が高まっていて、聞こえに困難がある子どもさん、軽度から中等度、重度まで非常に早く見つかる環境ができています。そして早くわかったことに対して、どうするのかが重要。より医学的には、早期診断、早期に補聴という流れがあります。その中で、手話言語に触れる機会をどのように提供し、紹介していくのかは、我々耳鼻科も、それをいいと思い、知っておかないといけない時代です。

もう1つは医療技術の進歩です。人工内耳も100から90へと程度が軽いものへと移っていますが、より性能的にも進歩しています。装用して聞くことを体験させてやりたいという親御さんもいます。その中で、それと手話を使うことは矛盾せず、両立できるというのをきちんと説明する。それが、医療者の立場、姿勢を守ってほしいと、私たちも言っていますが、それは正直なところ、日本の主流にはまだなっていません。それは我々の責務であり、このようなこめっこのシンポジウムや活動に参加する医師は少なく、本当はもっと耳鼻科医が参加すべきだろうといつも思います。それが現状です。手話をすることで補聴器や人工内耳がうまくいかない子どもたち、そういう人に対して、救い、新たな展開になることを子どもたちは経験しているので、そういうこともあるということを医師にもぜひ知っていただきたいと思っています。

最後に、お願いします。2月11日、12日に小児診療多職種研究会を大阪公立大学でします。小児科医、耳鼻科医、看護師、臨床心理士さんや言語聴覚士なども来られます。ここで、河崎先生と、こめっこのスタッフさんにも講演いただきます。それが阪大の太田先生、諏訪先生という人工内耳の先生の次に続くということで、人工内耳をされている先生の次に河崎先生のお話が聞ける貴重な機会です。関係のかたでご興味があれば、参加登録はインターネットのホームページからできますので、来ていただければと思います。

「脳科学の分野から」

東京大学大学院総合文化研究科

教授 酒井邦嘉

言語脳科学という分野で研究をしているので、それを交えてお話をします。既にいろいろと大切な論点が出てきていますから、繰り返しは避けて、脳から見たときに複数の言語をなぜ子どもが習得できるのかということについて、お話ししたいと思います。

日本語と手話は違うという話が出ました。それは表面的な違いで、人間の脳から見るとどちらも自然言語であり、区別はありません。コードもそうですが、バイリンガルで生まれたお子さんの場合は、どちらも自分の母語として話します。入力された情報を分析して、普遍文法で組みなおして合成して出力するということです。決して単なる復唱ではありませんし、たとえ第二言語であっても勉強しないといけないと考える必要はありません。先を焦って、できるだけ早く学ぼうとして、かづくで勉強などを始めるべきではないのです。子どもは言葉を自然に吸収しますから、その意味では言語環境としては多言語環境が理想的だと言えます。同時に学べば、片方がおろそかになると考える根拠はありません。同時に複数の言語が身についていくのが自然で、これは聴者のコードの場合も同じです。聴者が手話をろうの環境で学べば、理想的な多言語環境でバイリンガルになります。そこは全く問題がないということ、ろう児に対しても同様に理解してください。

こめっこの活動で多くの配信がされて、多くのかたの努力により、コロナ禍にあっても手話の刺激を絶やすことなく豊富な手話環境を維持できたことは、本当に素晴らしいことです。実際に体験されたお子さんのレポートからもわかると思います。ただ、常に新しい内容を日替わりで配信していく必要があるかというと、そうではありません。我々は記憶できることが大切で、「記憶」が中心にあり、繰り返し入力される刺激が脳の中で定着することで、自分なりの表現を加えて外に出せるようになります。この基本機能を考えると、ニュース番組のように毎日違った情報を出そうとするのではなく、部分的にでもいいので、同じものを繰り返し提供することが重要です。子どもが自らすべて覚えられるような適度な量で、繰り返しを増やすことが大切だと思います。

大人の視点では、たくさんの情報を与えたほうがいいとか、同じものは飽きるのでは、と意見があると思います。しかし子どもはコマーシャルソングのように繰り返されるものを、自分のものとして完璧に再現できる能力を持っています。最初は意味がわからなくても、繰り返し記憶される中で理解されていくので、心

配は無用です。理解が進むと正しい解釈ができるようになり、自分の中で想像して補って解釈したことが新たな記憶として定着します。それができると、自分でアレンジを加え、こうすると楽しくなるかなとか、おもしろくなるかな、と表現を豊かに変えることができます。常に新しい入力にさらされる状況では、それを咀嚼する間もなく出力しないとイケないので、かえって覚えられないものです。親御さんもまた、膨大な動画を全部覚えなければいけない、ということはありません。できるものから繰り返し見て、お子さんが覚えられるものを親も一緒に覚え、親なりの表現、子どもなりの表現を体験すると、それが記憶になります。そのときに脳の中で、記憶や体験が結びついて深い理解につながります。それがさらに創造力につながるわけで、お子さんはその言葉を使って自由に思考したり、さらに学びに生かしていくことができるようになります。

こめっこは、家族間で体験が共有できる場になることが理想だと思います。きょうだいも参加していたことも、素晴らしいことだと思います。できるだけ親御さんもその場において、帰ってからお互いに振り返りながら、「おもしろい話があったね」、「絵本の読み聞かせはおもしろかったね」などと親子で共有できれば、記憶が理解を助け、それがお子さんの新たな言語表現につながります。これが日々の生活のベースにあれば、手話と音声のいずれかで、豊かな体験を親子間で共有できることにつながると思います。

私のコメントは以上です。ありがとうございました。

「言語獲得の分野から」

金沢大学人間社会研究域学校教育系
教授 武居渡

武居／私からお話をします。先ほど、3家族からとても素敵な報告をいただきました。私の報告は、それをなぞるようなものですが、背中を押せる報告になればと思っています。3つほどお話をします。

まず、3家族それぞれに、「わかる」という言葉がキーワードになっていました。人生の最初の時期、0～5歳のときに、聞こえる、聞こえないにかかわらず、「ちゃんとわかる」経験を積み上げることが、この後の、言語、学力の基盤になります。わかる経験をないがしろにして、その後、言葉の指導をしても、積み上がりません。聞こえる子どもでも、ベビーサインを0歳の時に使って、親子のコミュニケーションを円滑にすることも始まっています。ただし、ベビーサインと手話との大きな違いは、ベビーサインは単語レベルです。手話は言語なので、論理関係まで話ができます。先ほどの「大きなかぶ」もそうですね。おじいさんがかぶを

引っ張って、おばあさんがおじいさんを引っ張る、論理関係までわかる経験を説明できる、積み上げるために手話の力がとても大きいと思います。

毎年話していますが、人生の最初の時期に、手話を通して、わかる経験を積み上げることで、聞こえる、聞こえないに関係なく、わからない状況に出会ったときに、自分がわかっていなかったということがわかります。わかる経験をしないまま幼児期を過ごす、わからない状況になっても、自分がわかっていないことが、わからない。または、わかっているかどうかがわからない。そうなる、ぼやっとわかるところだけ、つまみぐいして、ただ時が流れてしまいます。そんなもったいない、時間の使い方をしないために、人生の最初の時期に、わかる経験を積み上げてほしいし、それをこめっこは保障していると思います。今日の報告者の3家族は、家庭でお子さんのわかる経験をちゃんと保証しているなど強く思いました。

2つめは、手話と日本語との関係。ここでの日本語は音声というより読み書きをイメージしてください。手話と日本語は基本的に別言語です。だから、資料にもありますが、手話を獲得しても自動的に日本語ができるようには、なりません。それは、私たちが日本語ができるからといって、自動的に英語ができるようになるのではないことと同じ。ただし、第一言語、手話を獲得したら、その手話の力を使って、日本語の習得を実現するさまざまな手立てがあります。メタ言語的知識やトップダウンアプローチとありますが、詳しくは話しませんが、方法は様々にあります。私たちが高い日本語の力を持っていれば、英語圏の英語がどういう文法構造を持っているのか、日本語を通して理解し、それを英語学習に繋げられるのと同じです。

私は、聞こえない子、聞こえにくい子には、社会にでるときに、手話と日本語、ここで言う日本語は音声ではなく、読み書きです。手話と日本語という2つの言語を手を持って羽ばたいてほしいと思います。それは「日本語ができるから、手話はいらぬ」のではなく、日本語が第一言語の子でも、社会に出る前には、手話をしっかりと身に着け、社会に出てほしいと思いますし、逆に、手話が第一言語の人も、手話でなんでもお話しできるからいいというわけではなく、日本語の読んだり書いたりする力もしっかり身に着けて社会に出てほしい。その意味で2つの言語を身に着けてほしいと思います。こめっこの中で手話が第一言語の子たちには、その手話の力が、今後学んでいく日本語の学習にも活用できることを伝えたい。

3つめは、前川先生の発表の中でニカラグアの話が出てきましたが、両親が今から手話を学ぶときは、第二言語、第三言語として学ぶことになります。それは、なかなか大変なことです。私たちが英語やドイツ語を今から勉強すると、かなりの時間と労力が必要になります。ところが、第一言語として獲得する子どもは、

大人が手話を獲得する苦勞に比べると、はるかに楽に自然に言語を身につけられます。それはなぜかという、第一言語を獲得するメカニズムと第二言語を習得するメカニズムがおそらく違うからです。

こめっこに来ている子は、こめっこを通じて、ろうのネイティブの手話に出会い、YouTubeの動画もありますが、それらを通じて、ネイティブの手話に出会うことで、自分の手話獲得の材料にしていきます。そのときには、第一言語として学ぶので、大人では考えられない力を発揮します。

別の言い方をすれば、子どもたちは、言語的なものを、言語に変えていく力を持っている。そこを、私たち大人はもっと信じてよいと思います。なぜかという、聞こえない子の多くは、聞こえる両親から生まれることが多い。聞こえる両親からしたら、「私のつたない手話でよいのか」と思うかもしれません。子どもたちは、それを日本手話、言語に変える力を持っています。同じ時間、親子で手話を勉強しても、子どもはあっという間に親を超えていきます。それは第一言語のなせる技です。だからこそ、子どもたちの力を信じて、日本語対応手話で、こんな手話で子どもに話しかけてよいのかと考えず、さきほどの「わかる」経験を保障して、親子で話をしてください。こめっこの子どもたちは、ネイティブの手話に出会っていますから、様々な手話の話しかけを言語、日本手話にかえる力があります。そういう意味で、子どもたちの力を信じて欲しいと思います。

私の報告は以上です。とても素敵な発表だったと思います。ありがとうございました。

【ディスカッション】

司会／パネリストの先生方、ビデオをオンにしてください。ここからディスカッションに入ります。進行は河崎先生にお願いします。

河崎／先生方、みなさん、ありがとうございました。そして時間通りに進んでいること、感謝申し上げます。視聴者から質問をたくさんいただきました。個別でお答えできるものはメールでお答えし、共有していきたいものを取り上げていきます。

まず、小橋さん家族に、ファミリー手話ができているということですが、具体的にどういうものがありますか、との質問です。お話しください。

小橋父／お気に入りのおもちゃをファミリー手話でやっています。トミカが好きで、工事車両をよくやっています。どういうのが多いか。この動きで(体の前で右腕の上にグーをした左腕をのせ、肘を支点に左手を上げ下げする)、ダンプカーで、こちら(両手で表した車の手話を体の前で上と下にだす)がキャリアカー。両手で前に押し出すのがブルドーザー、手を大きくすくいあげる形はショベルカー、指を1本だけ真下に下ろすとクレーン車。ほかにはおもちゃではないですが、「バス」という手話は、子どもの中ではこれを YouTube を見ているので、YouTube を見たいという手話になります。家族でしか伝わらないファミリー手話をしています。

河崎／画面の向こうから、ろうの先生方も「なるほど」と言われていますので、ろう者から見ても、「ああ、そうね」とわかるものだと思います。

次に、お父さん、お母さんの手話学習について、コメントをいただきました。子どもたちの手話言語獲得の支援のプログラムはわかったが、保護者の手話言語習得に向けたプログラムが課題ですね、とあります。こめっこ活動の中では、特に、週2回、0～3歳の幼稚部に入るまでの子どもたちを対象とする「べびこめ」では、子どもたちは自由遊び、ママ、パパは手話学習という時間を設けています。その内容は、ろうスタッフが主になって進めてくれています。物井さん、どういう感じでやっているかお話しください。

物井／プリントなどを用意し、写真を提示し、お子さんにどのように呼びかけるのか。赤ちゃんと会話をするとき、声ではなく、手話でどう呼びかけるか。季節によって季節に応じたプリントを作成しています。手話が初めてで、まだ手話で話すことに不安がある保護者の不安な気持ちを取り除けるように、ろう者と

聴者のスタッフがペアになって進めています。またその時間を使って学んだことをあとで復習ができるように、QRコードで後から動画を見られる準備もしています。続けて何回も通ってきているご家族の場合は、保護者の手話の力も初心者のころよりは上手になっているので、レベルによってグループ分けをし、学習を進めています。

河崎／最初から日本手話のネイティブサイナーの表現を見ながら、手話に触れていくということは、内容が簡単であっても大切なやり方だと考えています。その日、帰宅したらすぐに子どもとこんなふうに会話ややりとりができるから使ってみよう、という気持ちになれることを大事にしているので、そこが、手話通訳養成講座とは違ってきます。

中級、上級と呼んでよいのか、だんだん年数が重なると、1枚の絵カードを見てどんな風に表現するか、あるいは、絵本を両親なりに手話でよめるようになるにはどうするかを、ろうスタッフが話し合い、参加者のレベルや関心、子どもの年齢に合わせて工夫してくれているなど、拝見しています。

ここで、ご家族から、ご自身のこめっこの手話学習経験について、こういうプログラムがあったらいいのにとか、今後、期待していることなども話してもらえますか？ 奥田さんからいきましょうか。

奥田／私個人の手話学習では、最初は聞こえないことがわかって「どうしよう」から始まり、「覚えなきゃ」という気持ちがありました。だんだん子どもとコミュニケーションをする中で、そんなに気負いすぎないようにになりました。

先生の話にもありましたが、子どものほうが私より手話をわかっている、「お父さん、それ違うよ」「指文字違っているよ」と指摘されます。こめっこでネイティブの世界に触れられているのが1番良いと思いました。

河崎／どちらかと言えば、ご両親にとっては、自分が日本手話で表現することは難しくても、ネイティブの手話を読めるようになるのがすごいと思います。そうすると、子どもさんが大きくなったときに、子どもの表現は読み取れるようになると思います。一方、ネイティブサイナーのように表現できなくても、そこは子どもの方が合わせてくれます。

中川さんのところはいかがですか？

中川父／手話学習の面では、私自身の中では、まず0歳5ヶ月から、どのようにして子どもに手話を見せられるかと一生懸命がんばって覚えようとしていました。自分がかんがって教えるというより、子どもが最初に反応した色や数字だっ

たりで、「この子は数字が好きなんだ、色が好きなんだ」と、自分が吸収したほうが早くて、今では、子どもから教えられることが多く、学校でこういう手話を学んだとか、「こんな子と遊んだ」など、指文字で子どもの名前を教えてくれたり。

あとは、もっと楽しんで見られる漫才などがあればと、こめっこさんには思っています。ありがとうございます。

中川母／私自身、最近日本手話の文法をきちんと学びたいという思いが強くなっています。例えば、指差しやうなずき、目や眉の動かし方などの部分を、改めて学んでいきたい。そういった内容をこめっこの手話学習の時間に入れていただけたらと希望を最近持っています。ご検討をよろしくお願いします。

河崎／ありがとうございます。タイプはそれぞれあると思います。スポーツもそうですが、見るだけで自然に真似る人もいます。「このように」と説明やアドバイスをもらうと、できる人もいます。手話習得も同じかもしれません。また工夫していきたいと思います。

れおくんは、手話言語が大事で、それを持って生きていくと思いますが、小橋さんはいかがでしょう。

小橋父／最初は、みなさんが手話でお話ししていることに驚いて、ここに入っていけるかなと思いました。単純に言うと、海外に来たような感じでした。でも、初日からこのグループに入ってみてという感じで手話学習を体験しました。1語ずつ区切ってくれたので、初心者でもわかりやすく構える必要がないと思いました。

手話を学ぶために、テレビを見ましたが、テレビの手話通訳はすごく早くて、1つを区切ってみても、スローでも追いつかないほどのスピードに見えていました。それがこめっこの手話学習では、わからないところはもう一度やってもらえるし、こちらのペースに合わせて、手話をやってくれるので、わかりやすかったです。

ただ、ろうの方が手話で話しているのを横で見ていると早いと感じるので、もう少し、それを読みとけて、自分で会話ができるようになりたいと思います。これからこめっこさんに望むことは、このままずっと続けて欲しいということです。妻に代わります。

小橋母／最初の手話を学んだ印象は、顔の動き、眉や目が、すごく大事な意味を持つと知って、今まで手話で話したことがなかったので、手は真似られても、顔や体全体の動きが出なくて、そこを、もっと上手に流暢になりたいと、今は思っ

ています。

こめっこに来る前にも、療育で、これは「おいしい」とか、「バナナはこうやるよ」と教えてもらっていましたが、こめっこでは、そういう表情なら伝わるとわかって、より学びやすく入っていきやすいと感じます。

河崎／ありがとうございます。その点について、木村先生、前川先生何かご発言はありますか。

木村／まず、保護者が手話を学ぶことは大変難しいところがあると思います。たしかに、ニュースの手話は速いです。ネイティブのろう者からみると、速いと思いませんが、学習者からは、速く感じると思います。

先ほどの話にもありましたが、子どもさんのほうが、どんどん獲得していき、保護者のみなさんが「どうしよう」と思うことがあると思います。拙いものでもよいので、親からもたくさん手話を出してあげること。まずは、手話を読み取り、理解して、お子さんが何を言っているのかをわかるようになる、それが一番だと思います。理解できるようになれば、あとで表出ができるようになります。表出は少しくらい間違っているても大丈夫です。お父さん、お母さんの手話が間違っているても、自分が言ったことをしっかり理解してもらっていることを子どもがわかることが、とても大事です。

手話は手の形や動きだけではなく、上半身のさまざまな部位を使います。上半身をしっかりと見て、手だけにとらわれないことです。手を中心ではなく、顔を中心に、上半身全部を見るようにするのが良いと思います。

お子さんが大きくなって、いろいろ家庭内で恋バナをしたり、喧嘩をしたりできるように、10～20年したらそうなると思います。とても楽しみにしています。

河崎／前川先生、お願いします。

前川／一言で言うと、手話の習得にはプロセスがあります。赤ちゃんが周りのことを見て、少しずつ手話を獲得するように、保護者のかたも、まずは見て、理解することです。いきなりニュースの手話のように難しい、速い手話ではなく、身近なもの、ゆっくりしたものから始めるのが良いと思います。

話にあったように、こめっこで使われているものをきちんと見ていくことです。そのとき、単語をぶつ切りに見るのではなく、言っている文章のまとまりで意味を捉えるように見られるとよいと思います。お子さんと楽しみながら学習を進めてください。

河崎／こめっこでは今年度、スキットを手話学習に取り入れています。土曜日こめっこでは、その時期、子どもとの間で話題になるようなこと、ニュースを見ていて、「あれなに？」と尋ねるのではないかなという内容をテーマに、短いやり取りスキットをろうスタッフに作ってもらい、それを実演して、「さあ、どれくらいわかったかな？」とやってから、次に細かく区切って解説し、最終的に全部読めるようになっていきます。なかなか評判がよくて、毎回2つやってほしいとの要望も出ています。5年間こめっこをやってきて、保護者の手話力の厚みが高まっている結果だと思います。物井さん、久保沢さん、どうでしょうか？（両者うなづき）はい、また力を入れていきたいと思います。

先ほど、酒井先生が、毎日配信について、毎回全部違ったものではなくて、記憶できるものの繰り返しが良いと、言ってくださいました。そこがこめっこからの説明で抜けていて、先生に助けていただいた部分です。

実は、毎日配信の内容が違うといっても、3ヶ月分を作っており、それを繰り返しています。しかも1日15分のプログラムのなかで、おきまりのものが半分から、半分少しを占めています。そこに日によって異なる遊びや季節の手話ばんばんを入れ込んでいます。

酒井先生が言ってくださったように、親御さん、子どもさんがそれを繰り返して、勝手に復習してしまい、身についている内容になっているなど改めて思うことができましたので、皆さんにも報告したいと思いました。この辺り、何か言い足すことは、こめっこスタッフやご家族から、ありますか？ どのように見ていらっしゃるでしょうか？ 動画配信を見るときはこうだよ、というのがあれば。ぜひどうぞ。奥田さん、いかがですか？

奥田／コロナ禍になって動画配信が始まったときは毎日観ていました。正直、一緒に見ていたかという、自信はないのですが、「こんなのあったよ」とか、動画で共有したように子どもが実演してくれたりして、自分がそこから学んだりしました。「こういう手話があるんだ」「そうやってるんだ」というのは、自分でも勉強になりました。

河崎／ありがとうございます。

子育ての流れの中で、以前のことを忘れてしまわれる面があると思いますが、スタッフは、そのときどきに聞いたビビッドな感覚をよく覚えています。朝起きると一番に「こめっこは？」と尋ねるので、「それだけ好きだったら、配信ずっと見とけ！（笑）みたいになった」という報告が届いて喜んだり、パパの仕事帰りを待ち構えて、動画配信のこめっこごっこが始まり、「延々続いて休ませてく

れない」という嬉しい報告もありました。

このようにして、見てくれた子どもたちの手話言語獲得が進んでいました。他にもたくさん、こめっこの子どもたちがそんな風に育っていると思います。

物井／そうですね。

河崎／久保沢さんも隣りで、「そうだそうだ」と言っています。

次の質問に移ります。「子どもたちの言語獲得の様子を伺っていると、手話の後に音声が続いてくるといったお話が多いように思います。異なった言語体系が一体のものとして獲得されているところに面白さを感じます。これはどのような仕組み・メカニズムによるものなのでしょうか。」これについては、酒井先生がお話をしてくださったと思いますので、もう少しお話をお願いしたいのですが、こめっことしての指導方針についても問われています。

こめっことしては、手話単語があればいいというのではなく、ネイティブサイナーの完全な手話言語が提供される、そういう活動がある中で、文法とともに「こういう意味か」「こういう内容か」を、しっかりと全部わかって育つことが大切だと考えています。そうして育った子どもたちは、やがて音を頼りに、または文字として日本語を習得するときに、伝えようとする意味内容がわかっているので、「きっとこうなんだろう」と推測しながら、聴き取り、読み取っていく。つまり、日本語の習得に役立つ。人工内耳の効果が高い子は、獲得と呼ぶに近いくらい音声も取り込んでバイリンガルになっていく、その様子を見ながら、活動を進めているとお答えできると思います。

こうした点について、酒井先生、武居先生、よろしくお願いします。

酒井／言語獲得のメカニズムは、手話と音声でまったく同じです。お子さんにとっては手話の理解が深く、速く先行しているように見えるかもしれませんが、音声の表現が手話に勝ることも、その逆もあるでしょうが、それは気にすることではありません。そもそもお子さんには、言語が複数あるということも知らずに獲得するのです。音声だけで生じる方言もまったく同じです。例えば、日本の地域によって、方言やイントネーションが変わりますが、それでも子どもが使い分けるときは特に意識せず、両方とも使えるようになります。そのように基本的な言葉の仕組み、つまり普遍文法は共通しています。

できる限り、文全体の表現を覚え、身につけ、それを何度も繰り返して、お子さんと親と一緒に取り組みたいものです。単語だけを一所懸命覚えても、文としては繋がりません。それが文法の本質でもあります。学校のように学べない文法もたくさんあります。木村さんや市田さんたちが、手話の文法の研究で明らかに

されていますが、ネイティブも普段意識していないような深い文法が多くあるのです。まずは自然な表現をそのまま覚えて、相手に正しく伝わったときに、これが自然な表現だということになります。

こめっこの動画も、繰り返し部分が半分もあるのは素晴らしいことです。それが上達の鍵だろうと私は分析します。何度見ても飽きないものを一日中つけっぱなしにしたり、環境ビデオのように流しておくのも、効果があると思います。集中して見る勉強だけがすべてだと思わないで、環境の中に溶け込むように入れてしまうのが、自然な方法だと思います。そのくらい人間の言葉は精妙で、うまくできているものですから、それを大人が整理して説明すること自体、とても難しいわけです。子どもは文の表現を丸ごと覚えてしまうものですから、大人もそうなるのが理想ですね。

河崎／武居先生、いかがですか。

武居／私が考えたことは、先程の河崎先生の話と重なりますが、言語でものを伝えるときには、伝えたい意味や内容と、それをどういう手段で、どういう形で伝えるかの2つがあります。

子どもたちは手話を通して、何を伝えるかという意味の部分は、しっかりと醸成されています。新たに人工内耳等で音声が入ってきたときに、すでに手話を通して知った内容を語られているところで、結びつきやすくなります。ただし、手話は、音声を獲得するための手段ではなく、それぞれが大切な言語である視点も重要です。

河崎／ありがとうございます。そうですね。手話で育ってきて、その後、人工内耳の効果などで、「日本語をずいぶん話せるやん」となって、だったらもう手話やこめっこはいいかなというのは残念だと。せっかくだから、2つの言語を持ち、特に青年期以降に花咲いてくるからと伝えたい、それがこめっこです。

次の質問です。

こめっこで手話言語を身に着けて育ち、その後教育につなげるには、お父さんやお母さんは、どうされていますか？

奥田さんが幼稚部の年中さん、中川さんは年少さん、小橋さんはこの春から幼稚部に入学される。手話に出会って育った子どもが、ろう学校へ進む選択について、どのように考えたか少しお話しください。

奥田／私の娘は、最初から難聴とわからず、途中からわかったという、最初の焦

りもありました。まずは、しっかり言語として獲得してほしいということがありました。それで情報保障がある聴覚支援学校を選択しました。自分たち自身が、聞こえる側にいるので、地域の小学校、幼稚園も考えましたが、発見が遅かったこともあり、難しいと思い、しっかり獲得してもらうため、聴覚支援学校を選びました。

支援学校には色々なお子さんがいて、人工内耳の子、補聴器の子、軽度で補聴器をしていない子も、デフファミリーの子もいます。その子に応じたコミュニケーションをとっているのが、たのもしく感じています。

こめっこではネイティブの手話に触れてもらって、質問にありましたが、日本語対应手話については、それは、それで「こんな手話があったよ」などと、子ども自身も発見があって、それを教えてくれて、混乱している様子はなく、自分はこめっこで学んだ手話を使ったり、ファミリー手話のように自分たちで通じる手話をやって、臨機応変に選んで、かしこくやっているという印象です。

河崎／中川さん、お願いします。

中川母／私たち家族は日本手話で教育を受けられる環境を強く希望するようになったのは、子どもが2歳くらいの頃です。それに伴い、都道府県にたくさんある聴覚支援学校にも違いがあるとわかり、ご縁もあり、いくつか見学に行きました。子どもも一緒に見学し、体験もして、最終的に子どもにどうだったか聞いたときに、現在通っている奈良が良いと言ってくれました。私たち夫婦間でも「奈良がいいかな」と思っていたので、それで選びました。

中川父／ふだん、自分に必要がないと思う情報は入れないので、妻が何か話しているとき、「はあ、はあ」という感じで、スイッチが入ったのは、日本手話と日本語対应手話の話聞いたときでした。「えっ？手話にそんな違いがあるの」というところから興味を持ちはじめ、こんなに違うのか、日本語で話していることを、そのまま伝えても伝わらないんだ、というところから、スイッチが入りました。

それが、子どもが2歳のタイミングで、日本手話の環境でないと、わからないんだということで、そこからいろんな学校を見に行かないといけないと思いました。その中からこの子が行きたいところを決めるだろうと考え、見に行き、それで最終的に決まったのが今の学校です。

河崎／中川さん以外のご家族も、これだけ日本手話でわかる体験をした子を、ろう学校の中ではほとんどが日本語対应手話、日本語に対応したサインがついて

いるのが中心の教育になっているので、そこをどう考えていこうかというディスカッションが毎週のように、保護者交流の中で出てきています。そうした声をこめっこは教育現場にも届けないといけないし、大阪府ともしっかり話をしていかないといけないと思い、機会を設けて一緒に話せるように、今はネットワーク会議や出張こめっこをしたりして関係を作っているところです。

こうした状況の中で、日本手話の存在が一層大事な、れおくんのお父さん、お母さんはどう考えておられますか？

小橋父／私が聴覚支援学校を選んだのは、息子は補聴器がないと、スケールアウトで、補聴器をつけていても反応がありませんでした。そのため、手話で育てるしかないと思ったこと。地域の学校も考えていなくて、聴覚支援学校しかない決めていました。聴覚支援学校を選ぶにあたって、学校によって指導方法が違うことがわかりました。引っ越しの関係もあり、大阪の3校しか見ていませんが、その中で、息子に一番合ったところを選び、幼稚部に行こうと思いました。人工内耳の子、軽度・中度など1人ひとりに対して、対応を変えているのですが、うちの子どもは手話でしか理解ができません。希望ではないですが、手話で統一してくれたほうが子どもにとって、ありがたいと私たちは考えています。妻に代わります。

小橋母／聴覚支援学校でも差があります。必ず親がついてきて欲しいという学校もあれば、完全に普通の幼稚園のように子どもだけで通学する幼稚部もあり、差があります。校区が決まっていて、引っ越しをしないとその学校に通えないというのは、仕組みとして選択肢が狭まっているのでは、ということもあります。

手話はどこの聴覚支援学校でも共通言語で、どの先生も使えるようになればいいなという希望はあります。

河崎／そうですね、それはこめっこスタッフみんなの希望でもあります。ここまでわかる、これだけ通じる、豊かなものを伝えてくれる子どもたちを見ていて、汲み取られる場で教育を受けて欲しいと思います。今後は保護者の方々とも一緒に連携を強めていけるように、がんばりたいと思います。そこに向けたコメントがいくつか届いています、ありがとうございました。

次に、阪本先生が耳鼻咽喉科医として来られていますので、もう一度、あえて質問させてください。人工内耳が1歳、1歳前にとどンドン年齢が下がって手術されるようになっていきます。こめっこに来る子も1歳の誕生日に手術を受けるという子どももいます。一方で、奥田さんが娘さんについて話して下さったように、まず手話に出会って、2歳を過ぎてから人工内耳をして、その効果が出た

ときに並行して2つの言語を獲得してこられた。

それを見ると、言語としての手話、Sign Languageに出会うという条件をつけた場合、人工内耳手術は必ずしも1歳ではなく、もっと遅くてもいいのではないかと、という実感をこめっこではもっています。それをお医者さんの立場として、どう思われますか。またどう言われていますか？

阪本／それを言われるととても苦しいところです。

耳鼻科医としては未だに難聴を何とか聞こえるようにしたいというコンセンサスが強いです。そうすると、音声言語の獲得という条件だけを考えると、より早い時期に人工内耳をつけて、音を入れるほうがいいというのが、当たり前なんです。

実際見ていると、我々が人工内耳をもう少し年長の人に伝えるときに二次的、後天的に難聴になった人、言語がしっかり耳からある程度、補聴器などで入っている人については、ある程度、年齢がいったとしても人工内耳はできます。ただ、一定の可塑性のある時期を超えて、耳からの情報がなければ駄目だという理解があります。

耳からの情報を入れることについては、どの時期が良いかということ、耳から入れるだけなら早い時期が良いという結論が出てきます。日本の現状として1歳を過ぎ、2歳くらいでやっていることが多いです。今、いくら早くなっても、1歳以降です。そうなったとき、1歳までは何の言語も入らない状態なのか、または、早期にきちんとした日本手話が入っている子どもと、そうじゃない子どもを比べると、早期の生まれてすぐから視覚的言語が入って、日本手話という言語獲得をしたお子さんのほうが、先ほどから話題に出ているように後からの言語獲得が容易になるだろうと思っています。

人工内耳の手術が生後1～2ヶ月からできない以上、最初からきちんとした形で第一言語としての日本手話を入れたほうが良いと思います。人工内耳で聴力がある程度回復しても、機械が壊れると、ろうです。そういうかたも、その状態でもコミュニケーション手段を持っているほうがいいです。

僕がよく思うのは、今の日本の環境では、できるだけ早期に日本手話の視覚言語を入れたほうが良いと考えています。ただ、そういう考えは、まだ耳鼻科医の中では一般的にはなっていないと思います。

河崎／ありがとうございます。

大阪でのこめっこ活動において、大阪に阪本先生がいらっしゃることは、すごく心強いと改めて思いました。この件について、他の先生方でコメントいただけますでしょうか。

酒井先生、お願いします。

酒井／阪本先生に賛成です。

耳鼻科の先生がたも、言語獲得を専門とする人は少ないでしょうから、言語学や言語習得について啓蒙をしていく必要があります。身近にある言語現象なので当たり前と思うと、盲点が生じがちです。

音を生まれてから早く入れないと身につかないというのは誤りです。臨界期というのはごく限られた条件でしかテストされていないですし、「臨界期と言われるようなものはない」と明言する研究者もいます（註釈：<https://www.lexhippo.gr.jp/lp/report201005/>）。ですから、学童期をどう過ごすか、環境にどの程度言語刺激が豊富なのが問題なのであって、ただ音だけが早く入ればよいというわけではありません。

「第二言語は苦勞しなければ覚えられない、根性で勉強するしかないんだ」という精神論も、間違いです。進化では手話の方が音声より前に誕生したという説にも根拠がありません。そうした誤解を一つずつ正して行って、多数の意見に流されずに、そして目の前の言語現象を吟味することなしには問題を解決できないのです。専門家と称する人が根拠なしにはっきり言うことには、怪しいと思わなくてはなりません。親御さんも含め、我々科学者としても、定説に対し懐疑的になるということも非常に大事なことです。

阪本／そのとおりです。僕も勉強不足なところがありますが、耳鼻科医は、言語に関する発達について知りません。手術などについては詳しいですが。それらに関して、いろんな先生がいろいろと言われますが、必ずしも正しいわけではない、むしろ少ないと考えてください。我々がこういうところで話を聞くと、実感するので、これからもっと勉強していきたいと思います。

河崎／ありがとうございました。

もう1つ、乳幼児手話言語獲得支援事業、就学年齢まで支えたこめっこに通った子どもは、その後どうなるのかという質問です。

「もあこめ」という小学生対象の活動を研究事業の一貫として実施しています。小学生の子どもたちが土曜日にこめっこに来ています。年数を重ねるうちに、ご家族の交流が広がり、輪ができていますので、そのような交流も続くと思っています。

では、時間がきましたので、話題提供をしてくださったご家族と、指定討論の先生方に感想を含めて、ひと言ずついただきたいと思います。

まず、ご家族から、お願いします。

小橋父／このような機会をいただき、ありがとうございます。

私たちは、ただ話すだけと思っていましたが、まさか議題にとりあげて、このように話していただけると思っていませんでした。大変勉強にもなって楽しかったです。また、このような機会があれば、がんばります。

小橋母／こめっこで手話に出会って、「わかること」の大切さが改めてわかりました。そこから、いろんなことを経験させ、この子の好きを伸ばしてあげたいと思い、いろんなことわかることを親子で経験し、楽しく毎日を過ごせるようになりました。こめっこに支えてもらって、「このままで大丈夫だよ」と言ってもらえることが私たちの家族の支えになっています。

今日は、勉強させていただいて、本当にありがとうございます。

中川父／今日は、このような貴重な場に呼んでいただいて、感謝しています。

先生方の話を聞いていて、改めて感じたことが、いくつかあります。その中で1つ、最後の言葉とさせていただきます。

私はいま、手話と日本語で会話しています。手話に出会って、学び始めて3年ほどですが、いまの気持ちは、私の今までの人生で、これだけ人と向き合って過ごしたことはないと思えるくらい、人と向き合って会話しています。それは、言葉がわかるからです。妻との会話はまだまだ、音声だけで話しかけられると、「はい、はい」と聞き流しますが、手話だと、何を伝えようとしているのか、何を感じてその表現をしているのか、それを感じながら向き合っている自分がいると思います。

改めて、手話はなくてはならないと感じています。これからも、よろしく願います。

中川母／今日は、貴重な時間をありがとうございます。

子どもも夫も、声でも話してくれますが、彼らがわかる言葉は、目で見てわかる手話であると常に念頭において、会話の絶えない家族でありたいと思います。

言語としての手話に出会って、3年半ですが、学べる場所や教育機関など、地域差が大きいと感じています。こめっこやひだまり・MOEのような場所が全国に広がってほしいと心から願っています。

今後とも、よろしく願います。今日はありがとうございます。

奥田／今日は、貴重な機会をありがとうございます。

今日の話聞いても、三者三様で、境遇や聞こえの程度が違います。関係なく、皆で楽しく遊んで成長させてくれる、こめっこだと思います。自分が参加していて、知っている子が赤ちゃんから成長する姿を見ると、感慨深いです。

ネイティブの手話に触れることもそうですが、大人も子どももまず受け止めてくれ、向き合い、寄り添ってくれることから始まるのが、こめっこの力の源なのかなと解釈しています。そんな力に私たちも助けられたので、この場を借りて感謝をお伝えします。

本日はありがとうございました。

河崎／パパ、ママは、準スタッフとして次の世代の子どもたちを支援してくれると思います。

では、木村先生、前川先生、お願いします。

木村／まず1点め、オーディズムの問題について。

保護者のみなさんが、オーディズムから解放されること。そのための支援が必要です。

2点めとして、親御さんが手話を習得できるプログラムを作ること。文科省になるとは思いますが、きちんとしたプログラムを作る必要があります。

3点めに、こめっこを見学しましたが、ろうのスタッフも、聴のスタッフもいます。そして、そのスタッフの専門性をより高めて欲しいと思います。こめっこが長き将来にわたって継続できるだけの高い専門性を持ったスタッフを育成し増やすことも必要だと思います。

4点め、日本手話という言語を母語として身につけることで、ろうの子どもたちが自信を持って生きることにつながります。ですので、ぜひ皆さんよろしくお願いします。

前川／手話、書記日本語、ろうの文化、聴者の文化について、バイリンガーは車の車輪のように、この4つが必要です。

ろうの子ども、ろうのスタッフ、聴のスタッフ、ろうの親、聴の親、すべてが重要だと思います。それがかなうように皆さん一緒に頑張っていきましょう。

河崎／ありがとうございました。感謝しかありません。今年度のシンポジウムも、また心に響く貴重な時間になりました。

本当に話題提供がすごかった。ここに皆さんがフロアで参加して下さったら、すごく大きな拍手が起きると思います。今日のディスカッションのキーワードはそれぞれの方々が心に留めていただけたらいいと思います。みんなで心に

刻んで、今後に進めていきたいと思えます。誠にありがとうございました。

では、司会を久保沢さんに戻します。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。司会の立場ですが、家族、先生の話聞き、これまでの私たちの活動、これからの励みになりました。もっと頑張っていきたいと思っています。今後もさらに、がんばっていきます。よろしくお願ひします。

では、時間が過ぎましたので、最後にアンケートのお願いです。このQRコードを読み取っていただくと、今回のシンポジウムに関するアンケートフォームが開きます。全部で12問あり、ほとんどが選択式です。5分ほどで終わる内容ですので、何卒ご回答ください。自由記述の回答についても、是非ご協力を願ひいたします。

シンポジウム終了後、みなさまにメールでお送りしますが、今、こちらのQRコードを読み取っていただくことも可能です。しばらく表示しますので、読み取ってください。

よろしいでしょうか。本日は以上になります。長い時間ありがとうございました。途中、不手際もあり申し訳ございませんでした。本日はありがとうございました。

資 料

【資料-1 こめっこ研究の進捗報告】

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

2022年度手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

こめっこ研究プロジェクトの 全体像と流れ

研究統括責任者

●河崎佳子（神戸大学大学院人間発達環境学研究所）

1

課題

きこえない子どもたちの母語は、手話言語である。

手話言語の獲得は、理解力や思考力を含むさまざまな認知発達を支え、人格形成にも影響を及ぼす。

しかし、手話言語を自然習得できる環境は確保されていない。

また、その影響や効果についての実証的研究はほとんどない。

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

2

2022年10月現在

研究分野

脳科学

代表
酒井 邦嘉

東京大学大学院
総合文化研究科
教授

心理発達
(人格形成)

代表
河崎 佳子

神戸大学大学院
人間発達環境学研究所
教授

言語獲得
<手話言語力>
(日本語)
<日本語力>

代表
武居 渡

金沢大学
人間社会研究域
学校教育学系
教授

学習能力

<理解力>

代表
武居 渡
河崎 佳子

<思考力>

代表
酒井 邦嘉

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

3

目的

手話言語獲得習得支援事業「こめっこ」「もあこめ」を舞台に、**脳科学、心理発達、言語獲得、学習能力**の4分野から「手話言語を獲得・習得する子どもの力」にアプローチする研究プロジェクトが、2020年に企画された（日本財団助成事業）。

聴覚に障がいのある子どもたちの**真の言語力（理解し思考する力）**を適正に評価することを目指す。

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

4

手話言語を獲得・習得する子どもの力
研究プロジェクト

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

5

「学習能力」分野について

<思考力チーム> と <理解力チーム>

本研究プロジェクトにおける「学習能力」：

論理的思考、推察、分析、読解、表現、コミュニケーションなど、学習するための**基盤となる力**

<思考力チーム>

将来的には、知識や体験のみに左右されず、物事がどのように繋がっているのか、自然科学の広がりや規則の発見など、思考のひらめきを探る「学習能力テスト」につなげていく予定

現在は、学習能力の前提となる認知、思考するためのスキーマ、判断能力等を、母語が手話言語であるか否かによらず、測ることのできるテストを作成している

<理解力チーム>

手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、日本語によるモノログを用いた検査を作成し、その施行を始めている

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム（河崎）

6

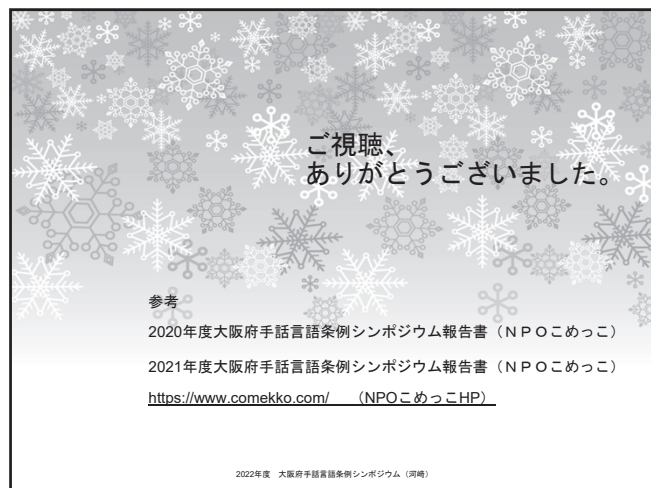
2022年10月現在

研究チーム

<p style="text-align: center;">脳科学</p> <p>酒井 邦嘉 阪本浩一 和田夏実 他</p>	<p style="text-align: center;">心理発達 (人格形成)</p> <p>河崎 佳子 中尾恵弥子 物井明子 久保沢寛 他</p>	<p style="text-align: center;">言語獲得</p> <p style="text-align: center;"><手話言語力> (日本語話)</p> <p style="text-align: center;"><日本語力></p> <p>武居 渡 河崎 佳子 久保沢寛 物井明子 他</p>	<p style="text-align: center;">学習能力</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;"><理解力></p> <p>武居 渡 河崎 佳子 久保沢寛 岩田真有美 和田夏実 他</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;"><思考力></p> <p>酒井 邦嘉 阪本浩一 井田哲夫 和田夏実 他</p> </div> </div>
--	--	--	--

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム (河崎)

7



ご視聴、
ありがとうございました。

参考

2020年度大阪府手話言語条例シンポジウム報告書 (NPOこめっこ)

2021年度大阪府手話言語条例シンポジウム報告書 (NPOこめっこ)

<https://www.comekko.com/> (NPOこめっこHP)

2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム (河崎)

8

心理発達（人格形成）分野

研究責任者 河崎佳子

●報告者 NPOこめっこ副代表理事 中尾恵弥子

1

こどもたちの発達を 複数のラインから捉える研究

- ・こめっこ活動時の子どもたちの様子の観察
- ・保護者からのききとり
- ・検査の実施とそのデータ検証および記録の蓄積



一人一人の成長過程を追う縦断的な研究

2

日本手話を母語として成長する子どもたちの 発達を正しく評価するための提案

- ・日本手話を母語とする乳幼児・児童に対する
津守・稲毛式乳幼児精神発達診断の実施に関する提案
～手話言語を獲得しつつある聴覚障害児の心理発達を評価するために～
第59回特殊教育学会（2021）
- ・日本手話を母語とする乳幼児・児童に対する
新版K式発達検査の実施に関する提案
～手話言語を獲得して育つ聴覚障害児の発達を評価するために～
第60回特殊教育学会（2022）

3

実施状況

「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」

3歳までの未就園児 半年に1回
3歳以上の子どもたち 1年に1回 実施

	2020年度	2021年度
実件数	41件	42件
のべ件数	64件	52件

4

実施状況

「新版K式発達検査」

概ね2歳以上の子どもたち 1年に1回実施

	2021年度
件数	18件

「S-M社会生活力検査」

小学生以上の子どもたち 1年に1回実施

	2020年度	2021年度
件数	10件	11件

「心の理論」課題

日本手話劇版が完成し、5歳以上の子どもたちに実施
今後は理解力の枠組みで進めていく予定

5

現時点での所感

6

2022年度手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

言語獲得 学習能力（理解力）分野

言語獲得研究責任者 武居 渡
学習能力（理解力）研究責任者 武居 渡・河崎佳子

● 報告者 NPOこめっこ常務理事 久保沢寛

1

言語獲得分野

- 子どもたちの手話言語力と日本語力を縦断的に評価し、その成長を追跡。

語用（コミュニケーション） 質問応答関係検査	
日本語文法 J. COSS	手話文法 日本手話文法 理解テスト
日本語語彙 絵画語彙検査	手話語彙 手話語彙流暢性 検査

2020年度手話言語条例シンポジウム言語獲得分野（武居）

2

日本手話文法理解テスト

- 手話の文法力を測るテスト

語用（コミュニケーション） 質問応答関係検査	
日本語文法 J. COSS	手話文法 日本手話文法 理解テスト
日本語語彙 絵画語彙検査	手話語彙 手話語彙流暢性 検査

- 対象：4歳～
4.7点中4.2点以上で次年度からは実施しない。
- 検査実施数：
2020年度 15名 2021年度 18名

3

手話版語彙流暢性検査

- 手話の語彙表出を測るテスト

語用（コミュニケーション） 質問応答関係検査	
日本語文法 J. COSS	手話文法 日本手話文法 理解テスト
日本語語彙 絵画語彙検査	手話語彙 手話語彙流暢性 検査

- 対象：
2022年度は、6歳から実施
対象年齢の見極めもデータを集めながら進める
- 検査実施数：2022年度より実施。

4

J.COSS日本語理解テスト

- 日本語の文法力を測るテスト

語用（コミュニケーション） 質問応答関係検査	
日本語文法 J. COSS	手話文法 日本手話文法 理解テスト
日本語語彙 絵画語彙検査	手話語彙 手話語彙流暢性 検査

- 対象：7歳～
小学1年生から実施。
- 検査実施数：2022年度より実施。

5

PVT-R 絵画語い発達検査

- 日本語の語彙力を測るテスト

語用（コミュニケーション） 質問応答関係検査	
日本語文法 J. COSS	手話文法 日本手話文法 理解テスト
日本語語彙 絵画語彙検査	手話語彙 手話語彙流暢性 検査

- 対象：7歳～
小学1年生から実施。
- 検査実施数：2022年度より実施。

6

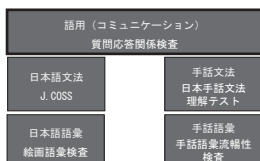
質問応答関係検査

・コミュニケーション力を測る
テスト

・対象: 4歳～

・検査実施数:
2020年度 10名 2021年度 15名

○検査時に、ろう者と聴者が一緒に入り、子どもの実態に
合わせて手話と日本語を用いて、実施している。



7

言語獲得分野のまとめ

検査名	日本手話文法 理解テスト	手話版語彙 流暢性検査	J. COSS日本語 理解テスト	絵画語彙発達 検査	質問応答関係 検査
測定する 力の種類	手話の文法力	手話語彙の 表出力	日本語の文法力	日本語の語彙力	コミュニケー ション力
対象	4歳～	2022年度は 6歳から実施	7歳～	7歳～	4歳～
検査実施数 2020年度	15名	2022年度より 実施	2022年度より 実施	2022年度より 実施	10名
2021年度	18名				15名
備考	47点中、 42点で次年度 は行わない	対象年齢の 見極めも行って いく			

8

学習能力（理解力）分野

- ・手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの
理解力を明らかにするために、手話劇や手話
モノローグを題材にしたテストバッテリーを作成。
- ・質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、
知識、理解の発達的变化を評価する。
- ・次年度から、「手話劇版心の理論課題」と共に
実施し、データを集めていく。

9

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

2022年度手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

言語脳科学 学習能力（思考力）分野

研究責任者 酒井邦嘉

● 報告者 NPOこめっこ研究員 和田夏実

1

2022年度手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

言語脳科学 学習能力（思考力）分野

研究責任者 酒井邦嘉

● 報告者 NPOこめっこ研究員 和田夏実

2

2022年度手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

言語脳科学 学習能力（思考力）分野

言語脳科学研究責任者 酒井邦嘉
学習能力（思考力）研究責任者 酒井邦嘉

● 報告者 NPOこめっこ研究員 和田夏実

3

言語脳科学・思考力

研究目的

言語力 思考力

言語理解に基づく概念、自然法則を把握する力
時間や空間の変化などを推論する力...etc..

手話で育つ子どもたちの評価法や
教育環境の改善に繋げていく

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

4

言語脳科学・思考力

研究手法・要件

言語力 思考力

要素間の法則性

数量感覚

関係性の発見

言語を通して複雑な概念を獲得し
思考の深まりへ繋がっていくか

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

5

言語脳科学・思考力

研究手法・要件

言語力 思考力

学習能力（思考）

思考力テストを作成

言語脳科学

言語力・思考力問題時の脳活動をMRI装置にて検出
対象：大人と子供（小学校高学年以上）
言語野を中心とした脳機能の定量的な解析を行う

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

6

言語脳科学・思考力

現在の進捗状況

学習能力（思考）

思考力テストの具体案をチーム全体での共有とパイロットテストを重ね問題の検討を行う

言語脳科学

理解と思考のMRI装置内での手話や刺激の提示について準備を進めている

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

7

言語脳科学・思考力

今後の活動計画

学習能力（思考）

思考力テストを実施。子どもたちの成長をみながら経年評価を行う

言語脳科学

まずは手話話者の大人を対象として脳のどの領域に有意な活動が検出できるかを解析を予定している

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

8

言語脳科学・思考力

今後の活動計画

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援機構にて子どもたちの成長をみながら経年評価を行う

言語脳科学

まずは手話話者の大人を対象として脳のどの領域に有意な活動が検出できるかを解析を予定している

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

9

研究目的：

本研究では、手話を獲得・習得して育つ子どもの学習能力を明らかにするにあたって、「言語力」と「思考力」の両方を検討する。手話を第一言語として概念獲得する環境にある子どもを対象に、言語理解に基づく概念や自然法則を把握する力や、時間や空間の変化などを推論する力を調査する。これにより、手話で育つ子どもたちの評価法や教育環境の改善に繋げていくことを目的とする。

10

研究手法・要件：

就学前や小学生の子供を対象として、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題を作成する。言語を通してさらに複雑な概念を獲得し、そこから思考の深まりにつながっていくかについて、各個人の手話や日本語の獲得進度を指標として比較検討する。また、この問題を解いている最中の脳活動をMRI装置で検出するため、大人と子供（小学校高学年以上）を対象として、言語野を中心とした脳機能の定量的な解析を行う。

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

11

現在の進捗状況：

思考力テストの具体案をチーム全体での共有とパイロットテストを重ね問題の検討を行う。これと同時並行させて、MRI装置内での手話や刺激の提示について準備を進めている。

今後の計画内容：

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援機構にて子どもたちの成長をみながら経年評価を行う。思考力テストが完成次第、まず大人を対象として（ろう者を含む）、脳のどの領域に有意な活動が検出できるかを解析していきたい。

参考文献：酒井邦嘉『脳とAI』（中公選書、2022年）

12

【資料－1 指定討論（木村）】

1

日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

NPO法人手話言語獲得支援研究機構(NPOこめっこ)
2022年度 大阪府手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得する子どもの力
研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

当事者の視点から

2023-01-28(土)

国立障害者リハビリテーションセンター学院
手話通訳学科教官
木村晴美

1

2



オーディズムへの気づき

2

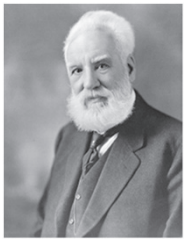

2023-01-13 KIMURA Harumi 3



The Bilingual Center founded by MJ Bienvenu and Betty Colonomos

3

4



グラハム・ベル
「ろうあ人種の形成に関する論文」(1883)


グラハム・ベルの肖像画
著作権: iStockphoto.com / パトリック・ドメイン
https://commons.wikimedia.org/wiki/Alexander_Graham_Bell

'How did Alexander Graham Bell almost succeed in wiping out Deaf Culture?'

雑誌: "DEAF LIFE" より
©MSM Productions, Ltd.

4

5



MJ Bienvenu

「あなた方は、私たちのようなろう者を世の中から抹殺したいと思っているのですか？」

写真は下記より引用
<https://twitter.com/LASchoolDeaf/status/1368057092443795461/photo/1>

5

6



子どもの手話の力を育む
こめっこ

6



ろう児のいる家族への支援

【資料－1 指定討論（前川）】

2022年度大阪府手話言語条例シンポジウム
「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
～保護者の体験と思いに学ぶ～

「手話言語教育」の 視点から

2023年1月28日（土）
関西学院大学 手話言語研究センター 研究特別任期制
助教
関西デフ・フリースクール「しゅわっち」代表
前川和美

1


時代の変遷

- 子どもがろう児とわかった時の反応
- ろう教育
 - 「聴覚口話法」や「母親法」が主流、全てが口話訓練
 - 小学部低学年まで、親が一日中付き添う
 - 教科書は1～2年遅れていた（学校による）

2

時代の変遷

- 1995年「ろう文化宣言」（木村・市田）
 - ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である。
- SNSの普及
- 手話ドラマの影響
- 「言語」としての手話



3

ろう児にとっての手話

- 「目で見てわかる言葉、手話」 ろう児は「目の子」！
- 母語の獲得は人間の基本的人権である
- デボラ・チェンピクラー：聞こえのレベルに関係なく、ろう児にとっての第一言語（手話）の獲得が、第二言語（書き言葉）の習得または学力の向上に繋がる

結論：補聴器や人工内耳の有無に関係ない
書き言葉や学力の向上に、手話は決して妨げにならない

4

親の手話スキルと子どもの語彙力との 相関関係

- ろう児の家庭によって、手話に触れる機会は様々
- ろう児の家庭の殆どの言語は音声言語で、聴覚で完全に理解することができない
- ろう児に与えられたインプットが不完全であっても、ろう児はその手本を超える手話を身に着けることができる（ex：ニカラグア手話）
- （ろう児の）親が聴者でも、手話に触れるのが早期であれば、年齢相応の語彙力を獲得できる

（参考：Berger, TISLR2022発表資料）

5

手話の習得

- 聴児の発語 発達例
 - くちゅり → くしゅり → くすり
- ろう児の発語 発達例
 - /母/ /車/ /終わり/
- 手話の同化・音韻変化
 - 日本語：本棚（ほんたな→ほんだな）「洗濯機」
 - 日本手話：/母/ /ろう学校/

6

その他

- 人工内耳装用者へのサポート
- 「難聴児は日本手話指導場面でどのように手話を学んでいるのか？」社会・文化的分析（鳥越・前川 2017）
- ディナーテーブル症候群
「愛情は感じるが繋がっていない」
(ろうなび-ろう者が選んだろう・難聴に関する学術情報が)



7

まとめ

- 聞こえる親からうまれたろう児は、2つの世界を持つ特別な子ども。
目で見える人に合わせて発達した言語である日本手話があつてこそ、聴者の文化とろう者の文化の両方を感じ取って成長していける。
- 成人ろう者のロールモデル

「こめっこ」は素晴らしい環境が揃っている

8



ありがとうございました

前川和美

maegawa-center@kwansei.ac.jp

9

【資料ー1 研究プロジェクトメンバーのコメント（阪本）】

こめっこシンポジウム2023.1.28

耳鼻咽喉科の立場から

大阪公立大耳鼻科
阪本浩一

7

小児難聴に対する耳鼻科医の取り組み

新生児聴覚スクリーニングの普及により難聴を持つ小児が早期に発見されるようになってきた。

補聴器 人工内耳の装着年齢が早くなってきている。
(小児人工内耳前後の療育ガイドライン2021年版)

難聴の原因が60%程度遺伝性難聴であることが明らかになり、遺伝子により様々な情報が得られつつある。


療育法の選択に耳鼻咽喉科医の手話言語に対する理解が必要

8

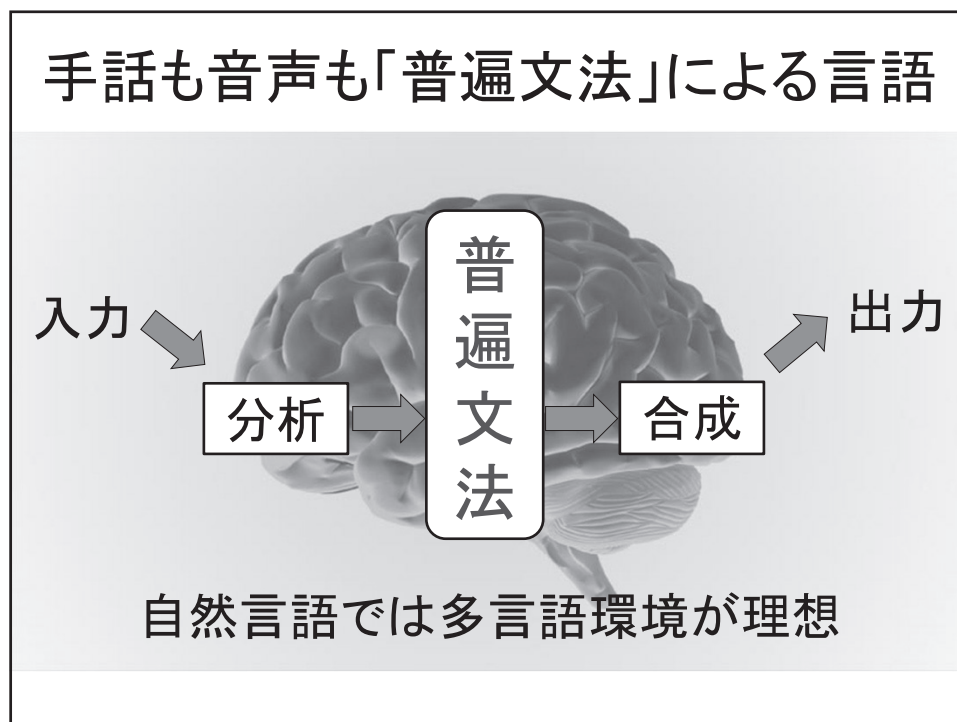
第9回 小児診療多職種研究会

2023年2月11日-12日
大阪公立大学 杉本キャンパス

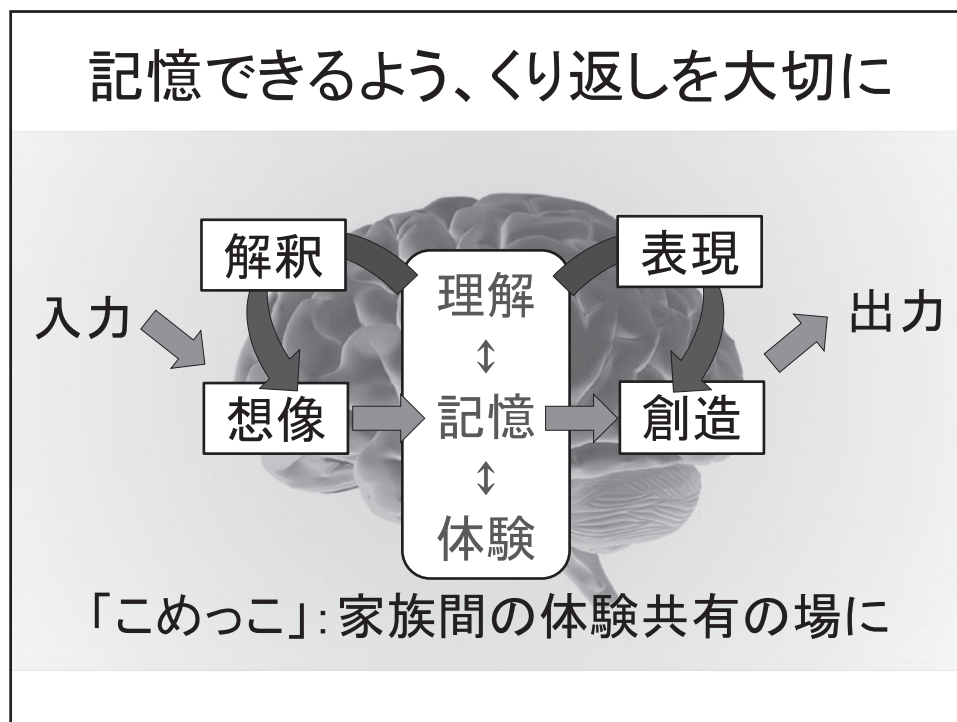
2月11日（土曜）
大阪大、太田先生・諏訪先生の講演続いて
河崎先生のこめっこの講演があります。



9



1



2

【資料－1 研究プロジェクトメンバーのコメント（武居）】

保護者の方々の報告を
お聞きして

武居 渡
(金沢大学 学校教育系)

1

① 手話によってわかる
経験を保障する

○手話を通してわかる経験が積みあがる。
最初は単語レベル。徐々に文の理解へ。

cf. ベビーサイン

→ 十分にわかる経験をすることで、わからない状況になったとき、自分がわかっていないということがわかる。

→ 「わかっていないことがわからない」「わかっているかわかっていないかわからない」と、ただ時が過ぎて行ってしまう。

2

② 手話と日本語の関係

○ 手話と日本語は別の言語

→ 手話を獲得したからと言って、自動的に日本語も獲得できるようになるわけではない。

→ 第一言語として獲得した手話の力を活用して日本語を習得する様々な手立てがある。

※メタ言語的知識の活用／トップダウンのアプローチ

社会の出るときには
手話と日本語の2つの言語を手を持ち
羽ばたいてほしい！

3

③ 子どもの力を信じる

○ 子どもは手話を第一言語として獲得する
親は第二言語、第三言語として習得する

→ こめっこによって聞こえる両親では与えられないネイティブの手話に触れられる強み。

→ 子どもの第一言語の獲得には大人では考えられない力を発揮する。

○ 「言語的なもの」を「言語」にする力

※ だからこそ聞こえる両親が手話を使って我が子と話をすることは、子どもの言語獲得の大きな力となっていく。

4

【資料－２ 参加状況】

大阪府手話言語条例シンポジウム 参加者

参加申込者数	795人（他関係者・スタッフ64人）
第Ⅱ部 参加数	534人（途中入退出者含む）

■参加者所属内訳

行政機関（福祉部局）	22人	手話通訳関連団体 （全通研・手話サークルなど）	282人
行政機関（教育部局）	6人	大学や研究所	37人
行政機関（その他）	17人	当事者（保護者含む）	66人
学校関係	152人	マスコミ機関	3人
医療関係	28人	一般企業	6人
福祉関係	49人	その他	20人
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	37人	特になし	26人
当事者団体 （ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	44人		

【資料－3 アンケート報告】

○回答状況

申込者数	795 人
回答数	382 人

(回収率 約48%)

○アンケート結果

1. お住いの都道府県					
北海道	11	石川県	2	岡山県	0
青森県	4	福井県	4	広島県	14
岩手県	3	山梨県	2	山口県	7
宮城県	1	長野県	1	徳島県	1
秋田県	1	岐阜県	8	香川県	1
山形県	2	静岡県	19	愛媛県	3
福島県	3	愛知県	7	高知県	0
茨城県	1	三重県	7	福岡県	10
栃木県	3	滋賀県	8	佐賀県	1
群馬県	2	京都府	8	長崎県	2
埼玉県	11	大阪府	114	熊本県	9
千葉県	6	兵庫県	23	大分県	1
東京都	35	奈良県	15	宮崎県	4
神奈川県	16	和歌山県	3	鹿児島県	3
新潟県	1	鳥取県	2	沖縄県	1
富山県	2	島根県	1	海外	1

2. NPO こめっこの活動の内容や様子について	
よくわかった	313
ある程度わかった	69
あまりわからなかった	0

3. こめっこ活動参加の保護者の思いや体験をきくことができよかった	
非常にそう思う	343
そう思う	37
あまりそう思わない	0
その他	2

4. 子どもの手話言語を獲得する機会の確保を図る必要性が	
よくわかった	341
ある程度わかった	25
あまりわからなかった	0
既に理解していた	16

5. 保護者の手話習得支援が、子どもの成長にとって大切であることが	
よくわかった	340
ある程度わかった	23
あまりわからなかった	0
既に理解していた	19

6. 家族支援が子どもの成長にとって大切であることが	
よくわかった	347
ある程度わかった	19
あまりわからなかった	0
既に理解していた	16

7. 事前配信による、各研究分野についての研究内容や進捗状況が	
よくわかった	190
ある程度わかった	149
あまりわからなかった	13
事前配信をみていない	30

8. 所属、職種等について、教えてください（複数回答可）	
行政関係	32
教育関係（聴覚支援学校、難聴学級）	70
教育関係（上記以外）	33
医療関係	17
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	21
福祉関係（上記以外）	36
当事者団体（ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	18
手話通訳関連団体（全通研・手話サークル等）	163
大学や研究所	15
保護者やご家族	36
その他	37

9. シンポジウム開催をどこでお知りになりましたか	
チラシ	96
メール（NPO こめっこから）	155
メール（NPO こめっこ以外）	9
ホームページ（NPO こめっこ）	29
ホームページ（NPO こめっこ以外）	2
新聞・広報など	5
SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど)	26
その他	60

10. 9の質問に、「メール（NPO こめっこ以外）」「ホームページ（NPO こめっこ以外）」「新聞・広報など」「SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど)」「その他」と回答された方は、よろしければ具体的に教えてください（他の回答をされた方は次にお進みください）

<p>【メール（NPO こめっこ以外）】</p> <p>主な回答：大阪府、大阪府教育委員会、手話通訳士協会 など</p> <p>【ホームページ（NPO こめっこ以外）】</p> <p>主な回答：難聴児支援教材研究会、言語聴覚士会</p> <p>【新聞・広報など】</p> <p>主な回答：日本手話通訳士協会「翼」、会報「ろう教育の明日」 など</p> <p>【SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど)】</p> <p>主な回答：フェイスブック、ツイッター、インスタグラム</p> <p>【その他】</p> <p>主な回答：知人からの紹介、手話サークルでの紹介”</p>
--

11. 大阪府手話言語条例シンポジウムに参加されるのは何回目ですか (2018年から継続して行っています)	
初めて	152
2回目	139
3回目	65
4回目	9
5回目	17

12. 今回のシンポジウムをご視聴くださった感想など、自由にお書きください。

自由記述部分については、今回もたくさんのご意見・ご感想をお寄せいただきました。紙面の都合上、遠隔実施に関する感想、企画運営や情報保障に関するご意見、開催に対する感謝のお言葉等については割愛させていただいております。貴重なご意見やアドバイスを、今後の開催に反映してまいります。心づよい励ましをいただき、誠にありがとうございました。

○新しく知った情報がたくさんあり、とても参考になりました。こめっこが更に発展していくといいですね。

○保護者、同僚にも伝えていきたいと思いました。このような素晴らしい会の案内を各校へご案内いただき、ありがとうございます。

○ご家族の言葉がとても力強かった いつか見学させていただきたいです ありがとうございます。

○3家族がとても素敵でした！

○こめっこのような場所が全国に広がる事を望みます。

○様々な専門家の方や、実際こめっこに参加している保護者の方々の実体験や想いを聞くことができ良かったです。

○酒井先生の脳の動きのご説明は全くの素人にもとても分かりやすかったです。

○こめっこがどのようなものなのか、よくわかりました。私はまだまだ勉強中の身ですが、保護者の方の思いを聞くことができ、よかったです。

○デフファミリーではありますが、改めて手話の必要性を再確認出来ました。

○大変勉強になりました。研究成果も早く読ませていただきたいと思います。

○手話を言語として獲得することの重要性を改めて認識しました。今後の科研や推進事業などの着想の材料や、政策の宿題を頂戴した気持ちです。

○当事者のお話も大変参考になりました。こめっこの活動についてもよく理解でき、各先生方の専門的視点からのお話も合わさり、より理解が深まりました。

○こめっこは素晴らしい活動だと思います。ぜひ、全国に広げて行っていただきたいです。

○三家族の事例、様々な専門家の視点でのお話が聞けてよかった。こめっこのような太い柱を感じさせるような、ろう難聴児支援団体を地元でも立ち上げたいと考えている。

○聾学校に勤務している者として考えさせられることがいろいろありました。このあとも自分の中で整理して考えてみたいと思います。

○こめっこのような場所が全国にあると良いと思いました。地域にいと支援施設に通うだけでも大変なので。

○保護者からの意見、考えを聞けて、たいへん良かったです。

○こめっこのような活動が、全国に広まってほしいと思います。

○とても勉強になりました。こめっこの発展、さらに全国へ広がることを応援したい思いでいっぱいです。

○手話通訳の方の表出がとても魅力的でした。人工内耳の適応年齢等の脳科学の分野の話聞く機会は、初めてでしたので、とても貴重な機会となりました。

○ろうの先生方の文字情報と音声通訳が一部噛み合っていないように感じて、自分の手話の読み取りの力不足と解釈の難しさを感じました。ろう学校に21年勤務した者として、もっと精進しなくては…と感じました。

○今後教員として、どのように関わっていけば良いのか参考にもなりました。

○ご家族からのお話を聞く機会は少ないので、とても良い企画だと思いました。理論ではなく、実感を共有できることが、今後のろう教育への大きな推進力になると感じました。ありがとうございました。

○知っているようできっちり認識していなかったことが、講師の先生から現状の話を書くことで、知識の上書きができました。

○こめっこさんの取り組みやきこえに関する医療的、言語的な様々な課題、3家庭の様子などをお聞きし、大変勉強になりました。子どもの成長も、そのために私たち大人ができることも山ほどあるのだなど可能性を感じました。またこのような取り組みや研究の実践等が地域によって異なること、差があることを実感し、もっと日本全国できこえに関する、手話に関する理解が広がり、「わかる」が増えていけば良いなど改めて思いました。

○地方にも聞こえない子供や家族が手話に触れられる環境が整って欲しいと感じた。

○初めて参加させていただきましたが、具体的かつ深い内容で大変意義のある時間になりました。

○ご家族の体験から学ぶことについて、参考になりました。

○子育て真最中のご家族の話を書くことができ大変興味深かったです。また専門家や当事者のお話は学びになりました。

○手話通訳の立場で、ろうの大人の方としか出会いがありませんでした。産まれてからの手話言語の獲得や親御さんのお気持ち等がよく分かりました。

○子どもさんの置かれた環境や家庭の様子とともに、子どもさんの成長の様子、親御さんの心の変化等を知ることが出来て、とてもありがたかったです。今後もし、機会がありましたら、ろうスタッフの想いや、デフファミリーの方のお話し等も聞かせてもらいたいなど感じました。

○聞こえない自分というアイデンティティーを持たずに社会に出てから、心折れる難聴者に何人も出会いました。幼児期から家族と通じる体験が絶対大切と感じ、そのためには家族支援が必要と強く思っています。こめっこのような活動が日本全体に広がって欲しいと、心から希望しています。

○今回、とても多くのことを学ばせていただきました。私は今、難聴のある乳幼児とご家族の支援をしています。こめっこのDVDやYouTube配信などを見

れるようにしていただけると嬉しいです。
私自身、もっと学びたいと思っています。

○来年の研究発表を今から楽しみにしています。若いスタッフさんのご活躍がとても頼もしく明るい未来であると感じました。日本における聞こえない子どもたちに対する支援が今後ますます発展することをお祈り申し上げます。また自分自身も何らかのアプローチで応援できたらいいなと思います。2023年、とても良いスタートが切れたようなシンポジウムでした。

○実際にこめっこに通われている方の生の声を聞くことができ、とても貴重な時間でした。世の中の手話に関する捉え方は昔と比べれば良い方向へ変わっていき、興味を持てる機会も増えています。しかし子育てに直結するとなると不安や情報の偏りもあるような気がしました。早期から手話でわかる機会が全国に広がり、保護者も支援できる体制ができれば良いなと改めて感じました。

○3家族の方々の報告も勉強になりました。聞こえない、聞こえにくい子ども達の手話言語の獲得の大切さが改めて理解できました。

○ろうの子供の親の経験話や専門家の話を聞いて、すごく良い内容で改めて手話はろう者にとって大事な言語だなと改めて思いました。

○当事者であるご家族はもちろん、あらゆる専門家の方のお話を伺って、大変、良い機会になりました。手話の勉強を進めるモチベーションにもなりました。

○時間が長くて少し疲れましたが、じっくりと十分な話を聞くことが出来て良かったです。特に3家族の方の話は凄く伝わりました。

○酒井先生、木村先生の話は専門家の話として参考になりました。また、詳しくお話を聞きたいと思いました。耳鼻科の専門医の阪本先生がこうしたシンポジウムに参加され、誠実な対応をされていることに感心しました。

○こめっこの活動、とても素晴らしく感激しています。この活動及び聞こえないまた聞こえにくい子供にはやはり手話が必要なんだということを、いかに多くの人に知ってもらい理解してもらうかが、課題だと思っています。子供の成長は待った無しです。また、札幌での訴訟などもありますし、早急に日本手話が大事であり必要だということが広まることを期待して止みません。

○日本手話と手話文化についての良い勉強になりました。

○こめっこの活動を初めて知りました。指定討論でのお二人のろう者のお話もわかりやすくあらためて勉強になりました。各分野の専門家の方々からのご説明も理解しやすかったです。聞こえる保護者のためのプログラムを国で開発していくことが大変重要だと思います。どの地域にいても同じ教育を受けられる環境を実現してほしいと思います。

○手話を使うことは当然ですが、うちの学校では日本語対応手話を使っている現状があります。手話力も個人で様々です。ネイティブサイナーの存在が日常的にないことも1つの要因と感じました。今回のことを職場で共有してより当事者に寄り添って行きたいと思いました。

○こめっこが目指すものがよくわかり、それが、ろう児とその保護者にとっていかに大切であるかがしっかり伝わってきた。

○今回、各分野の専門家に加え当事者の専門家、さらにご家族からのお話があり、それぞれのお話がリンクしてよりわかりやすく伝わりました。

○3家族のお話が心に響きました。また、武居先生や酒井先生のお話には大変共感できました。特に酒井先生が早期に音声を獲得するために早くに人工内耳手術を勧めようとする医療の考え方にエビデンスがないことをはっきりと一言でくださったことは大きな力をいただいた気分でした。阪本先生の、医師の立場でこめっこに理解を示し、手話言語獲得の意義について理解された発言に、また一人数少ないながら理解してくれる医師が増えたと大変嬉しく思いました。東京も田中先生に続く方々を増やしたいです。木村さん前川さん、当事者の話もとても良かったです。

○3組のご両親の考え方が素敵でした。一緒に成長する、素晴らしいお考えだと思います。子どもの選択を尊重して引越しまでできる、本当に聞こえない子を持つ親御さんが3組の方のようだったらどんなに素敵か改めて思いました。聞こえない友人のほとんどは親と疎遠か、親は手話を覚えてくれず、口で話すだけです。全く違います。子どもの幸せはどの親のもとに産まれてくるかで変わらないことを望みます。きっこめっこの子どもさんたちはこめっこに通うどの親から産まれていても同じようにこめっこにたどり着く。でもそうじゃない子もいるから、もっと若い人たち、これから親になる人たちに知って欲しいです。

○ご家族の方の経験談を聞いたのが良かった。こめっこの具体的な活動内容や、子どもたちの成長の様子もわかり良かった。

○今まで関わってきた手話者が、自分と同じクリスチャンの人がほとんどだったので、それ以外の手話者の人や子ども、手話に対する専門家の方達の話が聴くことができ、自分の中では、かなり勉強になったし、他の教員にも共有したいと思いました。

○乳児期から手話に触れること3家族とも違いはあるが、子どもの必要としていいる言語は手話であることを理解していることにこめっこの存在の重要性を感じました。

○3家族のお話がとても素晴らしかったです。手話やろう者に出会えない、医者に聴覚活用の一面だけを脅しのように説明される、必要性を説かれても継続的に学びそれを子育ての中で生かせる支援を受けられる場がない、そういうご家族はたくさんいると思います。特別支援学校で早期支援に携わっていても、十分に機会を提供できない、自分たちの力が足りないことを日々痛感します。それぞれ違いはあれど、こめっこにたどり着けたということ、自分たちの選択は間違っていないんだ大丈夫なんだと感じられたことが、とても大きいなと感じています。されてきたことはもちろんですが、誰かの好意や努力に寄るのではなく、事業として必要なスタッフを雇い、研究、実践していける組織をきちんと整えて積み重ねられてきたことが、本当に素晴らしいし、必要なのだと思います。今後、このような活動が全国に広がっていくよう願っています。

○聴覚に障害を持った子どもたちが、早期に手話に触れて、習得出来る機会が増えてきていること。また、その保護者も手話習得に前向きな取り組みを積極的に取り入れている現状がある事が、これからの聴覚に障害を持つ子どもたちの社会参加に大きく変化をもたらす事だと思い、このこめっこ事業が、全国が増えて行くことを切に願います。

○日本手話と手話文化について良い勉強になりました。

○全体的に、事前配信も含め、非常にわかりやすい内容でした。また、手話を学ぶ立場として、考えさせられる内容でした。

○こめっこの取り組み、各分野の方々の意見を聞き素晴らしいと思いました。自

分の今後の活動に活かしていければと思っています。

○十分に分かる経験をする事の大切さを改めて感じました。親の拙い手話でも言語にする力が子供にはある、子どもの力を信じると言った武居先生の言葉が刺さりました。手話習得に励みたいと思います。

○ろう児の成長過程における言語習得メカニズムを科学的に解明されていこうという活動に感銘しました。より手話の理解、広がり大切さを感じました。

○専門家の先生の話は勿論ですが、保護者の方々のお話が聞けてよかったです。

○こめっこの活動には、ただただ、脱帽です。さて。学齢期以降の課題について、ちょっとモヤッとしたことを。ただこれはNPO法人こめっこ側の課題ではなく、大阪府の課題ですが。こめっこの活動は、大阪府手話言語条例の施策の一環として行われているものと認識しております。大阪府では、乳幼児期からの切れ目のない支援の実現を目指した条例として作られたわけですが、ならば、学齢期は、学校教育法に支えられた特別支援学校があるわけですから、MORE こめっこがある、という話だけではなく、教育庁として、福祉部障がい福祉室と連携して、特別支援学校での手話環境の整備等を進めていただきたいと思います。【大阪府】手話言語条例なので、まずは学校の問題を責任を持って行政が立て直して、その上で、その後押しを民間が行うのが健全な形ではないかと思います。

○当事者のご家族のお話を聞いて、わかるということがお子さまだけでなく親御さんにとってもとても大事なことなんだなと実感できました。言語獲得についての知識が広まり、わかる経験をどのお子さんもどの親御さんも適切な時期に経験できるような日本になってほしいです。また、こめっこが全国各地にできるといいなと思いました。

○保護者の皆さんのお考え、お気持ちを聞かせてもらえたことはとても良かったです。子どもさんの動画も素晴らしかったです。ありがとうございました。また、木村先生、前川先生のお話も、ろう者としてのアイデンティティーをしっかりとっておられるお二人ですので、とても刺激的でした。保護者と手話で会話できることが子どもさんの成長に欠かせないことがよくわかりました。そして三人の先生方からの、そのうちに子どもさんの方が早く手話を修得して親御さんに教えるようになるというお話も、素晴らしかったです。

○自校の乳幼児相談やうさぎルーム(幼稚部入学前)もがんばっているので、(自分は中学部)応援していきます。

○こめっこの活動に参加している家族の話を知ることができる貴重な機会でした。良いお話を聞くことができました。木村さん、前川さんのお話、パネリストの先生方のお話、わかりやすかったです。日本中にこめっこのような活動場所があると良いのにと感じました。

○保護者が日本手話から学べるのがうらやましいですが、その後、地域の行政の講座などに行けば対应手話か中間手話になってしまいもったいないです。子供が成長したときにちゃんと話が聞ける、話せるように木村先生がおっしゃっていたように保護者への継続的手話習得プログラムが必要だと思います。つたない親の手話を子供が読み取ってくれるレベルでは、子供が話すのを躊躇してしまう、諦めてしまう気がします。

○内容が濃かった。できるだけ多くの関係者に情報が伝われば良いと思う。

○家族の皆様の体験談、専門の先生からの講演、興味深く拝聴致しました。事前配信から視聴して、こめっこの取り組みを理解した上での第二部講演という流れが、さらに言語獲得の重要性が理解できとてもよかったです。パネルディスカッションの中で、5人の先生方のやりとり、言語獲得についての専門的な議論がもう少し見たかったです。

○保護者の方のお話がとてもリアルで良かったです。またその保護者の方のいろいろな思いをこめっこは受け止めてくれる素晴らしい所なのだな、と感じました。

○現在手話通訳者を目指し勉強中です。訪問看護で聾者やコーダと関わることもあります。多様性が遅れている日本で当事者の思いを知ることとはとても大切だと思います。オーディズムに対して本当にそうだなぁと思いました。聞こえないことは不幸ではない、ただ早く適した支援ができるためのスクリーニングと捉えられる世の中にできるように微力ながらもしていけたらと思います。色々な人がいても当たり前、皆が同じ環境で学べる多様性を生かした表現方法の教育の場が実現できればいいなぁと思いました。

○こめっこを実際に利用されている保護者のお話し、専門家による効果の分析・

説明、耳鼻科医から補聴が全てではなく、手話との相乗効果が必要であるとの見解を伺う事ができて、とてもよかった。きこえない子どもたちが、きこえる子どもたちとやっと同じスタートラインにたてる道筋が見えてきたことは、歴史を変えるとても大きな意味があると思います。こめっこの取り組みが一日も早く、日本全国に広まり、ろう教育にも繋がってほしいです。

○中川さんの最後のお言葉「これまで、人と向き合ってこなかった自分が、手話と出会う、人と向き合うようになった。」が、とても印象に残りました。ご家族の思いがとても伝わってきました。

○保護者の方の話、各先生方の話、とても参考になりましたし、勉強になりました。1つ気になったのは、早期の人工内耳の効果についてはもう少し耳鼻科側からの話がしっかりほしいところだと思いました。耳鼻科の先生方にこの話(日本手話が必要だということ)を理解してもらおうと思うと、その部分のお互いの理解は必要だと思います。私は早期の人工内耳に一定の効果がある、というのは様々な研究があるので、理解しているつもりですが、その上で言語学的に音声も手話もどちらもあった方が、ことばの獲得がスムーズである、という捉え方をしていないと、両輪にはなりにくいと感じました。平行線ではなく、協力していく関係になってほしいと願っています。そのために自分ができることも模索したいと思っています。子どもたちの動画を見て、こめっこの存在の大きさを改めて感じました。外野が言えることではないかもしれませんが、こめっこのスタッフも手話言語としての日本手話の学びも延ばしていただきたいと思わずし、ナチュラルアプローチのような、通訳に頼らない手話獲得の手法などにも幅を広げていただけたら、更に可能性が広がると思いました。

○聴こえる、聴こえないに関係なく子どもの言語習得の方法は同じように感じました。繰り返し繰り返し、言葉に触れて、子ども自身がやりたいように表現してどんどん獲得していく。私の子どもは聴者です。今、自宅のPCでみさせていただいたのですが、子ども達も気になって一緒にみていて、初めて手話に触れる良い機会になったとも思います。こめっこの存在は、多くの方々にとって必要不可欠なものであり、引き続き活動していただきたいと強く思いました。

○昨年度から、聴覚支援学校へ、絵本の読み聞かせに行っていることもあり、子どもたちの背景を少しでも知りたいと思い、今回も参加しました。伝わる手話で絵本や読書の楽しさを伝えられるように、手話技術をもっと磨き、学校側のご要

望もお聞きしながら、本と子ども達をつなぐ活動を今後も続けたいと改めて思いました。図書館員の立場から、こめっこの活動をこれからも応援させていただきます。手話は言語であることを改めて強く実感しました。

○毎年毎年実績を積んで大きく成長しているこめっこを本当に素晴らしいと思います。話の中でもありましたが地域によって格差があることを悲しく思います。大阪に生まれ育ち、こめっこに出会えた子どもたち保護者を良かったと心から思いますが今でも全国でこのような出会いがなく悲しみに暮れている子どもたち保護者がいることをとても悲しく思います。そういう意味でもこの配信がこれからの力になっていくのではと期待します。家族からの話題提供も木村さん前川さんのお二人の話もパネリストの方たちのお話も全部よかったです。あらゆる方向からのアプローチ素晴らしいですね。

○こめっこでの手話習得の積み重ねの大切さを改めて感じ、昼寝も大事だけど、移動中に寝てもらってできるだけたくさんベビーこめっこさんに参加したいと思いました。また、繰り返しの動画配信の重要性を真に理解できたので、動画も積極的に繰り返し流したいなと思いました。理解できたので、よりベビーこめっこに行きたいと行動したくなりました。できるだけたくさん参加したいです。

○家族の思いを聞ける機会があってよかったです。私たちは聞こえない、聞こえにくい子どもの未来を当然ながら応援協力、その家族を支援する環境整備や学習の機会をもっとしなければならぬと実感しました。これを反省し、今後の大阪市こころを結ぶ手話言語条例の内容を充実にもっと取り組みしなければなりません。ぜひ家族の声をたくさん聞かせて下さい。

○こめっこに通われている家族のお話や専門家の貴重なお話を伺うことができ、さらに聞こえにくい子どもの育ちを支える母語＝手話が大切であることを感じました。

○実際のお話をお聞きすることができる貴重な機会です。Web配信など運営にはご苦労が多いことと思いますが、継続いただけますとありがたいです。

○今年のシンポジウムも素晴らしい内容でした。第一部配信でも思いましたが、やはり親御さんの言葉は深く説得力がありました。3家族とも貴重なお話を真摯にされ、感動しました。また、パネリストの方々はどうなともご自身の専門に基づいたお言葉でかつ非常にわかりやすいもので、これもスーパーアドバイザー

一の河崎先生の存在が大きいと思いました。それにしてもろう学校で日本手話が保証されていない事実には憤りを感じます。最後に家族のお一人のお父様が、「手話を学んで初めて相手と真に向き合う対話をするようになった」というようなことをいわれていた事に納得。手話をされてる方が自分の思いを相手にダイレクトに伝えようとなさるときの表情や眼差ししぐさの多様さ、豊かさにはいつも圧倒されています。私はコロナ禍で手話教室に行くのをキャンセルしていたのですが、このシンポジウムを見て、また学びたいと思いました。

○今回も非常に勉強になりました。年々、進化されていくこめっこさんに、いつも感銘を受けております。地域でもこめっこさんのような場を作りたい！と思った時期もありましたが、今ではとても真似できない、簡単には手を出せない、非常に専門性の高い場だと感じております。今後も学ばせていただきながら、できるところから地域でも広げていきたいと感じておりますので、今後ともよろしく申し上げます。

○耳鼻科医の先生も入っている点が重要で、さらに医療関係者を巻き込んだ形にしてほしい。

○生の声を聞くことができ大変面白かったです。聴覚活用も認めながら日本手話の重要性を訴えているところが、すごく将来性のあるお話に思えて良いなと感じます。こめっこさんのような施設が全国で増えるといいなと願っています。また、現在私は言語聴覚士になるべく勉強中ですが、こめっこさんにSTの話が出てこない点に不甲斐なさを感じます。STも補聴器や人工内耳の勉強ばかりで、手話が必修科目に入っていませんが、聴覚ばかりに目を向けていないで、もっと手話ができるSTも増えていかないといけないのではと思いました。私自身手話は全くできませんが、勉強していきたいなと強く思います。

○親御さんの思いを伺えたこと、耳鼻科Dr.にとって言語発達は専門領域外なのだを知ったこと大変参考になりました。

○初期のシンポジウムに参加した時と比べて、ろう児のみならず保護者・ご家族支援の分野においても着実に実績が積み上げられていることを実感しました。こめっこには、ろう学校とは異なる形態で運営されていることからくる強み(柔軟さ)が十分にあると感じますので、明晴学園や他の保護者団体とも(緩やかでよいと思うので)もう少し連携や情報共有があってもよいのではないかと感じます。ろう児のご家族にとって情報は少しでも多い方がよいと思うからです。

○自分が学校で関わっている子どもたちと手話でやりとりするための自分自身の手話力向上、子どもたちへの手話力と日本語力の向上支援、保護者への手話力向上支援、毎年の異動で入れ替わる教員への手話力向上支援、などいろいろ考えさせられました。自身の学び、他への支援の工夫など、努力したり勉強したりすることがたくさんあるなぁと改めて感じました。

○こめっこにロールモデルとなる、ろうスタッフが複数いらっしゃるのが何よりも羨ましいです。子ども達をリアルな日本手話の環境に置きたくてもそれがなかなか出来ないのが、地方の現状です。今日のシンポジウムは、話題提供の3つのご家族のお話も含め(皆さんのお話し、いろんな意味でとても心打たれました)木村さん、前川さん、阪本ドクターお三方の人選もバランスが素晴らしかったと思います。このシンポジウム、乳幼児の手話言語獲得に関して学ぶべき、各都道府県の教育課や障害福祉課の担当者に見て欲しかったです。今日の録画を全国の役所に送って欲しいくらいです。個人的には木村さんのお話の内容に、長年のモヤモヤが晴れたところがあって感謝申し上げたいです。

○いろいろなご家庭の話を伺えて、よかったです。特にご自身も難聴のお父さんが自分の育ちを振り返って、お子さんには様々な環境と言語を提供していこうと決めた経過、いまも子育て中の特に人工内耳装用のお子さんをお持ちの方に聞いてほしいと思いました。

○こめっこの活動がご家族にとって大変貴重な場であることが分かりました。そして全国に広がって欲しいと思いました。専門家の方々のお話の中で、耳鼻咽喉科の先生方と言語学の先生方は別であり、お互いに情報共有していく事が、子ども達にとって必要だということ。子ども達に大きな影響を与えていることが分かりました。「わかる」経験が大切であることも理解できました。参加できていろいろな情報も知ることもできました。

○親御さんのお話は本当に心に響くものがありました。

○ご家族のお話をお聞きして、こめっこに出会うまでの葛藤や戸惑い、こめっこでの手話に対する驚きや子どもの成長を実感したことなど、体験談でしか知ることができないお話ばかりでした。お子さまの動画を観て、とても楽しそうに絵本を手話で表したり、「手話ぱんぱん」をしていると様子は、手話は勉強して学ぶのではなく遊びながら楽しく習得することができ、なおかつ言語なのだと思います。

私は言語聴覚士を目指しており、聴覚の分野に進もうと考えています。自分もオーディズムの1人だったのだと気づき、反省しました。手話が言語として確立されたものであり、言語発達の意味においても重要であると先生方のお話をお聞きして感じました。人工内耳にこれから携わる者として、聴覚だけではなく手話のことも視点に入れて関わりたいと思いました。そのため、人工内耳のみだけの知識だけではなく、手話について積極的に学びたいです。

○東京でこめっこのような聴者の親や子供が手話を身につけるための場を作れたらなと思いました。

○幼児教育と聾教育と悩むことが多くあります。手話の獲得は、早ければ早いほどよく、言葉の獲得は自然にできるとわかり、少しわかったような気もしますし、難しさも感じました。

○現在、主に聴覚障害児を対象とした児童発達支援にて勤務しております。ろう学校幼稚部の子どもが事業所にきて、公文等を利用して、より多くの日本語を獲得する為に学習しています。手遊びや絵本の読み聞かせには手話を取り入れています。私の手話はまだまだで、単語を並べているレベルなのです。昨年より、乳児さんも利用するにあたって、どのような環境を作るべきなのか、悩んでおります。こめっこさんスタッフのように、乳幼児対応できるネイティブサイナー、手話のできる聴者がいません。私自身保育士経験はあり、その時に3人の聴覚障害児に出会い、手話を学ぶきっかけとなりました。ただ、その後どのように関わるのが良いのか、ということが全くわかりません。私が日本手話を獲得してから、関わるべきなのか、手話獲得できていない状況で関わっていいのか、悩んでいます。ただ、聞こえる聞こえないは関係なく、その子自身を認めて、そのままでもいいんだよ、という思いが、こめっこさんと同じなのです。今は乳児さんに対しては、見たもの、手に取ったもの「○○だよ」と手話、音声言語で伝えています。

○以前に、物井さんの講演を視聴してから「こめっこ」の活動などに興味があり、今回も参加させていただきました。以前から、こめっこなどの見学が出来たらと思っていた気持ちが、より強くなりました。また、こめっこで保護者向けに配信している動画も見てみたいと思いました。

○活動内容をもっと詳しく知りたいと思った。

○以前手話の勉強をしていた事と保育士をしていることで、とても興味があり

参加させていただきました。もっと早く知っておけば良かったという後悔でいっぱいです。

○きこえるほうが良いと言うオーディズムと言う感覚を手話と関わっている私自身も持っていることに気付かされました。改めて、知ることの大切さを感じたシンポジウムでした。

○ご家族の率直な想い、専門家からの意見が聞けて、課題となっていることがはっきり理解できました。初めに会う耳鼻科医師の言語獲得に対する意識を変えないと難しい。私は医師の考えを変えるのはむづかしいから、保健師にもっと知ってほしいと思うのですが、「こめっこ」では、家族支援を担う保健師へのアプローチはどうされているのでしょうか？

○1. 手話の獲得は、外国語の習得と同様だと思った。継続性と繰り返し。覚えれば親子ともども、世界が確実に広がるかと。2. 手話が、旧来のろう者用手段に比べ、まだ認知が進んでいないのが今後の課題。

特に、小学校入学した後の、抽象言語や算数なども、継続して学ぶ手段が必要。

3. 手話言語指導者層の広がりや教育は、今後の発展のキーだと言われたが、同感。

○こめっこに通っている保護者の声が聞けて良かった。お子さんが自信を持ち生き生きと成長する事を願っています。手話の重要性は十分に理解しています。だからこそ、教育現場が統一されていないことが残念に思います。聴覚支援学校で使っている手話が、日本語対応でもなく…漢字からの創作手話の様な表現が広まっている現状もあると聞き、難しい問題は多々あるのだと思います。

○保護者の方の率直な気持ちを伺うことができ、とても参考になりました。聾児である前に、子どもであるということを常に考え、いつも子どもたちの指導に努めています。子どもに努力を強いる教育ではなく、ありのまま100%わかる言語で活動ができるこめっこの存在がとても魅力的に感じました。保護者の方もお話しされていたように、教育現場でもそれが引き継がれていけばと常に願っています。そのためにも、木村先生が文部科学省に保護者支援のプログラムの構築を検討してほしいとお話しされておりましたが、教育現場のためにも、手話言語を獲得した子どもたちが安心して継続的に学べるよう、聾学校教員の育成のためのプログラムがあればと切に感じました。こめっこの各領域での研究について今後も楽しみにしております。

○保護者の体験や思いを直接聞く事ができてよかった。手話を表出できなくても、見ることで言葉の習得に大いにつながるといった話がとても印象に残っています。

○保護者の生の声、それぞれの専門性を持たれた先生方の話をお聞きできて、短い時間でしたが、中身の濃い内容でした。

○聞こえないことや手話を受け入れられないご家族もいらっしゃるかと思います。3家族のお気持ちが届いたら良いなと思います。ろう者の言語、日本手話が守られますよう、ぜひともお願いしたいです。

○知り合いの言語聴覚士に、手話は否定しないけど今は人工内耳一択と言われてモヤモヤしていたのがスッキリしました。例え人工内耳の手術をするにしても、それまでの間日本手話で接するのがいいと聞き感動しています。その考えが、全国の耳鼻科医、言語聴覚士に広がりますように祈っています。

○それぞれの子どもに合わせたコミュニケーション方法は良い方法に聞こえる。誰かに合わせた場合その方法では分からない子どもが我慢しなくてはならない。ストレスが溜まる…とのお話があった。ちょっと衝撃的だった。(しかし柔軟な子供の脳であればそのうちにどんな方法で身につけてしまうのかもしれないとも思った。)3家族のお話、ご苦労も沢山おありだったと思いますが…とても興味深く微笑ましく拝聴しました。

○本当に大事なことを教えられたシンポジウムでした。オーディズムからの解放、当たり前にいわれていることを疑う。言語の獲得について。軽度難聴のお父様の「手話に出会って、人とこれほど関わったことは今までなかった。」という最後の言葉がとても印象的でした。そしてご自身は手話を学んでこなかったのにお子様には手話を習得できる環境を用意された。先日先生にろう学校では手話を基本言語としてしっかり教育がなされてほしいと話したところ、「今は人工内耳があるから手話だけでは無理なのよ。」とか「手話を使わないでと言われる保護者もいるのよ。」とお答えが返ってきて。ショックでした。

先生方も全体の生徒数が減り、人工内耳により声だけで教えられる子が増える。異動により毎年手話ができない先生が来られるといった環境の中で混乱するのもかもしれません。日本手話の環境。というレベルからほど遠い状態です(手話での授業ももちろんありますが)。どうかろう教育の基盤を確立して、現場の先生も保護者も迷うことなく聞こえにくさを持つ子供達を育てていけるように、

このような活動を広めてください。こめっこのような活動が兵庫県にもあってほしい。それが今日このシンポジウムに参加して心に湧き上がる思いです。

○協力的な医師を呼んでいるのが、この種のシンポジウムでは異例の良さであると感じました。聞こえない子のご家族にとって、初めて出会う聴覚の専門家は耳鼻科医だと思いますので医療の現場からの声が聞けるのは良い機会でした。事前配信でゆっくり見られたのはとてもありがたかったです。ただ事前配信の動画に見づらいところがありました。ホームページが動く背景なので、動画の背景にちらちらと動いている人がいて動画そのものに集中しづらかったです。動画の背景は静止画像か地味めのものだと見やすかったです。また動画は10-15分ぐらいで小分けにしてくださっているとより見やすかったです。事前配信はこめっこの取り組み内容、ご家族の様子についての内容はお話だけでもはっきりと状況が分かったのでよかったですのですが、研究の進捗状況についてはわかりづらかったです。

○ご家族の生のお話を聞いたのがよかった。若いご夫婦が聴覚障害の子どもを授かり、子どもにも親にも手話獲得に抵抗がない時代になってきて、いいことだと思う。

○オーディズムからの解放、聴者の私にとっては難しいことです。次女の難聴は受け入れているつもりだし、手話も家族全員で獲得していきたいと思っています。でも正直、三女が生まれたとき新スクをパスしたと聞くと安堵して泣いてしまいました。ろう親が自分の子が聞こえる子だったとき、聞こえない子だったとき、それぞれどのような感情を持つのか聞いてみたいと思いました。

○「トータルコミュニケーション」について改めて考えました。私たちは手話や音声を「一人ひとりにあった方法」として保育・教育していると言います。確かに手話のわかる子には手話で話すことでやりとりはできます。しかし、コミュニケーションモードが同じではない子どもたちがいる集団の中では、手話ではわからない子もいることがあります。反対に、授業できこえる教師の発問に対し、子どもが音声だけで答える場面を時々見かけます。その子どもと指導者の間は成立していても、他の子どもとは発言が共有できていない恐れがあります。きこえの程度や補聴器/人工内耳等、いろいろな実態があっても、その場での「共通言語」を確立しておくことが必要ではないかと改めて思いました。本校の保育・授業場面では全員が情報を共有できる環境はできているかどうか確認しあっていきたいと思っています。

今回も、聴覚支援学校にとっては非常に刺激（風当たり？）の強い内容で、身の引き締まる思いで参加させていただいております。事前配信で中尾先生が報告されていた絵画語り検査の研究については是非とも知りたいと思います。

○ろう教育や医療現場では、手話はあとでいいという考え方がほとんどである中、耳鼻科医が人工内耳の手術前に言語がない状態にしないためにも、早くから手話をやるのはいいと発言したのはよかったし、これからもそういう耳鼻科医が増えてほしいと思う。

○小学校で難聴学級の介助員をしています。人工内耳の子も増え子供たちの聴力は軽くなってきていますが、今日のお話でもあった手話の必要性は同じだと思います。大阪府では難聴児 1 人いれば地域の学校に難聴学級が出来るようになってから、仲間のいない難聴学級が増えていきます。当然専門性の無いまま聞こえない大人を知らない先生も多くなりました。こめっこやデフアカデミーなど、色々な仲間や手話と出会える場がこれからもっと広がる事を期待しています。

○乳幼児期から手話を取り入れて、子どもが周りと確実に伝わる、わかる状況を作っていくことの大切さを確認しました。こめっこの活動、素晴らしいと思います。河崎先生をスーパーバイザーとして、物井さん、久保沢さんはじめ素敵なるろう者と聴者のスタッフがいらっしゃること、うらやましい限りです。

福岡県でもやっと手話言語条例が制定されようとしています。本日協議の中であがっていた、子どもや保護者の手話獲得支援、家族支援をどこまで実現できるか課題です。また、耳鼻科のお医者様方に聞こえない子ども達の言語獲得についてもっと理解していただき、耳鼻科を受診した時点で子ども達の療育の情報を狭めないでほしいと思います。また、学校現場で先生たちが手話を獲得しやすいような支援も切に望みたいところです。

○現状認識が出来て良かった。各分野のスペシャリストの協力体制が素晴らしい。

○事前配信、そして今回のシンポジウム全てにおいて、教育の部分においても、乳幼児教育相談の保護者支援の部分においても、とても学び深い内容でした。聾学校幼稚部職員として、担任と乳幼児教育相談を担当させていただいております。手話を共通のコミュニケーション方法とし、子どもたち同士を手話で繋ぐことをねらいとして日々頑張っているところです。きこえの程度に関わらず、みんな手話が必要である、これは子どもたちを見ていて実感しています。子どもた

ちが、分かることを経験しているからこそ、分からないことがあることを理解していているのだと思いますし、それを年長さんになって他者に伝えられるようになったことに成長を感じています。手話で学び、それを日本語に繋げる、その為の手立てが、子どもにより、年齢により、家庭環境により本当に様々なので、一人一人向き合っています。事前配信の中で、特に武居先生の手話言語力と日本語力の評価についてとても興味を持ちましたので、そこも含め、目の前にいる子どもたちに今必要なことは何か考え、自分自身がもっともっと学びたいと思います。乳幼児教育相談についても、早期からの手話の大切さを、保護者が受け入れられる相談環境と活動をこれからも作っていきたいと思います。

○聞こえる乳児が両親や周りの人から、音声言語でのシャワーを浴びながら育つように、聞こえない又は聞こえにくい乳児が目からの言語シャワーも必要。その為に今の日本人の意識改革を進めて行く活動が盛んになって欲しい。耳鼻咽喉科先生の話も興味深かった。

○聞こえない子供達が手話を言語として身につけ、手話と日本語のバイリンガルに育つのが楽しみです。

○言語獲得のメカニズムと早期の必要性を感じた。

○河崎先生はじめこめっこスタッフ皆さんの思いが、多くの方に届くことを切に願います。そして、この活動がどれだけの方の支えになっているかを実感しました。そして、今回も私達でも出来ることがあるはずと改めて思い、勇気と元気、希望を頂きました。

○こめっこの活動、3家族の講演、言語学・医学の専門家のお話を伺い、乳幼児期の言語獲得には「こめっこ」「べびこめ」の役割や存在は大切であり親子にとって無くてはならないものだと感じました。

○ご家族がお子さんの成長を大切に共に未来へ飛躍している事に感動しました。

○「NPO こめっこ」の活動を地方の聴覚支援学校に勤務するものが知るには、好機であると思っており、今回も楽しみをもって参加させていただきました。小生、聴覚支援学校教諭ですので生徒に対して通常の授業を行っていますが、臨床心理士・公認心理師の有資格者であることから、心理的支援を並行して行っています。その心理的支援の場面では、個人単位の視点とともに家族単位の視点が必要

な場面が多くあったように思います。その意味において、当事者家族のお話を聞くことができたことは、実に有り難く感じられました。今後とも、このような学びの機会を提供してくださることを願っております。また、物理的な距離は離れていますが、今回参加できたように ICT 機器を活用することで、関与することが可能な部分が増えてきています。地方の聴覚支援学校教員や聴覚障がいのある幼児児童生徒に関与する心理専門職が協力できることがあればという願いも生じています。

○武居先生の「わかる」体験の必要性、とても納得できた。研究チームで、こめっこの活動ができること。本当にうらやましい。同じような取り組みが、地元でできたらいいなと思う。

○聞こえる保護者には、手話が下手だと心配する人が多いが、家族支援を事業で行っている立場でこのことは参考になりました。子どもは言語的なものを言語にする力を持つ、というのはとても心強いです。身近な現象をもって子どもの言語獲得を語る言葉には注意しなければ。この分野の研究が進むことを期待しています。

○言語が人間を作るのに、こんなに大切とは、自分の子育ての時期には思っていなかったの、聞こえる聞こえないに関わらず、もっと早く知っていれば良かったな、と感じました。これからも、日本語、手話、共に大切な言語として、もっともっと深く学んでいこうとおもいます。

○家族によるお話、またご家庭の様子動画、非常に参考になりました。感動しましたが、感動で終えるのではなく、行動に変えていきたいと思えます。

○保護者の方々のお話では思わず目頭が熱くなる場面もありました。また、先生方のお話を伺うことができ、早期に日本手話を獲得していくことの重要性を改めて感じました。木村様のお話の中で保護者の手話獲得のプログラムが必要という内容にとっても感銘を受けました。手話を学びたい、知りたいという気持ちが大きくなっておりませんが、実際には触れる機会が少なく、気持ちばかり焦っていると感じていました。今後、そのようなプログラムが確立され、手話言語の獲得がよりスムーズになると嬉しいなと思えました。まだこめっこに通い始めて2ヶ月ほどですが、こめっこでの活動を通して、親子共に手話に触れる機会が増えたことを嬉しく思っています。今後も子どもが豊かに自分の気持ちを表現できる方法を身に付ける為に、さらなる手話言語の獲得を目指したいと思います。

○こめっこで育った子どもたちが地域でもいきいきと手話でコミュニケーションが出来るよう社会も変わって行かなくてははいけないと感じました。

○武居先生のお話はいつも温かく、また、家族の様子がわかって安心した。

○子どもたちの言語習得にはゆりかごの時から環境整備が必要なんですね！応援します！

○聞こえないこどもとの接点はないのですが、聞こえない知人と接していると、日本語の読み書きで苦勞している様子をよく目にしています、義務教育の意味を疑ってしまいます、この国はなんと、非人道的な国なのか、国の無策が聞こえない人個人の問題に置き換えられてしまっている。と、ずっと思いは持っていますが、私にできるのは、聞こえない知人が持ってくる文章をともに読み、回答文を考えること位でした。このこめっこの動きが、大きくなって、日本の国全体が動き始めることを祈っています。いえ、祈ってはいけませんね、我々も出来ることはやらなくてはならないと思います。

○こめっこが子どもさんにとっても、家族にとっても、とても大切な場である事が伝わってきました。手話という言語を通して親と子の真摯な関わり方を見て、第一言語の習得の大切さを感じました。

○私の息子も難聴で生まれ、今回のシンポジウムを楽しみに視聴させて頂きました。共感出来る事、励みになる事、参考になる事、さまざまな思いになりました。

○こめっこさんの活動は以前河崎先生の講演の時にお話をお聞きし、スタッフさんも同行されていて少し存じ上げていましたが、今回活動報告を動画を見てシンポジウムに参加して保護者の方のお話は勿論ですが、スタッフさんの対応や保護者の支えになっている話は感動しました。健聴者に聞こえづらい子どもや孫が出来た時にはいろいろな場面で不安が生じると思います。当事者の子どもだけではなく、家族に対してもサポート体制がある事には特に驚きました。きっと青年期には家族みんなまで対等に話ができるファミリーが増えることができると思います。こめっこでの出会いは、親子の手話獲得習得の場だけではなく情報交換の場にもなっていると思います。こめっこの様な所が増えることを願っています。

○ご家族の方々のお話が非常にためになりました。指定討論も、3名のパネリストの先生方のお話も、短い時間ではありましたが押さえるべき大事なポイントをお示しくださったように思います。オンライン開催いただいているおかげで、地方からでもこうして参加できています。これはもっと広く、多くの関係者に知っていただき、大阪だけでなく全国すべてで行うべき内容だと思います。問題は人材…皆様の取組みにははるか遠く及ばないまでも、こめっこのような場が地元でも作れるようにもっと頑張らないとと思いました。

○保護者の不安に寄り添う、長い目でみた支援が必要だと感じた。保護者の思い、特に1人目の方の思いがとても共感できる話で訴えるものがあつた。全国に聞こえない子どものための日本手話獲得環境が整備される必要があると思いました。

○こめっこの活動を知ったこと、保護者の想いを聞いたこと、各専門家の話が聞いたこと、どれも良く、貴重な時間だった。

○我が家の難聴児は小学1年なので、もあこめ参加家族のお話しも聴けると嬉しいです。

○当事者としてご家族の生の声が聴けたのは、とてもいい体験でした。発表されたご家族に拍手とお礼を伝えたいです。こめっこの目指すことの重要性や意義が、年々確かなものとして伝えられることが嬉しいです。研究についても来年度の報告を楽しみにしています。

○こめっこは、私たち家族にとっても、息子の聞こえにくい世界を前向きに捉えることができる唯一の場所です。このこめっこを通じて、専門家の先生方や聞こえない、聞こえにくいお子さんを育てておられるご家族の方々が、それぞれの立場で発信されたことを拝聴できたことで、私たちがこの1年、考えてきた事や進んで来た事を振り返ることができました。毎週通うことがなかなか難しいのですが、時には悩みを聞いていただきながら、これからも皆様に支えて頂けたら幸いです。

○こめっこが全国的に広がると良いですね...他県でもろう児教育で思い悩んでいる方々がいると思うので連携が取れると良いですね。こめっこが全県にあると良いなあと思いました。こめっこパンパン繰り返し視聴したい！ろう児と一緒に出来たら楽しいだろうなあって思いました。

○事前配信のものも含めて保護者のこめっこへの参加で大きく変わられたこと、また保護者が子どもと手話でコミュニケーションすることの大切さがよく分かりました。ただ、今回のシンポで地元の聾学校（聴覚特別支援学校）との関係が今一つという印象を受けました。もしそうなら大きな課題ですね。今は、こめっこで育つ子どもの姿を見てほしいということでしょうか。ちょっと心配です。

○聴覚支援学校の子どもたちに対する教育方法が一人一人にあった個別支援を行っている、との一方で、集団としてはわかり合うことができない状況があるとは、矛盾した教育だと感じました。手話言語を獲得した子どもたちが安心して学べる環境が整っていない状況も残念な思いです。教員養成にも課題は及びまた、子どもたちの成長に伴いその段階ごとに新たな課題となっていくと考えます。スタッフの皆さまの更なるご活躍を祈念しております。そして大阪に留まらずどこにいても安心してコミュニケーションができる社会の実現を願います。

○親御さんの柔軟な考えが 子どもを良い環境に導けたと思います。もちろんこめっこの存在があってこそその選択ですが。親御さんが心身共にお元気であれば子どもさんも穏やかな気持ちで成長できると思います。無理せずこめっこを頼りに何でも相談できる場としてみんなで育てていってください。

○手話言語の必要性は理解したつもりですが、今回は就学前の、早期のお話がメインに感じました。そこから、どのようにして負担なく書記日本語へと広げたり抽象的な思考力を伸ばしたりしておられるのかを具体的に知りたいです。

○3組の保護者の方からのお話しがとても良かった。耳鼻科の先生のお話しも良かった。手話の必要性、人工内耳だけで聞こえない子供たちを救う事は出来ない事を、他の耳鼻科の先生方にも広めて頂けるといいですね。

○難聴児の親として同じ悩み、不安を聞けてよかったです。周りに助言してもらっても結局の選択は親がするから「本当にこれでいいのか?」「よかったのか?」をいつも思っていたのですが、同じように考えていた方がいて、今楽しそうに生活されている姿を知れて少し安心しました。また、手話の大事さを改めて知り、こめっこが近所にあつたらいいのに…と、とても羨ましく思いました。

○先進的なシンポジウムで心惹かれます。北海道でも広がることを願っています。

○私は手話を勉強しています。聞こえない子供(今は20代)と聴者の親との会話の難しさを、聞きました。

こめっこは本当に良い大切な施設です。手話言語法が批准された今、こめっこは全国に広げる当たり前の施設です。子供達の可愛い手話を応援したいです。手話への理解がドラマ等でどんどん広がって、日本手話へのリスペクトも広がって欲しいです。

○家族様の思い、願いの生の声が聴けてよかったです。今、仕事上で携わっているご家族の方にも、本日のシンポジウムの様子をお伝えしたいと思います

○ろう児が手話を獲得できる環境づくりを目指し、当県においても事業をしておりますが、なかなか手話に対する普及啓発が進んでおらず、手話の獲得にはまだまだ抵抗感を持つ親が多いように感じます。これまで、聾学校において実際に手話を使って話す子どもやその保護者との交流を目的とした活動も行なっておりましたが、コロナ禍でそれもストップしております。今回のシンポジウムにて、保護者の方からの声を聞き、事業担当者としても、手話の必要性や、ロールモデルとしての当事者との交流の必要性を再確認でき、今後もより一層取り組んでいかなければならないと思いを強めたところです。精密検査医療機関、療育機関、当事者団体など、多くの方が共通認識を持ち、聞こえない、聞こえにくいお子さんへの支援ができるようにしていかなければならないと感じることができた、シンポジウムでした。

○聾学校に勤務していますが保護者の気持ちを今回のシンポジウムを通して感じることができました。

○スタッフが事例紹介するのではなく3家族が自ら話す体験を聞いてよかった。木村さんと前川さんの話も聞いてよかった。

○私たち家族にとって、手話とは、こめっことは、と改めて振り返ることができ、家族でじっくり話して、考えをまとめる良いきっかけになりました。また、著名な有識者の方々にわたしたち家族のことを知ってもらうことができ、その発表をテーマに講演いただくことで、手話への向き合い方、ろうの子どもとの関わり方等たくさん学びを与えていただき、とても光栄でした。武居先生の「わかる経験を積み重ねる」という大切さが改めて心に刺さり、好きなこと、やりたいこと、面白いと思うこと、なりたい自分、すべて分かるという経験が出発点になっているという気づきとともに、この学びを常に胸にこどもと向き合っていく

いと思います。

○それぞれの保護者の気持ちの変化や親としての思いがとてもよく分かりました。また、専門家の先生方のお話もとても参考になりました。

○こめっこの活動実態が良くわかりました。ケースの異なる3家族のお話は大変参考になり、聴覚障害児の子育てのサポート体制ができていると思いました。特に当事者の立場としての木村晴美さんや手話に理解のある耳鼻科医の起用は良かったと思います。ただ、当事者スタッフはこめっこで具体的にどのような活動をされているのか、団体としてもスタッフに対して手話や教育者としての研修は実施されているのか？もう少し突っ込んでお伺いしたかったです。これから生まれてくる聞こえない子どもたちのためにも、今後も活動を頑張ってください。

○今回、保護者の方のお話を聞け、お子さんが成長している動画も見ることができ、とても明るい気持ち、先が見えたような気持ちになりました。私は聾学校に勤務しています。手話をコミュニケーションの主として子供達と学習していますが、残念ながら私ができるのは日本語対応手話です。今回保護者の方の手話学習会のプログラムについても触れていましたが、きこえないきこえにくい子供達に関わる者への手話学習プログラムも必要になるのでしょうか。

○保護者の方々のお話がとても響きました。こめっこに出会えた保護者とお子さんはとても幸せです。一方、そこにたどり着けていない保護者やお子さんたちがこめっこやこめっこのような団体と関わり、言語としての手話獲得の機会を持てるのだろうかと思います。

○ご家族やそれぞれの分野の専門家の方々が、話し合いながら双方に理解を深めていく様子がとても素敵でした。

○(事前配信も当日も)保護者の話がよかったです。私の周囲では手話獲得に対して前向きになれない教員や保護者が多く、こめっこの保護者のような出会いがあればいいのになぁと、うらやましく思いました。

○お父さんたちの話がとてもよかったです。あの部分を今回見られなかった若い保護者に見せたい。

○今回こめっこに通う親の感想を初めて聞きました。やはりこめっこの意義は大きいと実感しました。

○保護者の体験を聞いて良かったです。こめっこの活動は素晴らしいです。阪本浩一氏の考え方は賛成です。このように全国に広めてほしいと願っています。

○今回も参加できて本当に良かったです。有意義な時間でした。一点思ったのは、「手話」ではなく、繰り返される「日本手話」という言い方の使用に、「手話」でいいのに、ということでした。私自身は日本手話に魅せられ、もっと知りたいと講座に通いろう者から学び、書籍も何冊か手元に置き今でも読み返しています。でも、敢えて「日本手話」という言い方ではなく、また「日本語対应手話」でも「中間手話」でもなく、「手話」でいいのになって感じました（これは昨年にも感じたことです）。

○きこえない、きこえにくい子どもにとって、手話の獲得、習得の大切さはよく理解できる。当市でも難聴児手話獲得支援事業で、ろうあ協会、親の会とともに、こめっこの取り組みを勉強しながら進めているところである。しかし、学齢期に上がり、地元の学校に通学するようになると、普通学校の教師には、手話獲得、習得の必要性どころか、きこえない、きこえにくい子どもへの対応についてほとんど知識も技法もないのではないかと思われる。シンポジウムには、ぜひ地域の特別支援学級の教師も呼んでいただき、意見を聞きたいと思う。また当市の取り組みにおいても、専門職と連携をとりたいと模索中だが、例えば、言語聴覚士の養成課程のある大学にアプローチしてみたが、ほとんどが、嚥下障害、構音障害、などを専門としており、聴覚障害を専門としている先生、関係者はごく少数（1人）であった。言語聴覚士など聴覚障害にかかわるであろう専門職への働きかけなどされていたら、お聞きしたい。

○聴こえない・聴こえにくいお子さんをもつ保護者の方にとって、こめっこは安心して過ごせる環境であり、非常に心強い存在であるということを経験して実感しました。また、それぞれの分野の専門家の方のお話を伺うことで、それぞれのお立場での考え方などがわかりました。

○ご家族の生の声をお聞きすることができ、必要性や意義などよく伝わり、有意義なシンポジウムだったと思います。ご準備や進行などとてもご苦労されたと存じます。どうもありがとうございました。

○今回は家族の生の声が聞けて良かったです。研究結果が発表された後、各都道府県にこめっこのような場が作られるとうれしいです。その際にはこめっこのカリキュラム(商標にする)を参考にすれば、一から考えるよりも楽ではないかと思います。

○様々な分野のご専門の先生方のお話を伺える大変貴重な機会です。報告書にもまとめて下さり、後でいつでも見返せるので大変ありがたいです。シンポジウムの報告書は私にとって手話を学んで手話で育っていく際の手引き書といいますか、こんな時はどうすれば?と悩んだり、迷ったり…事あるごとに報告書を読み返しては、参考にさせていただき、背中を押していただいています。

○現在、地域の子育て支援のお手伝いをしています。今回のシンポジウムは家族支援と子どもの成長の関係性を知ることができました。また、こめっこの取組みから手話言語習得の機会を考える子どもとの向き合い方を学ばせていただきました。思い描くことと現実のギャップ課題に悩みますが、今日の「学び」を今後の地域活動に繋げていければと思います。

○自分の感じている事が確信に変わり、いい刺激になりました。

○保護者の体験談のなかで、子どもが相談したいときに母親を介せず父親と直接話ができる…という言葉がとても印象的でした。私自身、両親がろう者で、幼い頃から、何故、親子の会話の通訳をしないといけないのだろう…と思うことがありました。父も、どうして手話を覚えてくれないのか?とお酒の力を借りていつも言っていました。祖父母も口話教育の流れで、手話を使ってはいけないと先生達から言われていたようです。それを父には言わず、ゴメンな。今からじゃ覚えられないんだ…と。とても寂しい気持ちになったことを覚えています。保護者にとっても聞こえない子どもとの関わりはとても不安だったと思います。その中でどんな人に出会うのか、どんなアドバイスを受け、変わっていくのか…とても大事だと思います。私もこれからいろいろな情報を得て、保護者に安心感を与えられるような者になりたいと思います。

○親御さんの話を聞くことはなかなかないので、興味深かったです。今後活動するうえでも参考になりました。

○子どもが聞こえないと分かったとき、親が途方に暮れることが無い社会にしていかなくてはならない。手話であれ、音声語であれ、それはその人にとっては

かけがえのないコミュニケーションツール。補聴器や人工内耳を着けていても、手話は身につけるべきという考えに賛成。言葉は訓練するものではなく、楽しむため、分かるため、表現するためにあるもの。こめっこの保護者の皆さんとお子さんの笑顔が続くよう、私も手話の活動を続けたいと思います。

○昨今のオーディオズムに危惧しているところです。補聴器人工内耳を外せばきこえないきこえにくいのにといつも思いますが。私は、日本手話はできませんが、日本語対应手話より日本手話の方がよく分かります。気持ちが伝わってくる感じがするからです。

○聴覚支援学校の教員も対应手話はできても、日本手話を学んでいる人は多くないと思う。特に県に1校しかないような場合は、教員も日本手話を学べる場があるとよいと思う。

○聾学校教員免許状1種の授業をオンラインで受講中です。講師が常に、聞こえない子どもに言語を育てるのは、見て分かる手話が望ましいと言っています。こめっこの活動に参加した保護者の方のお話を聞いて、実感しました。家庭でも手話を用いて、みんなが通じるコミュニケーション手段を選択することで伸びていく力があると思います。なかなか、保護者の方まで身につける気持ちになったり、家庭での手話の使用は、自分の職場では少なかったようなので、とても素晴らしい体制だなあと思いました。

○初めて参加させていただきました。保護者の方々がどのようなお気持ちもちながら、子どもさんと関わってこられたか、手話がどれだけ大事で必要な存在なのかを体験談を通して知ることができ、本当に良かったです。本年度より私は熊本聾学校で講師をしております。重複学級の担任として日々、子どもたちと関わらせていただいておりますが、言語としての手話という認識が表面的にしかできておらず、子どもたちの必要とする学びの環境が十分に整えられていなかったと、痛感しました。どうしたら、もっと子どもたちや保護者の方々の心に寄り添った関わりができるのか、手話という言語の中で育ちを支えていけるのか、まだまだ力不足な今の自分ではありますが、精一杯頑張っていきたいと改めて決意させていただきました。

○聴覚支援学校3年目の職員です。手話で会話することにまだまだ必死ですが、目の前の子どもをバックアップすることにも目を向けて、保護者との連携を深めて行きたいです。

○事前配信を見たりシンポジウムに参加し、様々な方の言葉をお聞きすると、普段なんとなく考えている自分の思いが確かなものになってくるよう（頭の中が整理される）です。

○保護者の生の声を聞いてよかった。わが子の聴覚障害がわかり、こめっこにつながった保護者はまだまだ少ないのでは？耳鼻科医や聴覚支援学校との連携が進むことを期待する。

○大阪府手話言語条例のもと事業内容がよく分かった。特に事前配信の保護者の話が良かった。地元では手話言語条例制定のため取り組んでいるが、行政の理解がなかなか得られない。行政にも見てほしい内容だった。

○難聴児を持つ親として今回のシンポジウムはとても勉強になりました。こめっこが通える距離にないことをとても残念に感じるほど素敵な場だと思いました。

○ご家庭での手話でコミュニケーションをする動画を各家庭から募集し、まとめて編集して見てもらったら、これから手話を活用していこうと思っているご家族や、子供とのコミュニケーションで悩んでいる親御さんにとっても「こんなに楽しく手話で会話できるのか」と励みになるかと思えますし、こめっこに通ってここまで家でコミュニケーション取れるようになりました！という発表できる場になり、楽しく癒やされながら手話の魅力をみんなで理解できるのではと思いました。

○社会の人によりオープンに情報を提供し、手話を習得できる環境を作ることが必要である。

○子どもの成長において、早い段階から手話に触れて、習得する大切さがよく分かりました。また、ご家族にとって必要な支援だと思いました。

○知識が深まった。もっと早く知っておけば、友達の息子の事で相談に乗れたのになぁと思った。

○1部、2部の組み立て方が秀逸でした。弱肉強食の社会を誰一人取りのこさないみんなで作る社会に変えていくのは、こめっこの構想から現在にいたるまでの全ての関係者が支え合いながら歩んできた誠実で着実な行動と実践に大い

に学べると確信できました。

○乳幼児のきこえとことばの相談を担当しています。状況の違うご家族の貴重なお話を直接伺うことで、今後の保護者支援に生かしていきたいと思いました。ことばの獲得のための言語環境づくりの大切さを実感できました。また、耳鼻科医としての阪本先生のお話も聞くことができ、大変良かったです。

○保護者の話はとてもよかったです。まだ幼いお子さん達なので、今後の成長が知りたいですし、その点でもこめっこで研究を続けて行かれることはとても有意義だと思います。残念ながら、私の地域では、乳幼児期からの手話の必要性について、重視している人がとても少ないです。こめっこは大阪で活動されているので、私の地域でも何かできないか（何もないわけではないのですが、取り組みの姿勢やスタッフの手話力や意識などがこめっことは違います）と思っています。見学させてもらったことはないのですが、一度見せてもらえると嬉しいです。そして、保護者のお話を全国のろう児を育てる保護者たちに是非聞いて頂きたいと思いました。

○手話通訳をしている者です。事前配信も含めて、さまざまな背景を持つ当事者家族の皆さんのお話をうかがうことができ、大変貴重な機会をいただきました。自分の言葉で思いを伝え、関わる人と通じ合える環境の大切さ、その必要性を強く感じました。

○今回も、いろいろな立場からの情報が聞けて良かったです。今回は特に当事者家族の話が聞けて参考になりました。東広島市にも様々な形の親子がいます。聞こえない、聞こえにくい子どもにとって手話が習得できて、自分の言語で心の表現ができるようになる手助けができたらと思います。日本手話には程遠いですが、「オーディズム」「ディナーテーブル症候群」など新しい知識を学ぶことができました。

○こめっこのような手話環境のある集える場が全国に広がってほしいと思います。

○こめっこさんに通っているご家族さんの生の声が拝聴できたことがとてもよかったです。実際の子育てに即した不安や困りごとを知ることができ、またそれがこめっこさんに通ううちに楽しみに変わっていった過程を見て、親子ともにわかる経験が非常に重要であることを改めて感じました。こめっこさんが特に

乳幼児期のお子様を対象としているため、シンポジウムや講演会では乳幼児期のお話が多いとは存じますが、学童期のまだ手話に出会っていない、手話とのかわりが浅いお子様に対するこめっこさんの活動を今後お聞きしたいです。

○オンデマンド配信もシンポジウムもとてもよかったです。これからも末永くこめっこという場所を続けて頂きたいです。

○私は言語聴覚士をしております。少しですが学生時代に手話を学んでおりました。現在は家族の都合により職にはついていませんが、難聴のお子さんの療育は以前より興味がある分野でした。ふと目にしたHPでのシンポジウムの情報に興味を持ち申し込みをさせていただきました。それぞれのご家族の体験、とても興味深くどのご家庭でもお子様が「わかる」環境を作り守り、手話を使って通い合っていたのだなぁと過程を見て強く思いました。言語聴覚士としてもできることをもっと増やしていけたらいいのにと強く思いました。

○事前配信の段階で感銘を受け、私のシンポジウムはそこでもう満足していたのですが、それ以上に当日はこめっこの重要性を再認識しました。地域としての規模の違いはあると思いますが、先を見据えて条例を制定するという大事な部分がわが県では抜けている部分だと痛感しています。お話の中にあっただ、一人一人に合わせると、誰かが我慢をしなければいけないというのは本当にそうだなと思えました。共通言語で学べる場所の重要性をもっと周知すべきだと思えました。何かできるといいのですが、難しいですね…。

○ご家族の生の声を聞くことができ大変勉強になりました。

○次回は文科省や厚労省、国会議員など、「ちょっとよくわかってない人たち」にもしゃべらせるといいかと思えます。

○子どもの手話言語獲得・習得について、また手話言語についても様々な研究が進みつつあります。今回のように滋賀県にいながら専門家の話をお聴きする機会をいただき、たいへん感謝しています。

○今回も大変充実したシンポジウムになり、多くの収穫を得勉強させていただきだけでなく、子ども・家族の成長と発達の事実を改めて敬意と感動を覚えた次第。新しい年も「こめっこ」が、この”大道”をしっかりと進み、発展していくことを心より願い、そして確信しております。

○岩手県立盛岡聴覚支援学校、幼稚部で教員をしています。数年前に岩手で聴覚障害者教員の全国大会があった際、物井さんが参加されており、その時にこめっこの存在を教えてくださいました。それをきっかけにこめっこのような団体が岩手にもあればよいなあ…と感じながら過ごしていました。正直、学校現場でできることには限界があり、教職員という立場のため転勤もあります。聴覚障害に関わる専門性がなかなか継続されにくい現状があります。また、広い岩手県では本校に通学することが難しい場合も多く、様々な地域で学んでいるお子さんも増えてきました。今回のシンポジウムでの3家族からの率直な話題提供は、心を揺さぶられるものでした。ぜひ、いろいろな方に聞いてほしい、こめっこを知ってほしいと感じています。

○聴者の御両親のお考えが非常に心に響きました。

○保護者・先生方の視点から学びがあり、ろう教育の大切さを再確認できました。

○子どもがきこえていないとわかった時の気持ち、そしてそこからお子さんへの子育てで何を大切にしてくられたのかを3人の保護者の方から伺うことができました。ロールモデルがおられるこめっこの果たす役割は大きいとあらためて思いました。手話言語と日本語（読み書き）の獲得について今後の取り組みを拝見したいと思っています。阪本先生が人工内耳の手術時期について1歳までにと考えている耳鼻科医が多いとお話しされていました。今後その辺りの議論もどうなっていくのかと思っています。

○こめっこでろう児だけでなく、聞こえる保護者がろうスタッフというロールモデルに出会えることが親に安心感を与え、とても大切だと保護者の話を聞いて改めてわかった。コロナ禍での対面活動の制限をマイナスに終わらせるのではなく、毎日配信のきっかけにして広げた取り組みが素晴らしい。この手話との出会いを全国にいる他の子供達に配信する仕組みは難しいのか？全国でろう学校の児童数が減っている現状に危機感を覚える。地域で手話に出会う機会がなければ、手話を知らず「全て分かる」経験がないまま大人になる子が増えるのでは？全日本ろうあ連盟などとなんらかの連携は難しいのか？手話の大切さに気づいている大人同士が協力して、子供達と保護者のために全国に「こめっこ」と願ってしまう。ろう学校との連携について話を聞きたかった。

○そっかあ、そうなんだぁ！と思うことがたくさんあり、継続することが大事ななど感じました！

○現在聴覚支援学校に所属しているが、「手話が音声ベースの子ども、手話ベースの子どもをつなぐ共通言語として」というお話をお聞きでき、今後の教育現場でも考えいかなければならない視点であると感じた。また、保護者の体験談がとても参考になった。

○こめっこのような施設が各都道府県に必ずあることが必要だと思います。

○保護者の思い、気持ちの変化など、とても、貴重な話が聞けました。活動についても、ねらいや様子など、とてもわかりやすかったです。実際に活動している様子をさらにみたくなりました。

○親の話は続けて行って欲しいです。

○手話の習得には、繰り返し学習が効果的、という姿勢に、共感、納得できました。

○家族の方々のお話を伺うことができたのがとてもよかったです。また、前川先生、木村先生のそれぞれの立場からの意見や解説も勉強になりました。これから研究がどう進んでいくのか楽しみです。全国各地での取り組みの参考にできるように、今後もオンライン配信形式をぜひ続けてください。

○聴の親にとって、聞こえない子の誕生で子育てに不安があるようです。考え方を換えれば、この子の言語を学ぶ機会をいただいたと考えればと思いました。子のいない第三者的な私の勝手な考えです。日本の耳鼻咽喉科では、まだまだ聞こえる・話せる子に近づけるよう勧めているのでしょうか。手話も選択肢に加え聞こえない子の親に説明していただきたいと思いました。

こめっこの活動は素晴らしいと思います。今後も頑張ってください。

○大人のろう者との関わりはあります。子供の時の様子を教えてもらうことはありますが、親として子育てのときにどう感じておられるのかを教えてもらえてとても有難かったです。親のそんな思いの中で、今、活躍されている方々のように大人になって活躍されていくのだらうと想像します。

○保護者の方々の実体験が聞けたのは、とても貴重な学びでした。また、各専門分野の先生方のお話から手話はサインではなく言語であること、人工内耳の手術の時期等の内容(耳鼻科医は言語学の専門家ではない)については再認識する

とともに学びになりました。

○音声として言葉が出る前に理解があり、指差しや身振りがあることを言われたなーと思い出しました。

出演のお父さんお母さんがまず第1に子どもがどうしたいのかを尊重して、その子の理解できる世界を提供したいと考えていらっしゃったことが同じ親として見習わないといけないと思いました。

○第1部・第2部ともに家族それぞれの思いとこめっこの寄り添いのすばらしさを感じました。多くの人々が日本手話を学び、理解出来る社会ができたらと思いました。手話サークルに参加して私自身も成長したいと思います。

○皆さん子育てに一生懸命でこめっこに出会って、子供さんへの考えや親としての考え方を見つけているのがよくわかりました。それにはスタッフの方々の対応運営のすばらしさに感心しました。この“こめっこ”の大切な場所がある事を知る事が出来うれしかったです。

○こめっこ体験談を聞いて、親子で一緒に手話言語の自然習得を楽しく学びながら成長している様子が良く分かりました。

○人生の若い時に分かる経験することが大事であることがとても印象に残りました。

私自身もくり返しの学習が大切と聞き、これからの手話学習をろう者の方達と交流しながら、改めて頑張ろうと思いました。

○こめっこに通っている保護者の方々の話が聞けて良かったです。実際に日々感じる子どもの成長の姿等を話していただき、改めて“わかる”体験の大切さ等を思いました。

○実際に子育てされている保護者の方から生の声が聞けたことは本当に新鮮でした。障害の程度（全く聞こえない、人工内耳で聞こえる、少し聞こえるなど）が違っても、小さい頃から手話にふれることは『わかる経験を保証する』ために本当に必要なことだと改めて実感しました。お子さんとのやりとりの動画があーこうして遊びの中で、理解して使って通じて、心が踊っていくのなーということを実感してわかりました。百聞は一見にしかずですね。

○保護者の発表を聞き、ろうの子どもの手話獲得により、成長している様子がかがえた。0才～5才で「わかる」という経験を多くすることの重要性を感じた。人工内耳をしても補聴器をしても手話を獲得することの大切さ、効果を広く（耳鼻科医、ろう教育）知ってほしいと思った。

○手話を知ってから、まだ日が浅いので理解していない事ばかりです。ろう者にとっては聞こえない人にとって当たり前であるとのお話に大変考えさせられました。

○親と子とまわりの人で共通のコトバで通じることの大切さ、わかりました。わかる喜びが次の学びにつながるのは、大人も子どももろうの人も聞こえる人も同じだなと思いました。

○ご家族の話題提供より、こめっこの活動が様々なご家庭のコミュニケーションの基礎になり、欠かせないものになっていることがよくわかりました。また、子どもも親もこめっこの信頼関係の形成がなされていることがわかりました。ネイティブサイナーのかかわり方、ろうスタッフ・聴スタッフのかかわり方、おそらくそれぞれがそれぞれの立場からよく考え接することができている結果なのだなと思いました。こめっこに参加した子供たちが大人になったとき体験したこと感じたことを話しをしてもらいたいと思いました。

○3組のご家族の話が聞いてよかった。お子さんの成長の様子が動画で見れたのもよかった。ご両親やお子さんにとって「こめっこ」はなくてはならない場所だとよくわかった。オーディズムの問題はまだまだ私たちの聞こえる人の間にはあると感じた。こういったシンポジウムはお医者さんや大学の先生方にとってもとても大事なことだと感じたので、こういった機会を静岡県でも持っていた方がよいと思った。

○こめっこに、保護者、子どもと一緒に通うことで、子どもは手話の獲得をし、わかる体験を積み重ねて成長していき、また、保護者も子どもの見方が変化し、自身も成長していき、親子関係も良好で、こめっこが家族や子どもたちにとって、とても大切な場所であり、子どもも保護者も大好きな場所であることがとてもステキだと思いました。手話を使って人と向き合っていると実感しているという父親の言葉がとても印象的でした。武居先生の話では、分かった経験を沢山小さいときにすれば、その後、分からない状況になったときに分からないという自覚が出てくるということが確かにそうだなと思いました。また、客観的評価のテ

ストを作り実施することで、子どもの成長を客観的に評価できる事がとても画期的だと思った。来年のシンポジウムの結果が楽しみです。酒井先生の話から、こめっこで体験したことを、家でさらに親と一緒に楽しむことで、記憶の深まりができるということから、こめっこ動画や、DVD がとても効果的な取り組みであるということがわかりました。津守・稲毛式乳幼児精神発達診断を使って母親から聞き取り、発達診断をするということでしたが、言語の領域について、日本語、手話言語どちらについてというわけではなく、どちらかでできていればよいということでしょうか。

あとがき

コロナウイルスで初めての緊急事態宣言がなされた2020年2月から3年間、対面活動の停止、活動人数の制限、マスクの着用など、さまざまな困難に出会いました。けれど、こめっこの活動はけっして足踏みすることはありませんでした。リアルタイムの遠隔こめっこ、日々お届けする動画配信、遠隔個別ミーティングでの遊びや絵本よみ、小学生は遠隔グループミーティングでゲームをしたりおしゃべりしたり…。話題提供やディスカッションで話題になった「手話ばんばん」を沢山創り出せたのも、コロナ禍の活動を豊かで心軽やかなものにしたという希望がエネルギー源になりました。そんな願いを追い越すくらい、子どもたちはぐんぐん成長し、家族の笑顔がはじけています。「べびこめ」から「こめっこ」へと代替わりを迎える季節。この春は、14名の3歳児がべびこめを卒業しました。小1を迎える“卒こめ”さんは11名でした。

第Ⅱ部パネルディスカッションに先立って、昨年末、話題提供者の3家族が、こめっこのスタッフ研修会で予行講演をしてくださいました。本番より少し余裕がある時間の中で、子どもたちと歩んだエピソードを皆で思い出し、質疑応答をとおしてご両親の真の思いに触れることができました。子どもたちのありのままを心の底から受け止め、愛おしく誇らしく語られる姿に、スタッフは嬉しくて泣いてしまいました。当日はきっと、ご参加いただいた方々の心に、同じ感動が届いたことと思います。

大阪府の手話言語条例は、手話の力が評価される社会を目指しています。昨年6月には5周年を迎えました。最近では、0歳台からの参加が多くなって、それと共にパパの参加も増えて、「べびこめ」がとても賑やかです。さまざまなきこえ、さまざまな聴覚活用、それぞれの成長ペース、いろんな個性…。でも、日本手話という言葉がこめっこ活動のベースにあります。そこは決してブレない。話題提供のご家族、指定討論・コメンテーターの先生方と共に、私たちの理念と意義を確認できたシンポジウムでした。

日本手話という「ことば」を自然に吸収し、聴覚活用も含め、各々の道筋でバイリンガルに成長する子どもたちを目の当たりにするようになりました。実践と研究がバランスよく結びつく活動を、今後も大阪府と連携しながら、関連機関の方々のご協力を得て、研究チームメンバーと共に展開してまいります。

シンポジウムの配信を終えて、ふ〜っと息をついたとき、木村先生の「オーディズム」についての発言が脳裏に残っていました。その後、パソコン画面に留まって、話題提供のご家族と和やかに会話し、「応援していますよ！」と伝えてくださっている木村先生、前川先生と保護者の表情を見つめながら、こめっこ活動の支柱は「オーディズムへの挑戦」なのだ気づかされました。

今回も多くの方々アンケートに答えてくださいました。自由記述にて寄せられた貴重なご

意見・ご感想に学び、励まされて、今後も一層努めてまいります。

2023年3月末日

大阪府手話言語条例評価部会長
「こめっこ」スーパーバイザー
河崎佳子(神戸大学)

この冊子は、令和4年度日本財団の助成を受けて作成しました。

